

くはやく。いもハイ、ト、かつてゆくと、ていしゆ
 來り、あにか御用でござりますか。侍にしていすか。
 身どもがららこのおしやらくサア買うべいたアかひ
 をつたが、にしにいはないこたアわからない。一夜でもお
 ら、そばにねまりをるもんだから、あじやかしたこんで
 アノびたいがひよつと孕をるまいもんでもない。萬一懷
 妊どもいたしたとつて身ども決して構はぬこんだがにし
 承知だんべい。ていしゆ、コリヤ御念だのし。アニ女郎衆
 にそんなこたアござんしない。侍、ムンネないこたアな
 いでもあんべいが、萬々一さやうのことがあつた時は、
 身ども年寄で國がたどもへきこえては面皮にかゝはるこ
 ともし。コリヤアやんだア、やめにしますべい。北ハ
 ハ、お武家がたはかたい。ナニそんなことかまう
 もので。侍、それとも懐胎いたしてもくるしくないとい
 ふ證文でもかいて、つん出来めさるか。ていしゆ、イヤそ
 れは異なるもの。アニわし承知してをればよくござりませ
 ア。侍にし急度請合か。そんではやくおしやら
 くサアよこしてくれさんせう。おら、はもうそへります



べい。ていしゆとつくにあつちらへお床とつて女郎衆がまつてゐずに、はやくござつておかたげなさんし。侍心得
 た。ドリヤえつとこなト、からかみをあけてとなりのざしきへねにゆく。彌モシ御ていしゆ、わつちらの女郎衆
 は。(ていしゆにがりきつたかほして)「アニだめなこんだに。こなたしはもうおけつちやアト、いひすて、ゆきさう
 にするを、北コレ、どうするのだ。おいらにおけといふはなんのこつた。ていしゆ、あんのこんでもない、おのれ
 らに出さず女郎はない。コノよたものどもめが。北ナニとはうもねへ。コレへおいらに出す女郎がないアとんだべ
 らぼうをぬかす。侍のつかふかねもおいらのかねもおなじことだ、なぜ女郎めらを出しあがらぬ。ていしゆ、コリヤあ
 んまりぐさるな。親代々から旅籠屋商賣しるをとこだ。てつべんからおのれらがなりそぶり此ちだん栗眼でめつけて
 おいた。なるくいふとつきあがつてだめいふな。あてこともないことをくせると、しやつつかまへてさらけ出すぞ、
 ト、大ごゑをあげてむしやうにりきむ。二人はいつかうにがてんゆかず、大きにせきこみ。彌コリヤお客さまに向
 つてふてへやつだ。此やろうめが。ていしゆ、アニ頭ないことをぬかす。道づれがお侍さまだからぶつちやつておいた
 が、もううらがうちにおこたアならない。夜食くれたを損にする。出ていけつちやア。おのれらをとめると、うち
 の名題をおぞくするわ。北エ、こたへられねへ。あたまのかけをひろはせてやらうとト、つかみつかんとする所
 へ女ぼうはじめ家内のものどもかけきたり、兩はうをしづめる。いつたいこれはやどのていしゆ、ふたりのものをご
 まのはひとおもひてかくはいふなり。そのわけといふは、すべて道中のごまのはひといふものは、身もとよきたび人
 と見せんために、わざと主人と家來のやうに、とりこしらへてあるくことあるやつにて、かたちばかりは旦那と供のや
 うに見ゆれども、えてはことばつき、あいさつはうばいのごとく言ふことありて、かたちとことばと、つりあはざる
 ことあり。旅なれたる人は、よくわきまへてをることなり。彌次郎きた八、かゝるわけはしらず、只當座のしやれに、
 主家來のごとくしたるが、供の北八のことばつき、だんなの彌次郎へむかつてのあいさつ、そくはぬやうなれば、て

いしゆこれをきよめてさてこそごまのはひと、すいりやうして、このさわぎとなりたるなり。されどもふたりはなんの覺えもなきことゆゑ、はらたちて、大げんくわとなりたるが、だん／＼家内のものにとりしづめられて、ていしゆのうたがひふたりのなぐさみにしたること、さつぱりとわかり、ていしゆもあつこうしたるをいろ／＼あやまり、はてはわらひとなり、きげんなほしにとて、うちにあはせし、女郎ふたり出すつもりにて、みな／＼かつてのかたへゆく、やがてめしもりふたり、ひとりの名はおかま、ひとりはおなべ、打つれて出きたり、彌やどろくとはうもねへ。こゝの宿録やどろくめが、おいらが事をごまの灰だといつて、おめへがたの顔を見ずにしまふ所、あぶねへこと。北きたさういつても、あんまりべらぼうなていしゆぢやアねへか。おかま、わしとこの旦那さまは、ずだいむきて、常住じやうぢゆうお客さまに、はらアつゝたゞせませんが、そんだいにやアあとはござんしない。おなべ、おかまさまのへ、わしのへ、ふとがてつかい聲をしようと、おそがくてやアだがな。おかま、ホンニおきやくさまへはやく出すとおもつた所、肝きもがいてならんだのし。彌やどろく「そんならもうねやせうか。なべ、夜がふけず、おかたげなさんし。ト、よぎふとんとりにゆく。彌次郎やどろくのそばへすわりたるはおかま、北八きたはちのそばへすわりしはおなべなり。きりやうとりなり、おなべのかた、ばつくんすぐれてよきゆゑ、彌次郎やどろく大ききのびて、ふたりのみざるをさいはひと、彌やどろく「コウきた八、手めへに願ねがひがある。なんとしろものを、とつけへてくれねへか。北きた「イヤ／＼さうはとらの皮さ。彌やどろく「手めへのはうがよつぽどい。おらアあいつにしてへものだ。北きた「よしてもおくれ。ト、此内こゝはや、ふたりの女郎來り、とこをとり、まん中をびやうぶにてしきり、兩はうへわかれてねる。彌やどろく「なるほど、旅をすればいろ／＼の目にあふものだ。おいらがやうな正直しやうじきしやうだう正道しやうだうなものを、こゝの亭主ていしゆはむごへ男だ。かま、ホンニあの／＼へ、おまいさんのは、さうでもないがのし、あつちらのふとは、あんだかしらないが、をかしげなふとだとわしどもおもひましたが、あのふとは、供ともの衆しゆはあんだのし。彌やどろく「あつちらのやらうか。おいらが供ともさ。かま、おまいさん、あにを商賣しやうばいさつせるのし。彌やどろく「おいらの商賣しやうばいは金貸かねかさ。上かみがたの出

店たなは吳服屋ごふくや、田舎の出見世でけんせでは酒もつくる、醬油しょうゆもつくる。かま、お供おとものふとは、あにをさつせる。彌やどろく「あいつはなにもしねへ。おいらがところの居候いこうで、わつちが世話をしてやらねへと宿しゆくなしだから、斯かしてつれて出るにも、とき／＼のものをきせて、わつちとおなじやうに女郎衆やどろくもかつてやるし、云分いぶんはねへが、性しやうがべらぼうだから、心やすだてをしてふざけるにはこまりものさ。かま、ホンニさう見えるわのし。彌やどろく「しておめへそつとあつちらの女郎衆やどろくへ、さういつてやりなせへ。あの男は二三年あとにがうてきと瘡かさを煩わづつて、骸かたぢうがくづれた所、わつちが金を出して湯治たうぢにやつて、またすこし再發さいはつのきみがある。うつらねへやうにしなせへと、呼出よびだしてさういつてやりなせへ。コリヤア供ともの男をわるくいふやうだが、かはへさうにたつた一夜で、あの子へ瘡かさをしよはせるがきのどくだから。ト、いふはきた八やがしろものうつくしきゆゑ、彌次郎やどろくとりかへんといふに、きかざるゆゑのいしゆがへしに、きた八やをふらせんと、この女郎やどろくからふきこませるつもりにて、かくはいふなり。びやうぶひとへだてゝきた八やこれをきゝすまし、北きた「コレ／＼となりのおいらん其客人ききやくじんに氣をつけな。その男は性しやうが泥坊でいぼうだから、枕まくらさがしをしようもしれねへ、あたまのものや、鏡かがみ入いれに氣をつけなせへよ。彌やどろく「ハ、今おれがいつたことを聞きつけたな。コウそつちらのおいらん、人のことをいふ其男そのおとここそ油斷あぶらたんしなざるな。さつきこゝの亭主ていしゆがいつたとほりごまの灰かだもしれねへハ、ト、たがひにわるくいふを、ふたりの女郎やどろくまじめなかほして、きゝるあたりしが、てうずにゆくふりして、ふたりとも出てゆきしが、ふたゝび來きらず。彌次郎やどろくなまなかなこといひ出してもとねにしかね、ましくしとして、彌やどろく「コリヤきた八、手めへもひとりだな。つまらねへことをいひ出して、しろものを取逃とろがした。コリヤもう、うしやアがらねへわへ。北きた「おめへがわりい。せつかくもてさうであつたものを、埒ちやくちはなくしてしまつた。ト、此内こゝふたりの女郎やどろくは、彌次郎やどろく北八きたはちのしやれにいひたることを、まじめにうけてきもをつぶし、さう／＼うちのていしゆにこのことをいふと、ていしゆは

せんこく北八にひとつくらははされたることを、むねにもちてゐるところなれば、これをきよめて、さてこそすありやうのとほりと、男どもをおこし、てんびんぼうをひつさげて、ざしきへふんごみ、ていしゆ「コリヤ／＼ごまの灰めら、うらがにらんだとほり、おのれらがくちから、やく／＼性體をぐぜり出しをつたは天命だ。出てつけつちやア。彌イヤ又しても、ごまの灰／＼と、うぬふてへやつだ。ていしゆ「今女郎どもへおのれらが、わがてにさうぬかしをつたらにヤアちがひはなからず ト、むりにふたりを引出さうとするゆゑ、また八はねおきて、ていしゆのてんびんぼうをひつたり、なぐりまはすひやうしに、あんどどうを打こかし、まつくらやみとなり、めつたやたらにつかみあひ、大さわぎとなりて、へだてのからかみをふみはづし、ていしゆときた八と、ねぢ合ながらのざしきの侍が、ねてゐる上へどつさりたふれる。侍「あいた／＼／＼。コリヤあぢやかする。身どもなづきがわれた。エ、まつくらでしれない。コレ／＼おら／＼のふんどしが見えない。彌「ナニふんどしにかまうものか ト、くらがりまぎれに、とりちがへて、侍をくらはせると。侍「ヤイ／＼あんでぶつた。ア、なづきがぶち碎けた ト、手ぬぐひを取てはちまきをする。此内女ばう、てうちんをともしてかけいで、さうはうをなだめると、みな／＼さわぎくたびれ、やれ／＼少し、しづまりかゝる。侍ひらきなほつて「身ども、あぢやかわけはしらないが、おかなくぶたれて武士がたゝない。コリヤ／＼身どものふんどしががない。女房「これでござりまするか。侍「イヤそれはかたなだ。女房「そんでも、あなたのふんどしはござんしない。侍「なくてはすまない。コリヤ／＼身共のゑつちうふんどしがなくなつた。亭主／＼詮議しろ。出来ないうちは、あひ客ども、ふとりでもたゝすこたアならないぞ。ていしゆ「あなたふんどししかいてござりましたか。侍「おどれ侍をひづるな。よそへ出来るに禪かかないもんがあるもんか。ていしゆ「そんでもうらは年中かきませんでな。侍「エ、おどれのこんではない。詮議しをろ／＼。女房「ソレ／＼あなたの鉢巻から紐がさがつてをるやうだが、それちやアござんしないか。侍「ドレ／＼これだ／＼。コリヤ亭主安堵しろ。身どものふんどしはあ

たまにあつたぞ ト、おもはずこれにて、みな／＼わらひをふくみたるに、此いさくさ、ひやうしぬけがして、それなりにをさまり、夜もすてにあけたりければ、なにごとまたびがけのことゆゑ、どうやらかうやら、れうけんつきて、さらりとすみ、やがてあさはんをしたゝめ、彌次郎きた八は、これよりかのさぶらひにわかれて、さきへこのやどをたちいで、ゆうべのさわぎをかたりつゞけて、をかしさのあまりに、くらやみの喧嘩は人をあへものにしたるおこりは黒ごまの灰
 斯て上松の宿をはなれて、左りの方、御嶽權現の御山をふしをがみて、
 降つもる雪のみたけも諸人の願ひとともにとくる春の日

岐曾續 膝栗毛七編 下巻

木曾の棧道といふは、福嶋上松の間にして、右は高山つらなり、ひだりは巖石尖くしてそばだち、木曾川のながれさかまき、數丈の谷深く、兩岨よりかけわたす橋、むかしは藤墓をもちひて柵とし、板をならべて往來通行したりしに、近頃は修造ありて、石を疊み橋に欄干を儲て、盲人小兒もたやすくこれをわたる。ひとへにありがたき御惠なりけし。こゝに誹祖芭蕉翁の碑あり。かけはしや命をからむ蔦かつら、と彫つけあるを見て、

命をもらみつけたる藤かづら今はとけゆく春の雪道
 かくくちずさみつゝ、はやくも彌生の茶屋、建場にいたる。此ところ蔵もちのめいぶつなり。

さわらびのにぎりこぶしの餅なれば旅人にうちくらはせにけり
 それより福嶋にいたる。此驛に御關所あり。景色よき所なれば、思はず小橋のうへにたゝずみながら、北八「ナントい

いけしきぢやアねへかへ。ちと休みやせう。ト、はしのらんかんいろくらくがきしてあるをながめて、彌次「ハアかいたわく。なんだ江州藤村穴右衛門、出介同行二人、此ところにて尻の根太ふき切、難義するとかいてある。ハ、ハ、ハ、。そつちらのは江戸お筆筒町引出し横町とつてや鑑兵衛茶良七此所まかりとほる。ヤアくこの鑑兵衛といふはとんだ工面のいゝをとこで、おいらが心やすいから、出合たらかねても借てやらうものを、いつこゝを通つたか残念な。北「ドレくおれもなんぞかいてやらう。彌次さんその矢立をかしてくんな。ト、筆をとりて何やらむしやうにかきちらす所へ、しゆくやくにんとおぼしく、一本きめたるむつかしきかほのをとこ來かゝり見て、「コリヤくあせそこへだめがきしをる。北「かいてはわりいのかへ。男「しれたこんだ。やくくこんぢうかけた橋だに、こゝをどこだとおもふ。むたらくやらうめが。北「ナニおれかきやアしめへし、こんなにくらもかいてあるものを、そんなにいふこたアねへ。男「イヤおぞいやつだ。しやつつかまへてくゝしあげずに。ト、こわだかにいふとき、ぼうをつきておあしがるていの人出きたりて、「あんだといふ。だめ書しをつて此橋をすだいにしるのみならず、がいにぐざると其分にやアならない。ひこずつていかず、サアうせをれつちやア。ト、ふたりしてきた八の手をひつとらへひきざりゆかうとする。御關所まへのことなれば彌次郎こゝろつきて北八をひきのけ、彌「まつびら御めん下さりませ。大きに無調法なこといたしました。男「インネすませないぞく。彌「すまないとおつしやつても、こいつめは氣が違てをります。アレくあの目つきを御らうじませ。あのとほりてござりますからどうぞ御了簡なすつて下さりませ、ト、むしやうにあやまりながら目かほでしらせると北八のみこみ、北「ホンニ氣ちがひ、ソレくきちがひよほうさいよ、コリヤすつてんてれつくくてんくてん。男「あるほどこいつきちがひずらア。彌「アノとほりてまことにこまりものでござります。足輕「エ、おのれ亂心ものでないとその分でおくやつてはないに。北「ハ、ハ、ハ、アノおぢいが腹をたてた頼とかけてなんととく。男「エ、まだあにをぬかす。北「これをおみき徳利ととく。その心は、くちさき

がとんがつた、ハ、ハ、ハ、。足輕「エ、てつべんからぶちみしやくぞ。彌「モシもう御めんなさりやし。ト、むりにきた八をひつぱり、あしばやにこゝをうち過、北「もういゝか。いめへましい、とうんくおいらをきちがひにしたな。彌「めんだうだからきちがひとはナント智恵か。ト、やがて御せきしよを打すぎゆけば、このあたり所々にお六くしめいぶつあり。りやうかはのちや屋より、「休んでござります。木曾お六くしかつてござりました。北「こゝでいつぶくのみやせう。ト、ちややへはいりやすむ。ちややのていしゆ、「おはやうござりました。あなたがたお土産に櫻皮のたんじやく、墨流しのたんじやくおかひなさんし。彌「コリヤ木をへいだ短冊だ。おらアまた經木かとおもつた。の女房「お六くし、みつぐし、すぎくし、いろくござります。北「魚くしはねへか。女房「ハイ此魚づくしの模様のついたのでござりますか。北「ナニ肴をやくにあたまからソレ尻のはうへ、ぐつとつきとほすくしだ。女房「ハイ尻へおさしなさるくしはござりませんでな。ト、此内としのころ四十ちかき尼人、もめんがづばの上から高ぼしよりして、ふるしきづつみをせおひ、このところにやすみたりしが、尼「モシそのあかいくしはいくらしるのし。女房「これかのし、まけて六十四文にしてあげませす。尼「えいくしだのし、あんまりでかくてさしづらからず。そつちらのくしは。ドレくつぼいくしのし、コレかひませす。女房「みつぐしのえいのがござんさア。尼「それもほしいかひませす。その毛すぢたてもなかつた。女房「これのし。尼「この櫛うらがさすにはわるからずか見てくれさい。彌「ヲやおめへ土産に買なざるのかとおもつたら、さしなさるののだ。尼「さうだのし。彌「ハ、ハ、ハ、おめへあたまに毛もなくてさ。尼「ほんにさうだつけ。うらあたまに毛のない事をすつたりとわすれた。もうくしはいりまじないが、やくくかつたもの。コリヤうらがとこのお長老さまにさゝせす。彌「お長老さまも坊さまだらう。尼「さればのし、あんだつけか。北「おもひ出しで見なせへ。坊さまにちがひはあるめへ。さうしてお長老さまなら男だらう。尼「ソレくお長老さまは男でばあずであつたのし、ヲホ、ハ、ハ、。彌「そんならそのお長老さまのお大黒へみやげにしなせへ。尼「アニお大くはうらて

ござんさア。此ハ、こいつは出来た。時にもう出かけやせう。ト ふたりはこゝを出かけると、そのあまもつづいてあとよりきたり、道づれとなりてはなしながらゆくあとより、大ごゑをあげておつかけ来るものあり。ふりかへり見れば今休みたる所のくしやのていしゆ、あせ水をながしてはしりつき、かのあまをひとつらへ、ていしゆ「コリヤばあずめ、にしおぞい事しる。今のを出せつちやア。尻あにをいふ、出せたアあんのこんだのし。ていしゆ「エ、あんのこんたア三つ櫛がひたくみ見えない。にしがもつてきたらず。尻アニ此ふとは、いひかけをしをる。うらしるもんか、あてこともない。ていしゆ「ヤイおけつちやア。なるくいふうち出さないとむげちないめにあはせず。エ、肝がいくらア、此ぬすつとばあずめ。尻「うらいつぬすんだ。ていしゆ「アニ此よたくれめが。ト、つかみかゝる。尻もやつきとなり、むしやぶりつくと、此コレ「まちなせへ。ト、見かねてふたりのなかへわけいり、いろくとりさへる。ふたりはきかずたがひにねぢあふを、あちこちとだめるひやうしに、きた八のふところからみつぐしの紙につみしやつが、ぼつたりおちると、尻「ソレ「うらぢやアならず、あふとだ。これだ。これだ。まだふとつあらず。ト、北八のふところへずつと手をつつこみ今ひとつあるをとつてひき出し、ていしゆ「エ、にしぬすんだ。此めんぼくしてへもねへ。しかしおらはとらねへ、大かたそのくしがおれのふところへむぐりこんだのであらう。尻「おぞい人だ。こなさまのおかげで、うらひどくむげちないめにあつた。ていしゆ「かんさつせへ、此やうらめがふといからだ。エ、ぬすつとめが。ト、ひどくいはれても、さすがは鬼神にわうだうなし。きた八さながらめんぼくなさに、まじめなかほをして、しよげかへる。彌次郎をかしく、彌「ハ、外聞のわりいとこだ。たかて四十か五十のものをいつのまにいがめたやら、泥坊根性のあるものは如才のねへものだ。此いめへましい。ちよつと洒落にやらかした事が尻が来た。ホンニお比丘尼さまへおきのどくだ。ト、此内はや、くしやのていしゆあとへもどると、三人ははるかに行過、尻あとをふりかへりて、尻「ヤレ「たまげた、あぶんない事し。うらとつて来たを

見ていふのかとおもつたに、コレ見てくれさい。うらはこれをとつて来た。ト、ふところからくし二まいそつと出して見せると、此「エ、おめへもそれをぬすんで来たものを、おいらばかり恥をかいたはつまらねへ。ヲ、イ櫛屋どの「この比丘尼どのもくしを二まいとつたぞ。尻「ヤレおそがや、はやくぬげず。ト、いぢもくさんにかげ出してゆく。それよりふたりはこゝをすぎてゆくほどに、やがてかの木曾殿のおもひものときこえし、ともゑがふち山吹のふちといふあたりにいたりて、木曾どの「はまり給ひしゆゑにこそ淵となりたる巴山吹

それより宮のこしの驛にいたる。
何神の宮の腰かはしらねども
はらひきよめる櫛の悪名

此宿を打過て吉田村大木坂にさしかゝる。此邊すべて獣の皮を商ふ家おほし。熊の皮かつてござらつせへ。猿の腹ごもり、正眞の態の膽はいりまじないか。此「コウ彌次さん、コノ皮はあつたかだらうな。彌「下レ、さ



てもすべこくていゝ心持だ。ア、しんだかゝあめがことをおもひ出した。北「おもしろくもねへ。モシこれはなんだね。ていしゆ「ソリヤ狼おほかみのあたまでござらア。北「これはへ。ていしゆ「それか天狗てんぐの臍へそ。北「そつちらの丸いものはなんだらう。ていしゆ「コリヤむたらくにヤアないもんだ。蝮うばまみの金玉でござらア。北「あのうはゞみにきんたまがありやすか。ていしゆ「あらずく、コリヤぢくいでござらア。でがいの八疊やぶ敷じきもあらず。北「ナニ狸たぬきとまちがつてゐらア。ていしゆ「そのはずもし、狸が功こう經けいるとうはゞみになる。北「ナニとんだ事を。ていしゆ「アニ證據たしながある。よくふとが狸をしやうといふことがあるが、えては狸めがばあずにはけるもので、そのばけた時はあんといふとおもはつせる。北「なんといふか。ていしゆ「そのばけたときは、うはゞみだんぶつくといふけな。北「わるくしやれるわ。サアいきやせう ト、それよりはやくも藪原やぶはらのしゆくにいたりけるに、

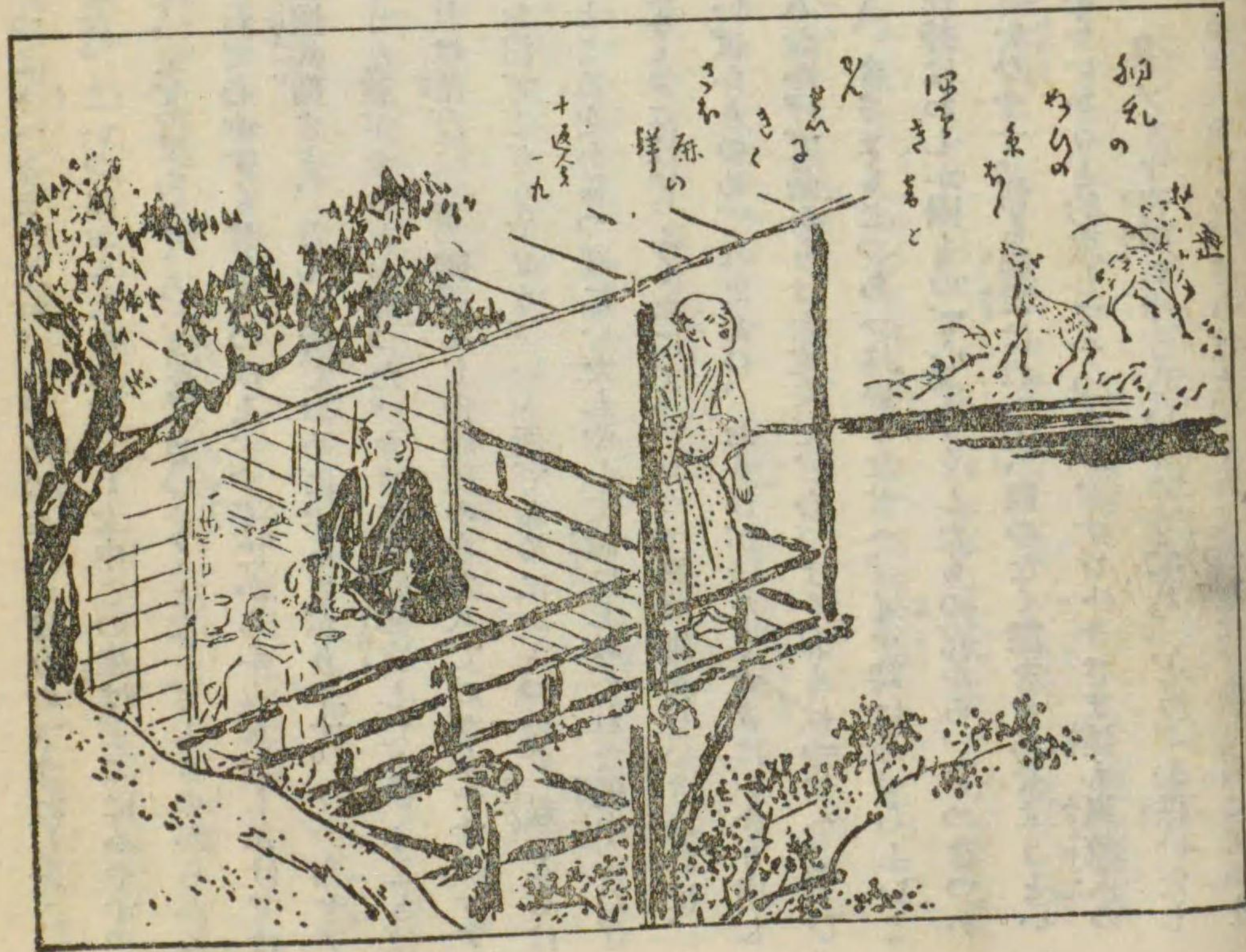
醫者いしやどのゝ名の藪原やぶはらはめしもりも七加減しちかげんして客きやくやつとむる

やがて鳥居とりい峠とうげにさしかゝりける時、宿駕しゆくかのせまきに大のをとこ打うのりてゆくを見て、

旅人たびはさぞ究屈きうくつにおもふらん乗のりたる駕かの鳥居とりい峠とうげは

かくて奈良井の驛えきにつきたるに、はや日も西の山の端はにかたぶきければ兩側りょうがわのはたごやより女ども立出て、女「モシモシおとまりぢやござんしないか。お風呂ふろもわいてゐるに、おとまりなく。北「まだすこしはやいけれど、彌やもうとまつてもよからう、のう姉あねさん。女「おとまりなさんし。お夜食やしやくはお飯めしでも蕎麥そばでも。おそばでよかアおはたごやすくしてあげませす。彌やいかさまやすいはうがい。そばではいくらだ。女「ハイおそばなら百十六文でござんさア。彌やそんならそれときめて、サアとまりやせうか ト、此やどやへはいり、ふたりともおくのぞしきへとほる。女「すぐにお湯へおはいりなさんし ト、此内このうちふたりとも湯ゆにいりしまひ、女「おそばをあげませす ト、もち來りてすゑると、さつそくくひかゝりて、北「こつちのはうでは蕎麥そばはいゝが、したぢがわるいにはあやまる。彌やそのかは

りにお給仕おたまげがうつくしいからいゝのう姉あねさん。もういづばいくんねへ。女「もうおそばはそれぎりでござんさア。彌やナニもうねへのかへ。たつた二ぜんぶくつたものを、つまらねへ。これぢやアくひたりねへ。北「はたごが安いもすさまじい。二はいばかりくつてゐられるものか。彌やそんなら初手はじめてに二ぜんぎりと断ことわればいゝに、馬鹿ばかなつらな。錢ぜには出すから飯めしをくんねへ。女「ハイそんなら御膳ごぜんにいたしませす。北「なんのこつたやつぱりはたごが高くつくわ。いめへましいやてへぼねだト、こどといふうち、ぜんも出てくひしまひたるに、女宿帳よどちやうをもつて出、女「やど帳やどちやうでござんさア、おつけなさつて下さりまし。彌やドレレこれへわつちらの名をつけるのだな ト、そのちやうめんをひろげくりかへし見て、「ヤアく北八きたはちとんだ事がある。けふ福嶋ふくしまで手めへがしくじつた橋はしの欄干らんかんにかいてあつたソレおいらが心安やすみいといつた男、此帳このちやうにもついてあるわ。北「ホンニ江戸えどお籠かご筒つつ町まち引出し横丁よこぢ、とつてや鑓兵衛くわんべい上下じやうげ貳人ににん、ハ、ア爰こゝの家へとまつたと見える。彌やエ、此人このひとにあふと金かねでも借かりてや



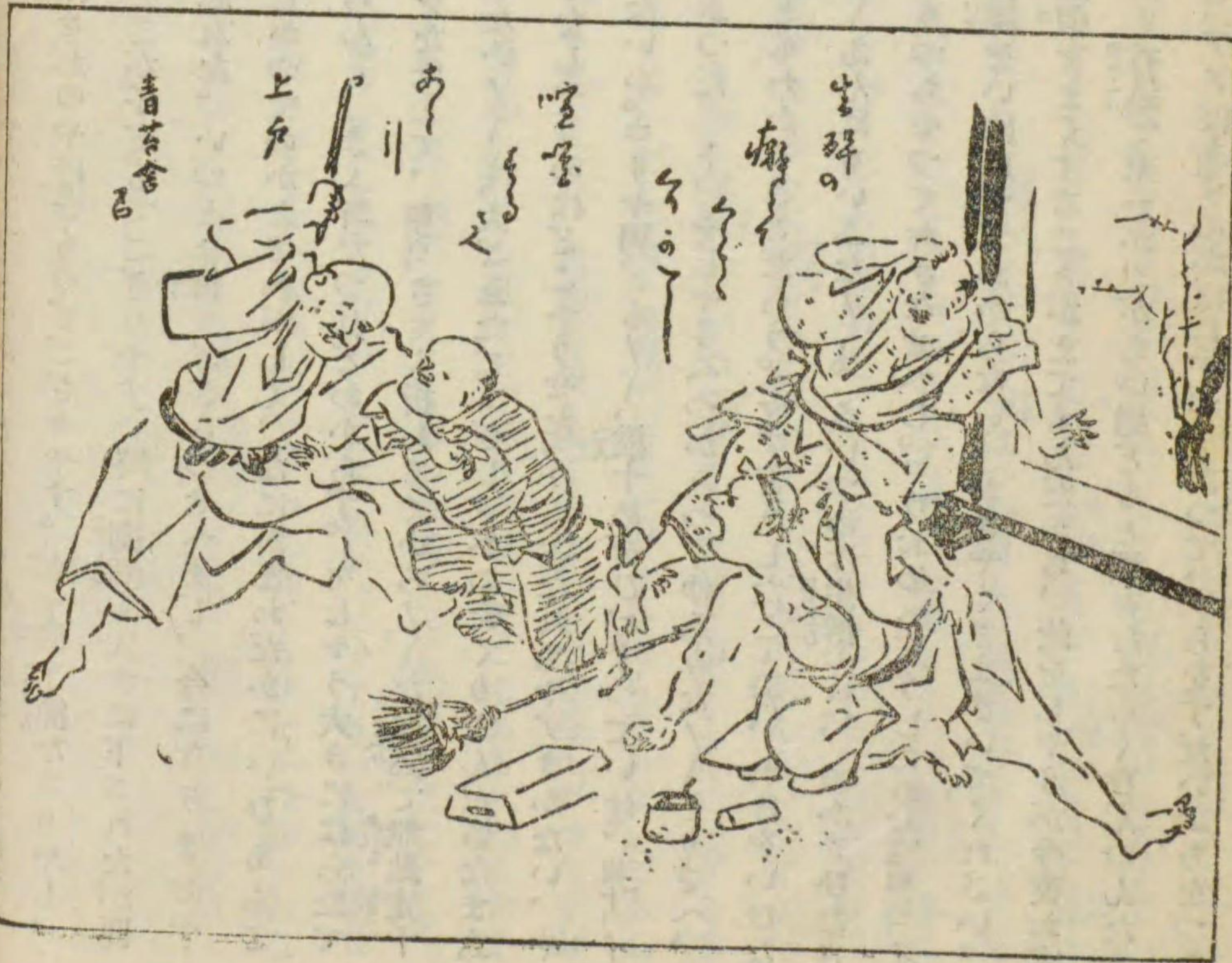
るものを。コレ／＼女中こゝにかいてある江戸の人はいつこゝへとまつたね。女「そのおかたは今のさきわしとこへお出なさんした。彌ハアそんなら今此帳へかいたのだな。こいつはおもしろへ。コレ女中この衆はどこにやす。女「おとなりのお座敷でござんさア。彌「イヤ奇妙／＼ト、たちまちこゝろいさみ、さつそくとなりざしきのからかみのすきまよりのぞきて見ればちがひなし。彌次郎兵衛かねて心やすくせしものゆゑ、すぐにからかみをおしあけてはいるかほを見て、さきにもびつくりしたるていに、彌「躰兵衛さま、とんだ所でおめにぶらさがりやす。くわんヤア彌次郎のか、これは／＼。道理こそさつきからきいたやうな聲がするとおもつた。きさま伊勢参宮したといふことはきいてゐるが、こゝてあはうとおもひもよらねへ。つれば誰だ。彌「御ぞんじの居候のきた八でござりやす。マアマアおめへさまも御機嫌よくてお目出たい。京のお店へお出でござりやせう。いゝ所でおめにかゝつた。私どもは金毘羅さまから安藝の宮さまへまはつて、なげなしのふところをからつばにいたしやして誠にしみたれな道中へござりやす。ト、そろ／＼出しかけてむしんをいふつもり。此をとこははらふくれにて、いたつて彌次郎をひいきなれば、さつそく見てとり、かねのことしようにちにて小ばん五まいばかりのめぐみにあひ、おもひがけなく大きにいきり出して、彌「コレハ／＼ありがたうござりやす。コリヤきた八おかげで是からは大丈夫だ、心づよくおもはつせへ。北「ひき出し横丁の旦那有がたうござりやす。くわん「ナニサ／＼、きさまもこつちへはいりなせへ。イヤ時にめづらしいことがある。此近邊に能樂寺といふ寺がありやす。そこの住持はわしが國もので心やすくしたものだから、さつきつかひのものをやつたら、たつた今和尚が来て今夜寺へ呼うといひやす。何も馳走はねへが、鹿のなく聲をきかせようといふ。コリヤめづらしい、ついで鹿の音をきいたことがねへからいかうと約束してやつたが、ナントきさま達も風流人の仲間だ。いつしよに慰ながらその寺へいつてはどうだ。彌「ソリヤ奇妙ちやうらい、のう北八。どうぞお供いたしやせう。ト、此内やどの女來り、かの寺からむかひの人來るよしをいふ。さらばとてくわん兵衛は、供の男に何かを

いひつけてあとにのこしおき、彌次郎きた八を引つれて、むかひに來りし男にあんないさせ、このやどを立いで、十ちやうばかりうらの山へのぼりゆけば、そのてらにいたると、住持と見えしがさつそくにむかひて、住「これはよくこそ／＼。サア／＼おくへ／＼ト、あんないしてぐつとおくざしきへとほす。くわん兵衛あいつすみて彌次郎兵衛きた八をもひきはすると、彌「わたくしは此旦那とは御念頃にいたすものでござりますが、不思議に今晚ひとつ宿に泊り合せて、めづらしいおはなしを承りやしてお供してめへりやしたが、アノ鹿といふものは秋なくものとぞんじやしたが只今でもなきやすかね。和尚「さればそこてござる。秋なくものを今頃お聞せ申すが御馳走でござる。コリヤア外にはござらぬ。愚僧が所の山にをる鹿に限つてそが奇妙、毎晩鼻のさきてなきます。北「ソリヤ何よりの土産に、はやくうけたまはりたいたいものだ。和尚「まづ御酒ひとつあげませす。コリヤ／＼西念／＼、お盃もつてこいト、此内酒さかないろ／＼出、さかもりはじまる。小僧「モシをしやうさま、只今新畑の間平どのがまゐりました。和尚「ちよくとよべ。あんの用でわせられた。小僧「雨がちくとばらついて來たに、からかさをつけてくれと申てわせられましたから、かせてやりました。和尚「コノだぼうめが。コリヤ傘はふとにかせないもんだ。かせるとかやすもんではない。今度からふとがからかさをつらに來たら、さて／＼おやすいこんだがみなかしくならかしましたから、繩でからげざるが、こんちうの雨風にさいて出ましたらば、骨は骨紙はかみとばら／＼になつてしまひましたから、繩でからげて糊の隅へほかしあげてござる。あれではおやくにたつまい、きのどくてござると、ことわりいふもんだ。さう心得てをれ、どんくさいやつだ。コレ／＼おてうしないぞ。くわん「イヤもう澤山に下ざりやした。和尚「はてゆつくらりとまゐりまし。今に鹿がなきませすに。コレ／＼小僧「又だれか來たな。小僧「ハイ門前の茂弟次がわせました。和尚「ムウあせさせた。小僧「あした雑役に出すつて馬をかせてくれといつて來ました。和尚「あんといつた。小僧「もうぬかるこんぢやアござりましない、斷をいつてやりました、馬はみなかしくならかして、たつた一本あつたのをこんちう

の雨風にさいて出て、骨はほね紙はかみとばら／＼になつたから、繩でからげて棚のすみへほかしあげてござる。あれは役にたつまい。きのどくなこんだと、ことわりをいつてやりました。和尚「ヤイ／＼そたれめが、馬があんとして骨は骨紙はかみとなるもんだ。ばかなつらめ、うらがいつたはからかさのこんだに。ソリヤア茂弟次がたまげてかへつたであらず。今度から馬をかりに來たら、きんのふまぐさをつけにやりましたが、女馬を見て駄狂しをつて谷へすつたりおちをつたから、ないらがおこつてやくにた／＼ないから、既に／＼ないで豆ばつか打くらはせてござる。アあきのどくなこんだと、斷いふもんだぞ。小僧「ハイ／＼今度からそのとほりいひませず。和尚お聞なさい。愚僧が寺にをらないと埒がない。肝のいれるこんでござるわのし。ヤア又だれだか來をつた。こんなふとのくるにはたまげはてる。コリヤ／＼西念／＼。小僧「ハイ／＼また矢村の邊呂八どのから使のふとが來ました。和尚「あんといつてきた小僧「明日は心ざしの日でござるに、をしやうさまお手間さへながらお齋にござつて下さりませと申すこんでござります。和尚「ヨ、それはいかず／＼。小僧「イヤことわりをいつてやりました。和尚「アニあぜ、うらにもきかないであんといつてやつた。小僧「をしやうはきんのふ馬草をつけにやりましたら、女馬を見て駄ぐるひしをつて谷へすつたりおちまして、ないらがおこりましたから、むまやにつないで豆ばつか打くらはせてござる。おときにはまゐられますまい。ア、きのどくなこんでござると、ことわりをいつてやりました。和尚「ヤイ／＼おのれは／＼、あぜそんなことを。小僧「それでも今度からさういつてやれとおつしやれたから。和尚「コノ大ばかのたくらたアめが、いつうらが女馬を見て駄ぐるひをした。小僧「それでもこんぢう五佐七のか／＼さまが來た時、おくへつれてござつて駄ぐるひをさつせへたこともあらず。和尚「エ、あにをこきをる。アリヤア物をぬつて貰つたのだ。うぬ馬の斷とうらが斷とふとつにおもつてけつかるか。小僧「わしは馬をしやうさまおんなじことだとおもつたから。和尚「あせおんなじこんだ。小僧「そんでもふとかをしやうさまのことを貧僧だといふずらア。和尚「アニためをぬかしをる。ト、きせるで小ぞうのあたまで

をこつ／＼。小僧「はきやつといつてさう／＼にげてゆく。をしやうたつてゆかんとするを彌次郎おしとめて、彌「マア／＼ようござりやす。どこのお寺でもお小僧達にはせわのやけたものでござりやす。もう御了簡なさりやし。和尚「うらにまで恥をかゝせるむたらくものめが。くわん「そこが子どもでござりやす。時に御酒も大きに下されたが鹿はもうなく時分でござりやすかね。和尚「ホンニすつたり忘れた。いつとき待てござらつせへまし、今になきませずト、いひつゝをしやうはたつてゆきしが、しばらくするとかつてのかたさわがしく、なにかこわだかにいひあふこゑきこえて、ばつたくさするゆゑ、ざしきにては何事やらんと、きゝ耳たつれどわからず。をしやう大きにはらたてたるかほつきにてざしきへきたり、たちまちがんしよくをなほして、和尚「さても折わるくいろ／＼な取込で無馳走千萬でござる。ト、あいさつするうち、勝手のかたよりきかない／＼と、大ごゑたてゝざしきへぬたくりこんだるなまゑひのをとこ、大目だまをむききよろ／＼見まはし、コリヤをしやうめはどこへうせた。うらぶたれちやアきかない、ヤアだやアだ。和尚「コレ、お客がござらせる。あつちへうせないか。コリヤ男ども／＼、權十めをひごずつていけ。權十「インネいごかない。コウくそたればあずめ、あせうらぶつた。ト、をしやうへつかみつくゆゑみな／＼とりさへ、くわん「コレサ／＼しづかにしなせへ。そんなにさわがずともわかることだらう。マアどうしたことだ、わけをいひなせへ。權十「お客さまか、きいてくれさい。和尚「コリヤ／＼あんにもいふな／＼。こいつめは生酔だに、おかまひなさるな、ヤイ勝手へうせないか。彌「マアをしやうさま、うつちやつておきなせへし。コウおめへどうしたのだ。和尚「インネそれをいつちやアむずいかない／＼。權十「それでも譯をいはにやアわからない。おきやくさまきいてくれさい。うらア此村の權十といふもんだがのし、うら鹿のなく眞似をよくすることがえてもんだから、此をしやうが今夜お客がある、鹿のなくまねをしてくれさいとたのまつせるから呑込で來たが、がらい男どもと酒をむたらくひんのんだもんだから、もう出來ましない。そんでやアだといつたら、アノばあずめがはらアつ／＼たつて、うらをすだいぶちをつた

からのこんだアのし。彌ハ、、、そんなら鹿がなく
といふはほんとうの鹿ぢやねへ、きさまを頼んでなかせ
るつもりか、のうをしやうさま。和尚「イヤ面目次第もご
ざらない。くわん「これも一興く。をしやうさまのお心
づかひはうけてをりやす。モシおめへも機嫌をなほして
いつばい呑なほしはどうだ。北「是はおもしろへ。コウ
鹿先生持合せやした、ひとつあげやせう。權十「うらア酔
てずだいいけましないが、もうふとつのでくれず。ト
はだを入れて盃をうけもち、「おきやくさまあげませす。
そんだいにやア、やくく「ござらつせへたもんだに、ここ
でふとつさかなに鹿の鳴のをやつて見ませすか。彌「コ
リヤよからう、所望く。權十「きかつせへまし、こんだ
アのし。カンヨウゴロく「ヒイ、引鹿の酔たとこだア
のしハ、、、くわん「ヤンヤく。わしも三ヶの津をまた
にかけてあるく男だが、鹿の聲色ははじめて聞やした。
をしやうさま是をはねにおいとまいたしやせう。北「ハ、
ハ、鹿どのがこゝにたふれた。わつちも鹿の駝をはじめ
て聞やしたが、がうせへなハびきた。彌をしやうさま



大きに御馳走になりやした。和尚「イヤ愚僧穴へもはいりたうござる ト、まじめになりてあいさつするもをかしく、
みなく「わらひをかくしていとまごひし、さうく「このてらをたちいづるとて、

權十は鹿なり和尚馬なればさて馬鹿らしきもてなしにこそ
かく打興じて宿へ歸り打臥けるが、あくれば彌次郎喜多八は官兵衛にわかれてさきへ此ところを出けるが、これまで
は路用乏敷して何事も心にまかせざりしに、官兵衛より金子を借受、たちまち心いさみて足元も軽く諏訪峠をうちこ
し贅川の驛にいたれば、

金かりてあたりまじりたるふところは臍も笑ふお茶のへ川

この宿の棒鼻にて休んと或茶屋にはいれば 茶屋の「おはやうござりました。彌「かみさん何時だの。女房「まだ四つには
なりまじない ト、此内ていしゆらしき男外よりかへりきたり、「コリヤよくござらせへました。おへさお茶あげずか。
アノ尾垂のよたものめはまだうせないか。女房「インネござんしない。ていしゆ「きんのふの客にいらすに鯉をもつて来て
くれと、やくく「いつてやつたに、調合てよこしなから今にずだいうせをらない。あいつめはあにをいつてやつても間
に合せたことがない。おぞいやらうめだ ト、何かひとりごとをいつてゐるうち、おもてより廿四五の男わらぢがけ
にてずつとはいり、「おつさま今来ました。女房「丹太どのかよくござらつせへた。丹太「よかア来まじない、わし云譯に
来ました。鯉のことをいつてよこさつせへたがの、こんぢうからむすとなれないで肝がくれたが、おなごらいつてよこ
さつせへたこんだに、どうかせせとおもつてそこらぢうさがして、てつかいやつを壹本かつて、とてもこのこんだにか
してこずと、わし脊戸の川の杭へつないで置いてよんべあげて見たら、きいてくれさい、河童めがよこつばらをくら
ひをつたから、わしうつたまげて、コリヤア疵のついたもんだに、祝ひ事にやアつかはれまいともつて来まじない。
その斷にやくく「来ました。ていしゆ「エ、にしやアこないでもえいに。律義な男だ。きんのふの客は貰つた着てお

やしてしまつてもうえいに。にし、やくく／＼来たもんだから、あんにもないがふとつのもんでいけつちや。丹太「ソリヤ
 忝ふござるが、わし酒ものんで来ました。御みようにさつせへ。ていしゆ「ハテやくく／＼ともよびにやるはずだに、
 さいはひのこんだ。マアあがれちやア。丹太「そんたらあがりませす。ていしゆ「にしのところからは貰はないが、鹽尻の
 ぢつさまから今朝鯉を壹本もらつた。にしはえいとこへ来た、あれを煮てくはせず、とてもものこんだ、あんにせず、
 このめく。丹太「うら煮たのがよくござる。ていしゆ「そんたらあたまのことを名古屋味噌でことく煮て、山椒をは
 なしてくはせず、それで酒を四五盃のんでくれさい。丹太「わしした地がある、さうはのめましない。ていしゆ「ハテ酒
 といふものはしひないとずだいのまれないもんだ。ぜつびのんでくれさい。丹太「そんないはつせるもの四五はいは
 のみませす。ていしゆ「のむか／＼ソリヤうれしい。そこで片身をつくつて山葵醬油で出さず、ナントえいさかなであら
 ず、丹太「ソリヤえいのし。ていしゆ「そんたらそれを肴にもう五はいばかりのんでくれさい。丹太「インネさうはむずい
 けましない。ていしゆ「はて扱いつはともかくも、けふはぜつびのんでもらはずに。丹太「そんたら吞ませず、ていしゆ「うれ
 しいうれしい。酒のうへでは茶がえいもんだ。こんちう信樂のえい茶をかつた。それを山吹色に出ばなにしてのませ
 ず。丹太「ソリヤかさねく御造作でござる。ていしゆ「そんだにしが歸るとき譽てもらひたい。丹太「ほめませすとも。
 ていしゆ「そこでにし、初手に五はいと又あとで五はい、十ばいのんだらいかなにしも酔て来て舌もまはらなくなつて、
 あしもともひよりり／＼するであらず、ふとりてには草鞋もはかれない、うらがはかせてやらす。丹太「アニめつさう
 な、わしがでにはかず。ていしゆ「インネはかれないからうらがはかせす。丹太「ア、もしく、わしはかすく。ていしゆ「は
 くか／＼。ヲ、はいたらそこでほめるのだ。さてく／＼けふは結構な御酒と申、おさかなと申、えいお茶まで下されて御
 造作になりました。かたじけなうござると禮をいふほどにちそうしてやりたいが、マアさうはならない。にしの鯉を
 河童がくつたら、うらが鯉も馳がくらつてしまつたからしかたがない。はやく出ていけつちやア、よくござつたワハ
 ハ、。丹太「エ、おつさま、むけちないめにあはせた。ていしゆ「ワハ、、おきやくさま、こいつはわしの甥でござり
 ますが、いつでもくちさきばつかで、かつころばかすことがえてもんだから、わしもくちさきで馳走したが、あんとで
 あらず。彌「ハ、、コリヤ出来やしたく。あんまりおもしろかつたから、わつちもついうか／＼ときいてるやし
 た。そのかはり、おかげで口さきばかりのお相伴をして、どうやら腹がへつたやうだ。そこらで申食にいたさうト、
 大わらひしてこの所をたち出ける。

予去秋の頃所用ありて信陽松本にいたりそれより善光寺へ出るに本街道をゆけは會田青柳などの驛に出るを近頃越後の糸魚川街道とて、松本より成相新田それより保高池田大町新町など、續きたる道至而めぐらしき絶景の地あまたありて近來此街道往來する旅人多きよし殊にその順道に栗尾山觀音成相新田より二里の靈地なり、松尾寺栗尾より、宮城不動松尾より、たり松尾よりに小岩だけといへる古戰場又鬼のすみたるといふ岩穴いくつも往來に見へたり有明山といふ名山へもちかし、池田官城より池田へ二里、大町五里、新町五里此あいだに水内ばしといへる、稻荷山是よ、じなり予この街道所々に滞留しさまぐ、他國に異なる事ども見聞せしゆへ此次八編は木曾街道洗馬宿より松本へかゝり善光寺へ出るまでこの街道をあらはすべし

十 返 舍 誌

續 膝 栗 毛 八 編

續藤栗毛八編序

諏訪の湖波しづかに、風越の嶺枝をならさず、往來の旅人が命をからむ蔦かつらと詠しは昔にて、棧も今はわたるに難なく、於六櫛の齒をひくが如く熊の膽の廻るに伴き木曾路の賑ひ、寐覺の蕎麥うつに隙なく、福嶋の奇應丸ひねるを待す、彌生の茶店の蕨餅身を粉にはたく開しきは、金儲の晝飯どき、筑摩川の茶漬に、腹をこやして、おのがさまのの出傍題は、旅の恥をかき捨る釘のをれに、落書の國所もゆかしく、予一とせ此街道に杖をひきて、洗馬の驛より善光寺にいたるに、松本より糸魚川街道といふに出、栗尾松尾宮城などいへる、靈場をへて、稻荷山に出たりし、其道路山川の風色、土人の光景、古雅なる事おかしき事、假書して、袖に藏め歸りたりしを有の儘に此編の趣向とし、例の戯氣をつくす事しかり。

文化丙子春

十返舎一九識

從木曾路 續 藤 栗 毛 八編 上卷

東都 十返舎一九編

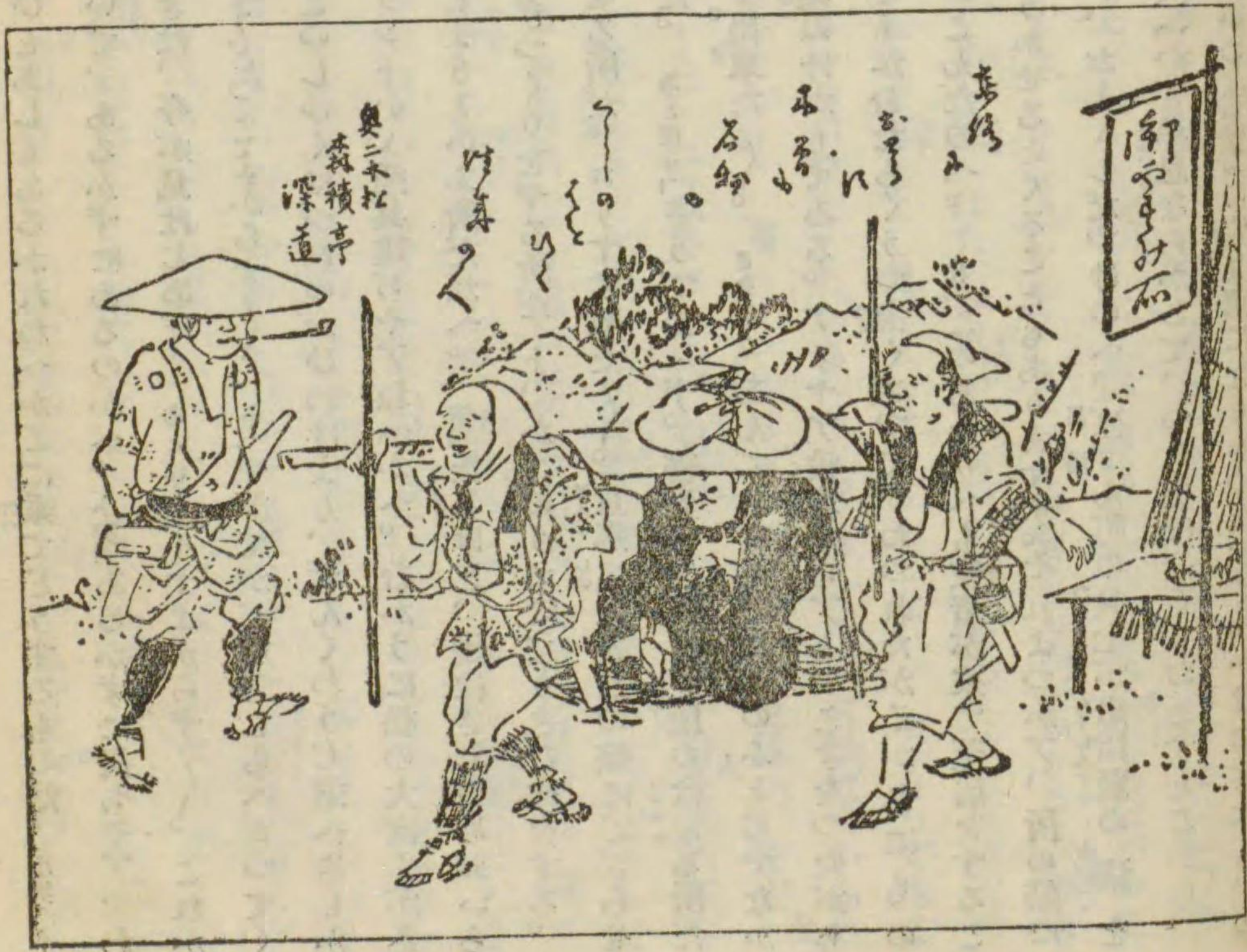
木曾路といへば山高く連り、溪幽につゞきて、毎に鹿狼など、往來の眼に遮り、たま／＼すめる賤の男もむくつけて、さながら異國のやうにおもひやれど、それは昔の嫉捨し山も、今は月の名所となりて、寐覺の床に臥猪も見えず、桐原望月の駒も、助郷を勉る驛々の繁昌、とめ女の化粧かたちも優に艶しく、往來の旅人も、東海道に替ることなし。されど煮ぶとりする焼酎と、油くさき氷豆腐のみありて、あざらけき魚のなきこそ、事足ぬやうに思へど、又鶏の卵下直にして澤山なり。彌次郎兵衛喜多八はすぎし馬込泊の夜、知音の人より借受たる、路用の金子に元氣を増、こゝろいさみて本山の驛を、打過つゝたどりゆくに、(むかうのかたより、大ぜい兩がはにならびて、こゑ／＼に呼はり、うりひろめゆくは、相州小田はらのうらうりなり。賣人「コレは相州小田原の名物うらう、御用はござりませぬかな。エヘン」抑拙者小田はらのうらうの義は、お江戸をたつて二十里上方、相州小田はらの宿におきました、お登ならばひだりの方、おくだりならば右のかた、表堅看板には、桐に金けいの紋御赦免ありて、むかしは虎屋藤右衛門、唯今は名を頂戴仕りまして、虎屋藤右衛門圓齋武重と名をあらため、賣弘まするうらうの義は、一兩壹貫百兩百貫まで、お買調くだされましても、おまけといふは壹分一厘もござりませぬ。なれども袖の振合せも、他生の縁とござりまして、お立合のおかたへは、一粒づゝお振舞申します。江戸表におきましても、淺草お藏前などにて、桐に菊、きんけいの紋を贖まして、をだはらのほだはらの、灰俵のうらうのしやくうのせつなど、書記しまして、甘茶甘草さうこせう、氷砂糖黒さう、鍋炭はうろくのかげ、そくひなどにて調合仕り、賣弘まするう

みらうとは違ひまして、拙者うみらうの義は、一粒をくちにくはへますれば、くる／＼まはる所が、益ござ益豆ぼんむしろ盆牛房、つみたてつみあげつみざんせう、こゝんこどめの粉生米、親も嘉兵衛子も嘉兵衛、親嘉兵衛子嘉兵衛、かげまからがさかげま下駄、となりの茶釜はからちやがま、こちの茶釜もからちやがま、かやうにくちがまはるわまはるわ。所の人「わしのへ、くちのまはらず薬なら、ちくとくだつせへちやア、くんのんで見すにのへ。ちり子「サアサアあがつてごらうじませ。所の人「ドレ／＼わしの人、癩癩でのへ、くちがふだりのはうへつんまがつて困るに、この薬で右へまはらせたいたいもんだのへ。彌次「ハ、ハ、ハ、そりやアおめへ、今に西風が吹たら右のはうへまはるだらう。所の人「アテちつくい子の風車ぢやアなからず、此ふとは、むたらくなこといふ。だぼうもんでござらア。北「こき出だぼうものたア何のことだ。コノ猿松めが。所の人「わし猿松たアいはない。頭ないことをこき出した。北「こき出たがどうしやアがる。ト、ふりあげた手が、ちよいと目のふちをはらふと、所の人「アイタ、ハ、ハ、コリヤずだ目がまはる。ヤイ／＼あぜふとの目をまはらかせた。彌エ、それをこつちでしるものか、目のまはるは大かた、賣薬めがくちのまはる薬だとして、目のまはるくすりをとりちがへて、こんたにのませたもんであらう。所の人「ホンニざらずらア、此まや師め。コノうらが目をあぜまはらかせたのへ。ちり子「ナニとんだことを、おまへの目がどこにまはる。所の人「コレ／＼こんなに、ソレまはつてゐるずらア。ちり子「ソリヤわざと目の玉をまはしなざるのだ。コリヤ奇妙妙。おまへはなるほど目をまはすことがお上手だわへ。所の人「そんだらまつと、くるり／＼まはらかせてみせず。ソレ／＼。北「ハ、ハ、ハ、大きなべらぼうもあればあるものだ。薬屋さんこんな人かおめへがたのお得意だ。精出して賣つけなせへ、ハ、ハ、ハ、。

看版の虎の威をかるくすりとかや千里の外へひやく功能

かくて爰を打すぎ、はやくも洗馬の宿につくと、ぼうばなのちや屋の女どもがくち／＼に休んでお出なさんし。齋

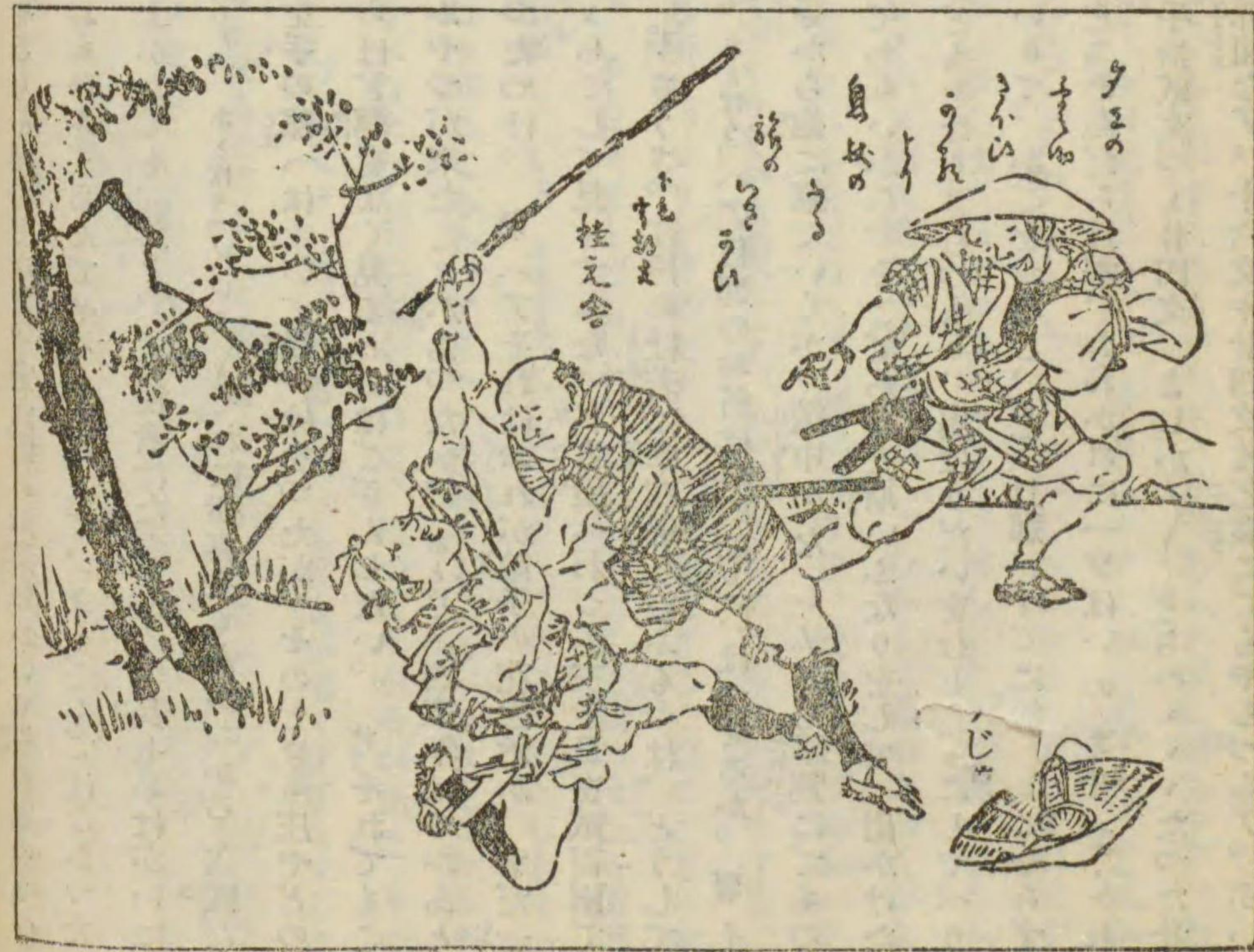
麥のお煮かけがござります。御酒のえいのもござります。かごかき、旦那がた、駕やらずに、のつてくれさせへ。彌「アノ善光寺道は是からだな。さきのしゆくまでいくらでのせる。かごむら井まで三百くれさせへ。なから三里半もあるずらア。彌「貳百五十でやらねへか。かご「やらず／＼。コリヤ棒組／＼。はやく来いつちやア。彌「ヤア／＼棒組といふはアノ人か。ハ、ハ、ハ、コリヤとんだはなしだ。ささまは半鐘泥坊見たやうな大男。その相棒といふは縁の下を掃除しようといふ小をとこ、あんまり釣合ねへから、コリヤ此駕にヤアのられねへわへ。かご小男「イヤわしのへ、せいがち／＼いかりに足駄はいてかつぎませず。北「ナニそれぢやア、かたつきし埒があくめへ。小男「アイサずだ埒はあきまなしな。それにのへ、見てくれさせへ。うらのおかたがのへ。下駄の齒がへらずに、はのさきへ鐵をぶつつけてはいたらよからずと、コレ鐵を齒のこへぶつてもらひをつたら、あるほどのへ、下駄の齒はむず／＼ないが、そんだいにヤア、すべつてふとあしもあるかれましないか



ら、買ったときのまんまでござらア。彌やとはうもねへ。ひとあしもあるかれねへかごに乗のてどうするものだ。小男こおとこ、イヤあるくとすべつてあぶあぶんない。彌やそんなら駕かをかついで、あるかずにゐるのかへ。小男こおとこあるかずに居いちやア、わるからずか、北きたハ、とんだ手合てあひだ。足のない駕かかきは、今が見はじめだ。ああとほう「イヤよからず」。これからちく／＼のぼりをるに、わし跡あとぼうへまはつたら、ちやうどつこよからず／＼ト、やがてかごをこしらへもつてくると、彌次郎やじらうこれに打うのれば、小男こおとこさきぼうへまはり、このしゆくはづれのおひわけより、ぜんくわうじ道へさしかかる。北きたこらはとんだい、景氣けいきの所だ。彌次さん、ナントい、道具建たちやアねへかへ。むかうに松の大おぼくがあつて、辻堂つじだうもあり、うしろが藪やぶ壘いで、だんまりのたてをしようといふ所だねへ。彌やなるほど、爰こゝはさしづめおいらが百日ひゃくにち墓かぶで、カタ／＼カタリトやつて、どつこいムント、ぎつくりをやる所だト、かごのうちにてりきむ身みをする。ああとほう「ア、モシあぶんない」。すつてのこと落おちさつせる所だ。コリヤすめた／＼。旦那だんな衆しゆはどこの祭まつりにござらせへた。北きた「ナニ祭とは、おらア是こゝから善光寺ぜんくわうじへいくのだ。ああとほう「さうであらず。善光寺はよく芝屋しばやのはなる所ださうな。北きた「ハ、アおいらを芝居しばものと見たてな。コリヤ出来できた／＼。さきほう「あんでものへ。たどのふとぢやなからず。洗馬せんばの茶屋ちややで女おんなどもが旦那だんながたを見て、あんで垢あかぬけがしてゐる。アリヤア役者やくしやずらアと、こきをつたがちがひはない。ああとほう「あぜたのへ。役者衆やくしやしゆといやア、女おんなどもがむたらくうつ惚ほくさつて、ねつれたがるがあにものへ。男おとこにかはるこたアなからず、うらアすだいすめないこんだのへ。北きた「このあたりへも役者やくしやが来て芝居しばをするこがあるかね。さきほう「ヤ／＼は来きましないがのへ、どうかせるとくることもありますが。それよつかア、所の祭まつりにやア、若い衆わかいしゆが芝しばるせることがありますが、ソレおんぢい、おと／＼しだつけのへ、ばいん町の兵七へいしちが忠臣藏ちゆうしんざうの猪いのししをしをつたがへ、ちやうどつこ、ほんとうの猪いのししのやうにフウ、い、と鼻息はないきならかして、つちをほせくりおこすところから、どすくらくつて、とび出でいた身みあんばい、頭あたまなくやりをつたがのへ、あの定九郎ぢやうくわうになりをつた、ざつかけのよたものめ

が、松の木へあがつてをるうち、猪いのししががいに長く身みぶりをせるもんだんでなア。定九郎ぢやうくわうめが業わざわかいて松まつの木きのうへから、もうえ／＼といつても、アニサ兵七へいしちは猪いのししであてずとおもひふくらんでせるもんだんで、きくこんではなかつたがのへ、そのとき庄屋しやうやどのがいはつせるにやア、おえども上あがたても、猪いのししであつた役者やくしやはなからず、兵七へいしちめはがいによかつたと、讀よみさつせいたがのへ、コリヤアちがひはなからず。ああとほう「ソレ／＼それに伊喜多いきたもんがおかるも、頭あたまなかつたがのへ。アノ二階にがいでたぼこをのんで、きせるの吹売ふきうを手の窪くぼへはたいて吸すつけをつたが、そのときも庄しややどのが、ヨウ／＼こまかいぞ／＼とほめさつせへたが、こゝらほど藝げいをよく見るとこはござんしない。北きた「それでもこらへは、たま／＼来きてもろくな役者やくしやはこめへ。なんといふやつが来たことがあつたへ。ああとほう「四五年しごねんばつかあとに、赤村花之丞あかむらなはのじやうといふ、頭あたまない名人めいじんのふとが来たことがあつたつけ。彌やハアそれはおれが弟子でしの花之丞はのじやうか、まだ一向いこうなやつだに。ア、だれぞい、金主かねしゆがあるなら、おれがこゝらでして見せてへな。名古屋なこやへわづか三十日を貳百兩にひゃくらうでいつたが、大あたりでさぞ金主かねしゆは儲もちたらう、のう喜多きた八はち。北きた「さうさ。江戸えどの杜若とじやくに幸四郎きやうしらうといふものは、どうしてもつよい。名古屋なこや中大評判ぢやうだいひやうはんであつたといふはなしがあつた。ああとほう「ハア旦那だんなのお名なは幸四郎きやうしらうといはつせるか。彌やイヤその幸四郎きやうしらうの兄弟けいだい分ぶんで、おいらの名なは銅四郎どうしらう、今度こんど善光寺ぜんくわうじから抱かかて来ていくが、道中だいちゆうかなし／＼も垂駕たれがたにてもものつて、大ぜい末社まつしゃどもをつれていくのだけれど、目にたつてわりいから、そこでわざと斯かいふなりをして、出でかけたといふものさ、ト、何事なにごともやくしやのふうをして、かごかきどもをなくさむつもり、出ではうだいをむしやうにしやべりゆくうち、村井むらゐのしゆくにいたりて、ぼうばなのちや屋やにいりて、かごをおろし、かご旦那だんな、すぐ松本まつもとまでやらすか。彌や「イヤちつとあるきやせう。乗のづめて尻しりがいたい。かごそんだら旦那だんな、おわかれに一ツひとつばいのませてくれさつせへ。彌や「ヲ、承知しょうち／＼、ソレ駕か賃ちんが貳百五十にひゃごじゅうごに、酒手さかて拾貳文じゅうにもん、よしか／＼。かごハ、たつた廿四文じゅうしもん、ハ、三十日に貳百兩にひゃくらうとらつせる旦那だんなだア、棒組ぼうぐみなア。十六文じゅうろくもんや廿四文じゅうしもんは乞食こじきにてもやるづらア。がい

にこぎるこんぢやアないが、たつた貳朱づゝてよからず
 ト、此かごかきひとりとはとうかい道に、くもすけもして
 ゐたる、ゑいたふれのなれのはて、しよはうをわたつて
 きたる男なれば、役者といふにつけこみ、ねだりごとをい
 ふに、彌次郎きもをつぶし、彌「コリヤとんだことをい
 ふやつらだわへ。貳百五十の駕に、酒手を貳朱づゝよこ
 せたアふてへやつ。わるくねだりがましいことをぬかし
 ヤアがると、本陣へ引ずつてゆくぞ。かごハ、ハ、ハ、う
 らもわかいときヤア、東海道五十三次を股にかけてある
 いたもんだがのへ、役者の本陣といふが、どこの宿にある
 ずらア。北「こいつらは、おいらを役者だとおもつて
 ねだるのだな。コレエをんないやらしいことをいふな。
 いつおいらがどこに役者だ。かごエ、いくらぐせらせへ
 ても、あの旦那のくちから、すつぺりまけ出いて、もう
 せずことがなからず。おどけずとやつてくれさつせへ。
 北「イヤいほせておけば大それたやつらだ。よこつらア
 はりとばしてくれうか。かごハ、ハ、ハ、おつかなくて、身
 うちがくすげつたくなつた。ドレうらがよこつつらア、



はつてもらはずか ト、つゝかゝつてくるゆゑ、きた入こらへずやつきとなりて、はちまきしながら、北「エ、ばかな
 つらな。えとつ子だぞ ト、いひさまつきとばすと、かごかきも、いつばいきげんのうへなれば、きかぬきになり、い
 きづゑをふりあげるを、彌次郎はしりよつて、いきづゑをひつたり、くらはせると、ひとりのかごかきもむしやぶ
 りつくを、きた入つきとばしてのしかより、さんぐにくらはせる。けんくわにかけてはえとつこのいきほひ、さすが
 のかごかきも、ぶたれながらかなはずして、かごもすておき、はふく／＼にげてゆく。このさわぎに、ちや屋のかどさ
 きは、いつばいの人だから、彌次郎きた入もあひてのにげたるを、さいはひにして、「コリヤとんだめにあつた。モン
 大きに見世をさわがしておきのどくだね。ちや屋の「ホンニあの衆といふものは、どうもなりませぬ。あなたがたにお怪
 我がなくて、お仕合でござります。北「ナニあんなやらうどもにかゝつて、けがをしてつまるものか。サア彌次さん
 出かけやせう ト、ありやうはしかへしにうせることもあらんかと、めんだうさに、はやくこゝをたゝんとて、目ませ
 にしらせば、彌次郎うなづき、ちよつとたちよつたばかりの茶代なれども、さわがせしだけ二百文はずみて、出かけ
 んとする所へくもすけ、「ヤアまだこゝにだ／＼ ト、くもすけども大せい、わいやくやして、かの彌次郎にぶたれしか
 ごかきを、戸いたにのせてつれ來り、彌次郎のまへにかきすゑ、中にもつらくせわるくひとりくつもひねくらうとい
 ふ、としがまへのくもすけ「モンおやかた、今このやらうが、おまへたちに頭なくぶたれたもんだんで、足腰がいた
 んて、商賣も出來ぬ。益はなし、だれもひきとる者もないもんだんで、せずこんがない。コリヤアおまへたちへ
 あげるがよからずと、仲間のもんが相談して、鬨斗をつけてもつて來ました。しんせませずに、どうともいゝやうに
 してくれさつせへまし ト、よごれくさつた、じゆばんひとつきてゐるくもすけ、戸いたの上に、むかふはちまきに
 て、ふんぞりかへりねてゐるものを、彌次郎のまへへつきつけられ、さすがの彌次郎もぎよつとして、これにはこま
 りはて、あひては大せいといひ、むかふ見ずのくもすけども、うそきみわるく、いかゞはせんとたうわくして、にが

にがしきかほつきしてゐると、くも助「サア、よたものはあの衆へ渡したんで、もうえい。これから酒でものますに、コレおかつさま、酒を五六升、さかなアあんだ。ごんぼうといなごの煮つけか。ソリヤアむずいかない。まぐろのしよんばいのもよからず、つん出てくれさつせへちやア。ト、くちんぐにしゃべり、あてこすりなどいひて、何がなけんくわのたねにせんと、もくろむやうす。彌次郎北八も、これはなんでもひとほりのことではなし、よわみを見せじとあさいかまはず、あけさせるにて、たばこすつばののんでしまひ、くも助どもへは目もやらず、彌アイおせわになりやした。ト、わざという／＼として出てゆかうとすると、くもすけども大せい、どや／＼むかうへ立ふさがり、くも助「ツトおやかた、うらがやく／＼しんぜたやらうを、うつちやつておかれちやア、爰の内の難儀だんて、わけをつけていかつせへちやア。彌「ナニわけをつけたア此やらうの事か。コレエうぬらはいけふてへやつらだ。年中道中を股にかけてあるくおいらが、そんなあまぢやなことていくものかへ。雲助をぶつたとつて、それをしよつてあるかうなら、東海道などは、くもすけばかりも十駄や二十駄は、馬につけてけへらにやアならねへわへ。人を見そくなやアがつたか、えどつ子だぞ／＼。くも助「エ、とつびやうしもない。頭ないことをこくわ。ぶつ殺してやれつちやア。ト、めい／＼にいきづゑをふりあげ、大さわぎとなりたるに、このちややのていしゆはこのへんにて小ぐちもきくものなるが、外よりもどりがけ、このていを見てまん中へおしわけてはいり、ていしゆ「コリヤ／＼わいらはどだとも思ふ。うらが所だ。がいにやぶせつたく／＼ぐりこくな。ト、くもすけどもおししづめる。彌次郎わざときをつよくし、彌「モシうつちやつておいてくんせへ。わつちらも百年めだ。かたつばしからぶちのめしてくれう。ていしゆ「ヤレマ短氣は損氣だんて、マア／＼またつせへまし。コリヤおきやくさま、あんとさつせへたのでござります。彌「ナニサ芝居のはなしから。わつちがほんのじやうだんに、おれは役者だといつたをほんとうにして、あの手合が酒手をがうぎにねだるからおこつたことさ。ナニわつちらが役者なものか。ていしゆ「さうであらう。コリヤわ

いらにも似合ないこんだ。ちよくと見ても役者か役者でないはしれてあらず。マア此衆の頬を見され。こんなきたないつらの役者がどこにあるもんだ。あんのこんはない。淺間の焼石見るやうな頬だに、ハ、ハ、ハ。彌「さうとも／＼。それに見なせへ、小鬘さがこんなに元ちらかつて、髭むさくて色は黒し。北「眼は三かくなり、鼻は獅々ばなで、くちといやア、糞付の碁石見るやうな齒で、そのくさ／＼がどうも。彌「コリヤ／＼あんまりいひすぎるわ。役者だつて、いゝ男ばかりもないものだ。おいらでも鬘をかけたなり、おしろいでもぬつて見たがい。ていしゆ「それこそ化物／＼。まだ役者でもあらずといふは、年の若いだけであつちらのお人。北「さうさ。わつちがまた役者のやうだらう。ていしゆ「イヤ／＼あの衆も、さいこづちあたままで直打がない。コリヤおひたりとも役者でからが、どう見ても堅者といはれない頬つき。えいひきてばい／＼役者、わいらが目ちがひ、酒でも吞でいけへちやア。くも助「ハ、ハ、ハ、あるほどおやかたがそんなにいほつせりやア、そんなもあらずか。役者の顔にやア請とりぬくい。ていしゆ「サア／＼うらが挨拶せる。仲直りしていけつちやア。おきやくさま、さうしてござらせへまし。ト、ていしゆ酒さかなを出して、彌次郎きた八と、くもすけども、仲なほりのさかづきをさせ、あとは大ざかもりとなり、くもすけどもみなみななまゑひとなりて、大ふぎけにさわぎちらす。此内さかなもいろ／＼出たるを見て、きた八そつと彌次郎のそでをひきて、北「彌次さんえいかげんにしていかうぢやアねへか。時に爰の内はどうしたものだらう。ト、こゝろにさ／＼やくと彌次郎かたわきのほうへ、そつときた八をまねきて、彌「ナントつまらねへことだがしかたがねへ。こゝの内へ南鐐のひとつもやらざアなるめへか。北「イヤさつきから雲助どもが呑だ酒も、壹升や貳升ぢやアあるめへ。それに看もいろ／＼出たから、ていしゆに損もさせられめへ。すくなくも禮金貳歩があるだらう。なんにしろこゝのおやぢがくもすけどもをしこなすあんばい、唯の親仁たア見えねへから、あんまり見つともねへこともなるめへぢやアねへかへ。彌「コリヤとんだめにあつた。北「しかたがねへ。おめへなんのいはずともいゝに。おれは役者だ。名

古屋で貳百兩とつたの。イヤ善光寺へ抱られたのなんのと、しゃべつたからわりい。彌「イヤ、手めへがいらざる芝
 むばなしを、なせしだした。北「今愚痴をいつてもはじまらねへ。貳歩出してやりなせへ。彌「貳歩はをしい。壹歩や
 らうか。北「エ、往生ぎはのわりい人だ。貳歩さ。彌「つまらねへ。只うつちやるやうな。ト、しかたなしに金
 貳歩取出し、紙につゝみて茶代におき、ていしゆへいち禮をのべてしほ、と、このところをたち出ゆくとして、
 何事も堪忍五兩さし引て貳歩とられたることのくやしき
 かくよみて大わらひをなしつゝ、ほどなく松本の御城下にいたりければ、

いく千代をふりよく見ゆる枝町もしげる常盤の松本の驛

この御城下いたつて繁昌の所にして、町並よく商家數多軒をならべて、往來殊に賑はひたり。こゝにて町なかの茶店
 にいりて、ふたりともやすむ、ちや屋女ばう、お出なさんし、サアお茶あげませず。彌「ア、爰へ来てやう、虫が
 おちついた。北「ホンニおもひがけもねへめにあつた。ト、此内此茶やのていしゆ、見せさきにこしをかけてあたりし
 が、モシあなたがたア、お聞なされずか。今村井の茶屋で旅役者が雲助どもと、いさかひをはならかして、らんごく
 すると聞ましたが、さうだかのへ。北「サアまたはじまつた。彌「さやう。えどの役者ださうなが強いやつて、
 大ぜいのくも助どもを相手にして、たてをしやしたがおもしろかつた。女房、あせたかのへ。役者といふと道中ではこ
 ぎられますが、その役者はあんどいふやくしやで、どんなをとてござりましたのへ。彌「よつぽどい、男さ。ひと
 りの若いほうのやつはそんなでもなかつたが、すこしとしばへのはうは、せいの高いにがみばしつた鼻の高い男、わ
 つちらが女だとあんな男にほれやす。女房、そのやくしや見たいもんだが、こつちのほうへ参りますかのへ。ト、いひ
 つゝ、にはかにさしくしにてびんをなてつけ、えりもとをかきあはせて、おもてへはしり出、のびあがり、見てあ
 たりしが、むかうよりいきづゑをつきて来る男を見つけ、こゑをかけ、女房「太五七どん、村井のほうから役者がくる

ずらア、まんだやつとあひだがあらずか。太五七「むら井の喧嘩けおもしろかつたのへ、もうその役者はとつくにこつ
 ちのほうへ来たずらア。ト、いひつゝ、彌次郎きた八を見て、太五七「ソレ、役者はそこにだそ、こだに。女房「ドレ
 ドレどこにのへ。太五七「それさ、おかたのうちに休んでゐるひたりの人がのへ。女房「アホ、、此ふとはだまくらか
 す、あんな役者がどこにあらず。彌「こいつはたまらねへ、サア、逃出さう。アイお世わになりやした。ト、後をも
 見ずしてさう、にかけ出し、あしばやにこゝを行すぎたるに、近在の醫者と見えたるそう髪男、さきにたちて行
 をよびかけ、彌「モシ、これからぜんくわう寺みちへは、どうまゐりやすね。醫者「ぜんくわう寺へは、むかうへい
 きあたつて、右手の町をどこまでもいかつせるがえい。さうしると本街道でござらア。したがのへ、是から成合新
 田といふへ、なから貳里もいかつせると、それから池田大町どほり、是も善光寺道でござらア。今は大分ふとが此道
 をいくので、馬も駕もござらア。それにのへ、栗尾の觀音、松尾薬師、宮城の不動などといふ結構な参り所もあるも
 んだんで、此道をいかつせるがよからず。本街道とおなじこんでござらア。彌「そんならそのほうへいつて見やせう
 か。醫者「わしその新田のもんだが、松本へ買もんにいきをつて、今歸りがけだんで、同志にいきませず。さうして
 栗尾へもいく用があるもんだんで、コリヤアえいつれだに、やく、案内をたのまつせるよりかア、わしにくつとい
 てござらせへまし。彌「そいつはありがてへ。そんなら御一所に参りやせう。ト、この醫者どの、あとにつきてゆけ
 ば、御城の大手のまへをひだりのかたへまちはなれて野道にかゝり、しろやまといへるふもとを打過るとて、
 夕ぐれの雲のはた手にほとよぎすこゝにこもりてなける城山

それより齋川の岸つたひを、熊村の橋にさしかゝりて、

熊むらのはしはさぞかし夕こえて照わたらん夏の月の輪

かくて成相新田にいたり、宿はづれにわびしき茶やのあるに立寄、醫者「ヤレ、てきないおもひでかりて来た。どう

ぐぜつても、かせないにやアこまりはねる。コレ／＼ば
 さま、この衆に茶でもしんぜさせへ。サアわしのうち
 は爰だにちくと休んでいぢやかつせ。わし是からその栗
 尾へ同志にいきませず。彌次「いかさまいつぶくたべやせ
 う。モン御めんなせへ。北八「コリヤ醫者さまの内か茶屋
 だからをかしい。なんぞうめへものはありやせぬか。
 醫「したくするならこゝでしていぢやかつせ。北「さう
 さ、いつばいくつていきやせう。何がありやす。ば／＼と
 うふと菜ばつかてござらア。醫「けふの豆腐はできそく
 なつて、やわらくくて、ずだいであらずが、そんだいに
 やア、飯はこんぢう焚ておいたのだんて、干からびてよ
 からずなア。彌「なんでもいゝから二せん、はやくたの
 みます ト、此内ばどはなべの下をたきつけ、やがてめ
 しをもつていだと、北「なるほどコリヤア針のやうな
 飯だ。しかしこの菜はめつさうにうめへ／＼。彌「さう
 さ、とりたてと見えて格別だ。モンばあさん、飯も菜も
 かへてくん。北「おいらも菜をもういつばい。しかし
 ばあさんの水ばながおちたかして、ちと水くさい。ば／＼お



まへの平のなかへ、がらひひと半おとしました。彌「エ、きたねへことをいふ。それでこの菜がまづくなつた。醫「ま
 づいたアなからず。わしとこの畑は焼場のそばだんて、こやしにその焼場の灰をかけをりませア。北「エ、いふほ
 どの事がろくてねへ。コリヤ胸がわるくなつた。はいてこよう ト、せどぐちへゆきしがやがてもどり、袂からもち
 のまつさをにかびたやつを、そつと出して見せかける。彌「なんだ／＼。北「コリヤ聲がたかい。死人を焼た灰を、
 こやしにかけた菜をくはせやアがつたかはり、座敷の椽さきにかびた餅のほしてあつたのを、した／＼かはへつけて來
 た。ハ、ハ、ハ。醫「したくがよかアいきませずか。彌「サア／＼お供いたしやせう ト、此所のはらひをして、か
 の醫者と連だちいづると、此しゆくの中ほどよりひだりのかたへ、野道をたどりゆくほどに、やがてかのくりやうの
 山にさしかゝり、一の木戸といふをすぎて、坂みちをのぼり、むみやうのはしといふにいたる。此所に又ちくしやう
 ばしといふあり、醫「モシ／＼が高野山の無明のはしとおなじこんだ、罪障のふかいものは懺悔をしてわたらない
 と、この橋がわたられないもんだんて、そつちらの畜生ばしといふをわたつて、まゐるとこんでござらアのへ。
 彌「そんなら喜多八なんぞは、此はしをわたるには懺悔をして渡るがい／＼ぜ。北「イヤおいら／＼りかめへこそ、ソ
 レ久しいあとにどこのか内へ遊びにいつたとき、れんじのかなだらひを盗んで背中へ入れたがい／＼が、階子を降ると
 つて、おつこととしてグワン／＼はをかしかつたぢやアねへか。彌「イヤ人の事をいふ手前が、眼前にさつきの事だ。
 このお醫者さまのうちでほしてあつた餅を、北「ア、コレ／＼とんだことをいふ。それともいひづくなら、おめへも
 二せん飯をくつて、一せんぶりはらつて來たんぢやアねへか。醫「ソリヤどこでのへ。北「おめへの所でさ。彌「ヤ
 アヤアこのふとは、おぞい事するふとだ。此たかい米をだめにくはれてたまるもんか、わし一文でも損をすることはき
 らひだんて、今その一せんぶりをよこしてくれさい。彌「ナアニわつちがそんな横着なことをするものか。醫「インネ
 かくさつせると、此無明のはしがわたりぬくからず。彌「エ、めんだうな。ソレ一せんぶり十二文あげやせう ト、

ぜにいれより出してわたし、かのむみやうのはしをわたりゆくに、醫者ひとり、ちくしやうばしをわたりてゆく。
 北「コリヤをかしい。わつちらは此はしをわたりつたに、お醫者さまひとり、なぜそつちらの畜生ばしとやらをわたり
 なさつたね。醫「ハテ野暮なことをいふふとだ。沙汰はないこんだが、わし醫者はしてをるが、わしの薬のんだふと
 に、たすかつたふとがふとりもないで、その罪があらざとおもつて、アノ無明の橋はあしがくすばつたくなつて、わた
 りぬくいものへ。北「そんなら、かのヒをもつてござるばかりで、解死人にもならねへといふものだね。醫「さう
 でさうで。醫「ハ、ハ道理こそ、この栗尾のお寺と心安いといひなさつたが、今よめた。ハアおてらと醫者さま
 とは、中のわりはずだに、マアお寺では、人がしなねば錢にならず、その錢にならうといふ病人をよくする醫者さ
 まだから、敵同士のはずだに、かへつておてらとねんごろなといひなさるは、ひとを殺す醫者さまだけ、おてらのた
 めには福の神といふは、おめへのことだ。醫「さやうとも。さうだんて、わし自慢するぢやアないが、どこの寺
 がたへいつてもやれくと、もちもつてうしられて、したにおくことぢやアござらないわのへ。ハ、ハ、ト、この
 はなしのうち、さいの河原法然堂を打すぎ、おしかの松といへる名木をながめやりて、
 此景色見てもあられず旅の身は名残をしかの板や過らむ

從木曾路 續 膝 栗 毛 八編 下卷
 善光寺道 續

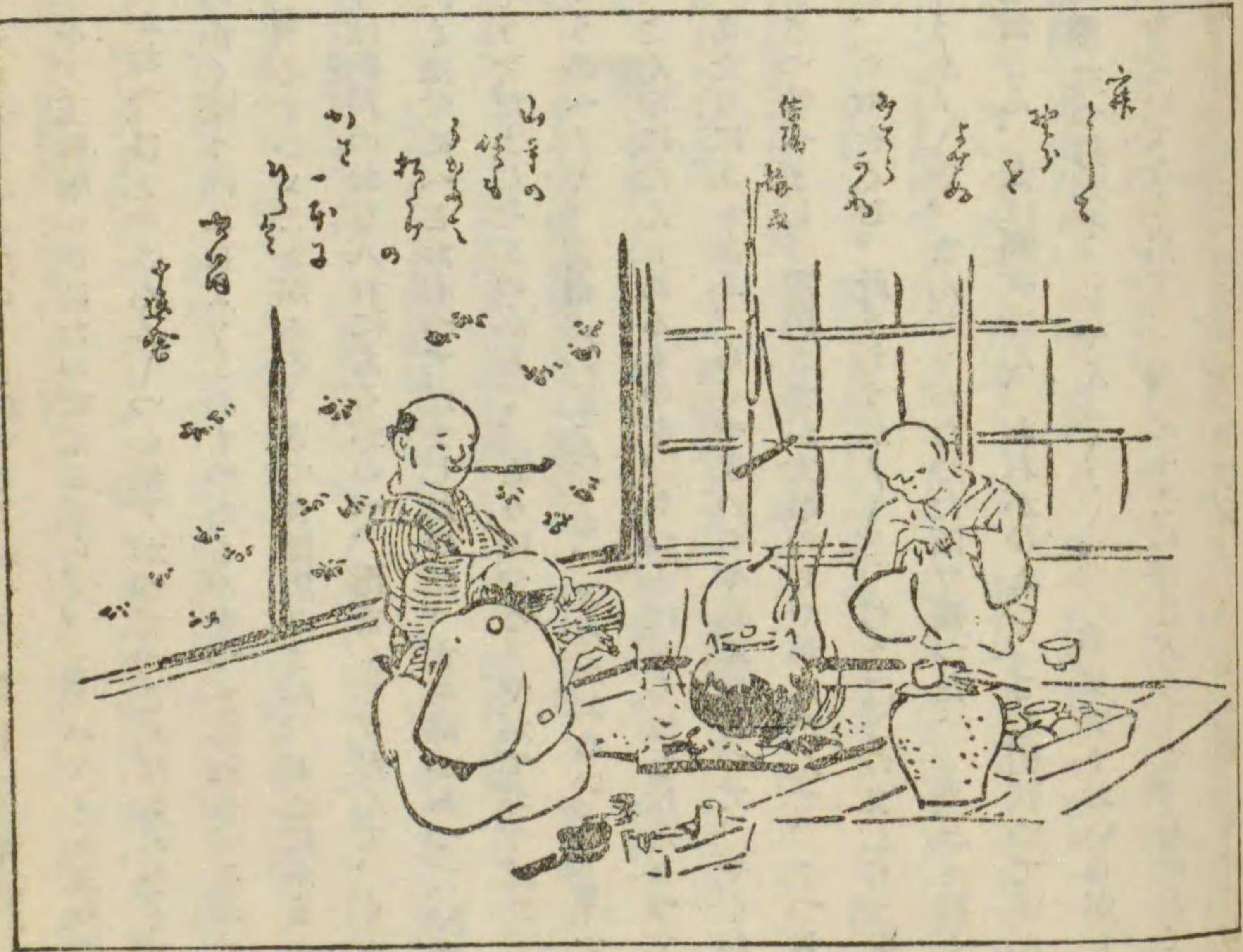
信州栗尾山満願寺は、大同二年田村將軍の開基にして、本堂千手觀音其外如意輪堂、焰魔堂、十三堂、すべて三十六
 堂、寢をならべて、梁に彫ものし、柱に畫き、其結構いふばかりなし。麓より十八町の坂をのぼりて、仁王門山門は
 雲に聳、古松老杉森々と生茂りて、岩間をつたふ水のながれも滑なり。まづ本堂に参り、ふしをがみて、

酒の名の満願寺とてみほとけの衆生濟度も一本木なれ

かくて境内をめぐりたるに、その日もはや暮ちかくなりければ、このお寺に一宿を願はばやと、かの醫者を頼むに、
 早速吞込、ふたりを臺所のかたへともなひ、醫者「わしさういつてしんぜませずに、いつときこゝにまたつせへまし
 ト、だい所よりあがりて、おくのかたへ行しが、しばらくして出きたり、「サア、お宿ができた。ト、此内とし
 かましきばうさま、「コリヤおきたびれであらず。お國元は、彌次「ハイ江戸でござりやすが、松本から此おかたとお浦
 になりやして、御當山のことを承り、参詣いたしやした。どうぞ今晚は御役介に預りたうござりやす。坊「おやす
 いこんだが、この普請中で方丈は取込、おかまひ申す事ができぬくいで、此むかうに隠居所がござるに、それでおとめ
 申ませず。のう益徳様、あつちへつれさつせへてくれさいまし。醫「いんま御隠居もさうおつしやれた。サア、御案
 内しに、こつちへござらせへまし ト、方丈をすこしはなれて、いんま所のある所へともなひてゆく。こゝは見
 はらしのよき所にて、當山の隠寮なり。かけひの水にてあしをあらひ、ざしきへ打とほり見るに、小庵なれどもきれ
 いにして、庭などもよく、いんまよと見えて、六十あまりのをしやうさま出きたりて、隠居「これは、只今承つた
 が、遠方からよく御参詣でござる。方丈は普請中ゆゑ、手せまなれど、ゆつくりとやすまつせへまし。彌「ハイ
 ハイかならずおかまひ下さりやすな。コレハ思ひよらずおせわさま、ありがたうござりやす。隠居「コリヤ益徳老、よ
 くわたせたの。コレ小僧、お茶を出さぬか。北「ハ、モシどうぞわたくしには、お素湯があるならひとつおねがひ申や
 す。コウ彌次さん、なんぞ丸薬もあるならくんなせへ。どうしたか心もちが變になつた。醫「いかさま、おまい顔
 つきがわるい。ドレお脈を見てしんぜませず。ヤア、すつべり脈がなくなつた。北「ソリヤ脈のうつ所ぢやアねへ
 もせぬものを。醫「ホンニコゝではなかつた。コリヤどこらであつたか。イヤ、こゝにあるぞ。ハ、アこれはおま
 い虫でもかぶるか、頭痛がするか、腰がいたむか、足てもひつばるか、大かた此うちであらず。北「どうもなんだか

ぞく／＼しやす。醫「こんちうから疝氣がはやるもんだんで、おまいも疝氣であらず。その證據は金玉で、頭痛がし
 るずらア。それがつのと天窓へのぼつて、足痛といふになつて、鼻がいがむか、眼がきこえないやうになるか、し
 かし死ぬまでは、命にはきづかひはなからず。わしこゝに薬は持合さないが、馬のないらに奇妙なくすりをもつてゐ
 る。それでも飲で見さつせへますか。北「ソリヤアおくすりのおもちあはせがなくて仕合だ。さつきのおはなしをき
 いては、おめへの薬はのまれやせぬ。隠居ソレ／＼この人の薬はよさつせへまし。檀方の内の病人へ、世話してやる
 ことは格別、山内の病人へこの人をかけたことはござらない。醫「さういはずせるな。わし薬もることこそ不得手だ
 が、そんだいにやア、相撲をとらしると大名人、お望みならおまい一番いぢやござい。おそらく病人を相手にしちや
 ア、むづまけたことのない男、わしのとりえはこればつかでござらア。北「イヤもうおはなして、病が呆れたかし
 て、どうか心もちがよくなりやした。ト、此内男きたりて、「お客さまへ御膳をあげませず。御隠居さま益徳さまは、あ
 つちへござらせへてくれさつせへまし。隠居「そんだらおきやく、ゆつくりとまゐりまし。ト、あいさつして、ぼん
 とくをともしなひ、方丈へゆく。男どもぜんをもち来りすると、小ぞうどもきふじにいで、ふたりともやがてくひし
 まひたる所へ、いんきよ又来りて、隠居「コリヤ鹿末でござつたらア。今夜は方丈に、ちくと相談することがござつて、
 講申がわせられたんで、おかまひ申さない。勝手にかたげさつせへまし。コリヤ小僧／＼、もうそこで居眠るるか。
 茶でも煮て進ぜたがよからず。今にあつちから夜具をよこさずに、床をとつてしんぜて、われもかたげをれ。わしは
 方丈にとまるぞ。コレ／＼納戸の重箱の饅頭に手をつけるな。あのまんぢうには毒がある。くふとぢきにしぬほど
 に、かならずくふなよ。火の用心はえいか。ヤア雨がふるかして、コリヤまつくらになつて来たわ。ト、いひすて、
 出てゆく。折ふし雨ふり出して、山中のことなればことの外さむくなり、こぞうはだい所にたき火をして、あたつて
 あるを、きた入見てうらやましく、おくのまよりそろ／＼出かけて、「がうせいに寒くなつた。お小ぞう様、ちつとあ

たらしてくんせへ、コウ彌次さん、いゝ火がある。おめ
 へもこゝへ来てあたねへか。彌「ツトそいつはよか
 らう。ト、おなじくゐるりのはたに、大あぐらをかいて
 あたりながら、きた入はしんでんのちや屋よりぬすみ来
 りし、もちをとり出し、ゐりへくべる。彌「何をやくの
 だ。ハ、アさつきの餅だな。コリヤめつさうにかびてゐ
 る。北「こんな毛のはえるほど、かびたやつは結句で
 うめへものだ。彌「おれにもひとつくれるへ。北「た
 とはねへ。彌「それだつてひとつづらゐはよからう。
 北「そんならやらうから、此薬罐をこぼして、水を入れ
 て來なせへ。煮花と出かけよう。序にわつちのきせるた
 ばこ入が、ざしきにある。ちよつとつて來てくんな。
 彌「エ、よく人をつかやアがる。是もくちにかはれる
 のだな、しかたがねへ。ソレ駄賃ひとつよこせ。北「お
 小僧さんにもひとつあげよう。小僧「インネわしそれはや
 アだやアだ。北「なぜ、餅はきらひか。小僧「もちはずきだ
 が、ソリヤアやアだ。北「ソリヤアいやだとはどうした
 ものだ。是はどうめへ餅だものを。ト、ひとくちわんぐ



りくつて見て、わつといひながらほき出し、北「ア、く、コリヤアなんだらう。餅ちやアねへ。彌「ドレ、ほんに
 變ちきなものだ。お小僧さん、これは何だらう。小僧「ソリヤア玉味噌のかびたのであるぞらア。彌「ハ、ハ、玉味噌
 のほしてあつたのを、餅かとおもつて、盗んで来たもぢゑがねへ。ひとをさんくつかやアがつて、こんなものをくは
 せようとしやアがつた。いめへましい。北「ハ、ハ、せつかく茶うけにしようとおもつたものをつまらねへ。そのく
 せもう湯がたつた。お小僧さん、茶を入れてくんませへ。彌「イヤい、ことがある。さつき隠居さまが、どこにかま
 ぢうがあると、いひなさつたぢやアねへか。小僧「まんぢうは納戸のおし入れにあるがのへ、毒まんぢうだんて、くふ
 とぢきに死にますげな。彌「ハ、ハ、隠居さまがおめへにくはせめへとおもつてだましたのだ。ナニ毒があつてい
 ものか。何にしる爰へもつて来て見せなせへし。ト、小ぞうをだましそゝのかして、とりにやるとやがてぢうばこく
 るみもつてくる。北「ドリヤわつちが毒味をしよう。ア、うめへ。小僧「わしそんでも、きみがわるい。彌「ナ
 ニサ毒もなんにもねへから、小僧さん、サアくひなせへ。こんなになんとあるものを、ちつとばかりはしけたとつて
 しれるものか。時に茶碗がほしい。イヤ爰にあるぞ。ト、あたりにありあふ、らくやきのちやわんをとつて、やくわ
 んのくちからつきにかゝると、小僧「コレ、その茶碗はよさつせへまし。隠居さまが大事のちやわんだんて、こつち
 らのをしんせませず。ト、外のちやわんをふたつとり出し、ちやをくむ。此うちうか、と、ぢうばこのまんぢうを
 大かたにくつてしまひ、彌「ヤア、大變なことだ。ツイうか、と、まんぢうがたつた四ツ残つた。北「エ、毒く
 は皿とやら、もう一つづゝくつてかたづけよう。ソレ小僧さん、是は彌次さん、おれがひとつ、さし引残つてまだ
 ひとつある。三人狐拳でおつつけよう。サア來なせへ。彌「三つ打だぞ。しやん、。北「ヲットおいらがし
 めた。ト、まんぢうのこらずくつてしまふと、小ぞうべそをかいてなき出す。彌「イヤこの子はどうした。なぜなく
 なぜなく。小僧「まんぢうをみなくつてしまつて、うら隠居さまにしかられませず。ワアイ、。北「ちつともきづけ

へしなさるな。わつちが言譯をしてやらう。コウ彌次さん。今の茶碗をとつてくんな。ヲ、それだ、ト、かのら
 くやきのちやわんをとつて、いろりのふちへ打つけて、まつぶたつにうちわると、小僧「ワアイ、。彌「エ、この
 男は何をするのだ。氣でもちがつたか。ソリヤ御隠居が秘藏の茶碗だといふに。小僧「アノちやわんをぶちわらつせへ
 ちやア、うらあんとせず。ワアイ、。北「お小僧なくめへ。おいらがみな呑込、ト、おちつきはらつてある所
 へ、そとよりいんきよのこゑにて、コリヤ小ぞうよ、こゝをあけてくれ。北「ハイ、わつちがあげてあげやせ
 う。ト、入口の戸をうちよりあけると、いんきよ枕と手しよくをもつて、男に夜具をもたせ來り、隠居「コリヤ傳す
 け、その夜具はそこにおいてかへれ。お客達まだおきてござらしか。ヤイ小僧、あんとした。あせなきをる。
 小僧「アイ此ふとちがまんぢうを。隠居「ナニまんぢうをあんとした。北「イエ御隠居さまへ、面目もないことがござ
 ります。わつちがアノお小僧さまと、ほんのじやうだんに、爰ですまふをとりやしたが、ツイ茶碗の上へ轉げて、こ
 んなに打こはしたもんでござりますから、お小ぞうさまが、コリヤア御隠居さまの御秘藏の茶碗を破つて、言譯がね
 へ、とても生てはゐられねへと、泣出したさる。わつちもまた、こんなにお世話に預つたうへ、面目次第もねへ。あ
 なたに顔があらはされやせぬから、いつその事しんでのけうと、ふたりとも覺悟はきはめました。山の中で身を投る
 川はなし、首を縊るは勝手がしれず、コリヤさいはひ、あなたがまんぢうに毒があつて、くふとしぬといふことをお
 つしやつたを、承つてをつたゆゑ、お小僧とふたり、そのまんぢうをくつて見やしたが、どうもしにやせぬから、コ
 リヤくひやうがたらねへからだ。もつとくつたらしぬであらうと、ツイみなくつてしまひ申したが、因果のつくばい、
 やつぱり死やせぬので、申わけがござりやせぬ。隠居「アニわしが上がたて、やう、鬨して來た茶碗を、埒へらもな
 い。それにまんぢうをみなくらひをつたとは、此むたらくものめが。しずこんがない。まんぢうはまんだ一重、外に
 しまつてあるもんだんて、もうなかずともえい。なくな、北「ヤアまだ外にござりますか。コレお小僧さん。そ

の一重をも出して來なせへ。もつとくつて見やせうから。隠居「ア、イヤ／＼もうえい／＼。北「それでも、しなねへけりやア、申譯がござりやせぬから、もつとたべて見たうござりやす。隠居「インネもうしなずともえいずらア。北「さやうなら御了簡下さりやすか。ヤレ／＼嬉しや。サアお小僧さん、ざつとすんだ。隠居「エ、あんとしず。コリヤ小僧、あとの一重はもう毒の有ではないに、かならずくひをるな。いくらくつてもしぬこんではないもんだんて、くふときかないぞ。ト、こゝとたら／＼いんきよは出てゆく。あとは大わらひにて、北「ハ、ハ、ハ、なんと彌次さん、おいらの智慧は、ちよつとした所がこのくらゐなもんだ。彌「イヤ是は手めへが一生の出來だ。アの茶碗をわつた時は、おれもびつくりして、ねつから合點がいかんだが、こればかりはさすがのおれもおそれ入つた。可愛さうに、お小僧はちつとの間氣をもんだらうの。コレお小僧／＼、オヤ子どもといふものは罪のねへものだ。ないてゐるのかとおもつたら、いつの間にか倒れて他愛がねえ。北「ム、ねてゐるか。コリヤをかしい。時に今夜はなぜかまだねたくねへ。なんぞ外にうめへものはねへか。さがして見よう。ト、だい所のぜんだなを、こそ／＼とさがして、ちひさな手とりなべになにかあるを見つけて、もち出し、彌「コリヤなんだ。ハ、ア胡麻のあぶらと見える。ナントまんぢうが、まだ一重あるといふことだから、それをこのあぶらであげてやらかさうぢやアねへか。北「ソリヤア奇妙／＼。どこにあるか、おいらがさがして見よう。ト、つけ木をともし、そこらあたりをさがして、やう／＼にたづね出し、かのなべをかけてたきつけ、彌「こいつはうまからう。サア煮たつた。ぶちこめ／＼。ト、かのまんぢうをなべの中へ打こみ、あげてくふうち、うらのかたにてきつねのこゑ、彌「ケエン／＼。北「アリヤアなんだらう。彌「ハ、ア狐のなくのだが、きこえたきこえた。此油の匂ひできやつめがうせをつたのだ。はやくくつてしまへ／＼。ト、ふたりはめい／＼はしをもちて、鍋の中へかほをつつこむやうにして、くつてゐるうち、このあぶらのにほひをかぎつけ、きつね一疋、やねのうへにきたり、あろりの上のひきまどから、のぞきてゐたりけるが、このきつね、しだい

にまどの中へくびをさし入れ、むちうになり、われをわすれてや、まどからちやうど、なべのかけてあるうへ、どつさりおちると、ゆだまのたちたるなべはひつくりかへり、あぶらがはねるやう、もえさしのまきがとぶやら、ふりはかほもてあしも、いちどきにやけどをして、きもをつぶしとびあがる。きつねもうろたへ、彌次郎にとびつき、ひつかきちらして、いちもくさんに、ざしきのしやうじをけやぶり、にげてゆく。ふたりはおもひがけなく、びつくりして、なにかわからず、やけどはひりつき、からだは灰まぶれとなり、たがひにかほを見あはせ、ためいきをつき、しばらくものもいはず、あきれかへつてゐたりしが、彌次郎もかなしうなこゑを出し、彌「ア、きた入／＼。北「オ、イ／＼あいた／＼。彌次さんナント今のはなんだらう。彌「なんだかしらねへが、顔も手足もひり／＼して、ア、いたい／＼。北「さては、今のは狐めが、あぶらのにほひにかぎ入て、上の窓からおつこちたのだな。道理こそ、コレ／＼そこらぢうが毛だらけだ。エ、それ彌次さん、マアたちなせへ。彌「イヤたゞれねへ、手をとつてひつばつてくれ。あいた／＼。なんの、あとのまんぢうはくはずともよかつたものを、手めへがさがし出さずともいふことだに、おれをば大變なめにあはせた。北「わつちもやけどがいたくてならねへ。いめへましい畜生めだ。

まんぢうのあんにたがはぬむくひ來てかゝるやけどのあつ皮なつら

(ふたりはやけどに、ともしあぶらなどぬりつけ、くるしき中にもをかしく、そこらとり片付、よけいのことをして、くやめどもせんかたなく、やがてめい／＼とこをとりて、打ふしけるが、ほどなく夜もあけて、深山鳥のこゑ／＼告わたるにおきたちて、したくそこ／＼にとゝのへ、お寺へいち禮をのべて、立出んとするに、夜前より雨ふりつゞきて、あしもとわるきに、やけどは水ぶくれにはれていたみけるゆゑ、つゑをもとめてやう／＼と、この御山のふもとにさがり、まつを寺への道をたづねてたどりゆくに、田むら丸のよろひ塚あるあたりにて、雨いよ／＼しきり、ふりいだしければ、)

鈴鹿にはあらで田村の鎧塚千の矢さきとふりしきる雨

それより小岩嶽といふにいたる。此所はいにしへ小岩嶽何某のこもれる城跡なりときけば、

城あとに今はつくれる菜大根そのとき／＼のこゑやすららん

かくて雨もやみたれば、桐油をたゝみて、肩に打かけつゝゆくほどに、此あたりすべて山の麓道にして、葎薄など所
所に生茂り、谷川の音かすかにきこえたり。(くさかりの子どもあつまりてうたふうたに)「うらがせどやのゑんのこ
ろ／＼、まんだ目があかんで、ちとべこ小糠をねづらした／＼。北八「イヤ猿かとおもつたら人間の子供だ。ハ、ア
いづれを見ても山家育、刀作の作佛と見える、ハ、ハ、ハ。イヤむかうの岩の間から雉子が一羽ながれてくる。アレ見な
せへ。とつていつて晩の泊で煮てくはうか。彌次「ホンニそれ／＼、ヤア南無三ばう、あそこへひつかゝつた。北八手
めへとつて来い。北八「川へはいるはおそれるの。コリヤ／＼あの子、向うの雉子をとつて来てくれねへか。錢を八文
やらうから。子どもム、錢くれさせぬなら、取て来てやらす。ト、かの子どもが川へはいりて、くだんのまじをと
つてくると、せに入文をやりて、まじをひきとり行。あとからつばうさげたる男、おつかけ来り、男「コリヤ／＼
此衆たちは、あせその鳥をとつていく。北八「ひろつたのだからもつていくがどうした。男「インネうらがたつた今、
この鐵炮でぶつたのに、よこせつちや。北八「ばかアいふな。きさまがうつた鳥なら、すぐにとつていけばいゝに、
川にうつちやつてあつたのだ。とはうもねへ。男「エ、おぞいことするな。よこせつちやア。北八「イヤやらねへ。よ
こせたアふてへやつた。うぬはつひにをがんだこたアあるめへが、えどつ子さまだぞ。山の中の猿どもがとほりをく
つてつまるものかへ。ばかなつらな。ト、だん／＼こわだかにいふこゑをきゝつけてや、所のものを見て、いづれ
もひげむしやくしやととりみだし、大の男ども、めい／＼ぼうやかまをひつさげて、三人までかけきたり、「あんだ
あんだ、そいつら、がいにくせらかすと、しやつつかまへて、ずだいなめにあはせてやれつちやア。ト、おもひの外、

手づよく出られて、いらざることにひまづひえとおもひ、彌次郎兩はうをおしなだめ、彌「マア待なせへ。なるほど
きさまたちが打た鳥と見えて、鐵炮のあたつた所があるが、何にしるこつちも、ながれて來たのをひろつたのだか
ら、コリヤどつちにも理屈がある。そこでわしの了簡は、何でも此鳥をむかうの岩のうへにおくから、きさまたちが
もう壹度、鐵炮でうつてとりなせへ。もしあたらねへと、そのときはこつちへとる。ナントさうしてかたをつけよう
ぢやアねへかへ。男「コリヤよからず／＼。わしくらやみてねづらつても、とつばづすこんではな。サアそこにお、
かつせへ。ソリヤぶつぞ。北八「コレ／＼そこではあんまりちかい／＼。男「そんだからこつからぶつ。ソリヤポウン
ト、かのまじをなんのくもななくうつて、サアぶつたわ。しめた／＼。ト、まじをとつて打わらひ、みな／＼はるかに
行すぎ、北八「エ、つまらねへ。なんの彌次さんが、いはずともいゝことをいつて、子どもにやつた八文を棒にふらせ
た。彌次「ホンニ、よもやうちはしめへとおもつたに。よくおもへば、生てかけ出すやつをも、うつてとるやつらだも
のを、おつとうごかねえ鳥をうつぐらゐは、おちやの子のはずだ。コリヤいちばんおいらのちゑがなかつたわへ、ハ
ハ、ハ、ハ。

鐵炮の目あては調度あたれどもこちらのあてのつちははづれた

この邊より、松尾へいたる道に、いにしへ鬼のこもりしといふ岩穴、所々に見えたり。

酒の名の鬼のこもりしところとて下戸のたてたる穴藏でなし

それより古厩村霍尾山、松尾寺の薬師にいたる。此所は皇極天皇の後胤鷹野伊勢守、白鳳二年の開基のよし、堂塔
の莊嚴いと殊勝にして、靈應もさこそとおもひやられければ

杓子より薬師如来ぞありがたき人をすくはせ給ふちかひは

かくて爰かしこ巡拜して、御堂の前より並松の間をゆく。宮城への道なり。此所より壹里ばかりゆきて、峨々たる巖

にたてたる所なれば、彌次郎のまちがへたるもことわりなり。やがてこの家を立出て、五龍山にさしかゝる。宮城五龍山王院本尊不動明王は、五龍の瀧より出現し給ふ靈像にて、應驗あらたにましますにより、遠近の參詣絶間なく、境内いたつての景地に於て殊に秀麗なり。

參詣の貴賤は次第不動尊このはんじやうをみやしろのやま

これより、池田の宿に出る道筋を、くはしく尋ねてたどりゆくに、高瀬河原といふに出、こゝを打わたりて、ほどなく池田の町にいたる。いまだ日は高けれども、此さき大町宿まではよほどの道法ときくより、此所に宿をもとめんとて、或はたごやのかどに立より、彌モシわつちらア善光寺へいくものだが、今夜どうぞおたのみ申てへね。おやちハイとおとめ申ませずが、ちくと内に取込のこんがあつて、おやかましからず。それに座敷はふさがつておざんしない。二階でもよからずか。彌ナニどこでもいゝからおたのみ申やす。おやちソんだらおとめ申ませず。コリヤ傳太、あしをあらひあがる。おやちサア、こつちへござらつせへまし。ト、ふたりを二階へあんないする。わづか六疊ばかりのてんじやうもなき所に、わかき男ひとり糊のこはきせんたくぶとんをひつかぶり、ねてゐたりしをしきりによびおこして、おやちコリヤ先生、お客がござらせへた。今夜ア一所に頼んませず。モシお客さま、この衆はふさしくわしとこにとまつて居さつせるふとだが、おせばからすとも、こゝでゆつくりりと、ござらせへてくれさいまし。彌「アイ、どうでもいゝから、おかまひなざるな。おやち今に湯にごさらせへまし。ト、いひすて、おやち下へおる。さきにとまり合せゐたりし男は、これは江戸のものにて、たびをかせぎであるくゑかきなり。晝しサアおめへがたアお草臥だらう。けふはどつちから。北「アイ栗尾から松尾寺宮城へ參詣しやした。えしそれはよくこそ。おくには。北「えとでござりやす。えしさうだらうとおもひやした。わつちも江戸の哥麿の門人で、奴多丸といふもの

で、此間から當所へまゐつてをりやすが、モシこゝにをかしいことがありやす。コリヤ江戸へお歸なざつて、はなしのたねだ。今夜こゝの娘が、外へ嫁入して行やす。ソレおめへがたがこゝへあがつて來なざるとき、したにてつくりとして色の黒い、額口に此くらへの瘰癧のある坊さまが居申したらう。あれは此邊の誹諧の宗匠で、今度の仲人、イヤ此間から大變の騒ぎで、今夜嫁入していくに、わつちが晝かきだけ、娘のひき肩をつけてやつてくれると、頼れてゐやすから、をかしいぢやアござりやせんか。彌「そいつはおもしろい。どうぞ其娘を見てへものだの。えし今に見なせへ。それこそ大變なあばたで、足のふとい、尻が京間で七八間はありやす。ト、此はなしのうち、下女きたりて、女「おきやくさま、湯にごさらせへまし。彌「ドレ、娘御を拜見いたさうか。ト、下へおりてゆく。やがて北八も入しまひ、ほどなくめしも出て、くひしまひたるころ、下よりおやちのこゑにて、おやちせんせい、ちよくと來てくれさい。えし「アイ、それへ參りやせう。モシ爰から覗いて御らうじやせ。ト、ゑかきは筆ばこをもつて下へゆく。彌次郎きた八は二かいのあがりくちまではひ出て、下をのぞき見れば、むすめひとりの大せいにてとりまき、母おや、けしやうをしてやるうしろに、おやち目がねをつけてのしかよりながら、おやちコリヤ、その鼻の下のひつつりのところが、がいに薄からず。まつと白粉をむたらくにぬれつちやア。母「これでちやうどつこ、ひた箱つけただ、もうなくなつた。ヤイおなべのへ。うらが櫛箱の引ずり出しに、まんのおしろいがある。ちよくともつてきてくれさい。おやち石灰でもませらかいたがよからず。母「左官屋どのへ小手をかりにやらすか、どうも手ではあばたがぬりぬくい。えし「いつその事、べつたり顔を小手でぬつて、あとで眼の所や鼻の穴は、焼火箸であけたほうがよからう。下女「わしが今、鍋の尻を洗つて來た手でぬつてあげませずか。おやち「エ、だめばつかこきけつかる。うぬをたのまないでも、もうできつらア。母「これでよからず。見てくれさい。おやち「ヲ、えい。がいによくぬれた。是が冬でなくて仕合だ。冬だと氷つてすだいにならず。サア、先生、これからまい毛をたのんます。えし「ドレ、わ

つちが美敷してあげやせう。ヤアこれは下地薄い眉毛をべつたりぬりなくしてしまつたから、けんたうがしれなくなつた。どこらでよからう。おやち、エ、どこらとつて、まい毛を目の下へもつけられまい。母、さうでござらア。あれがまゆ毛は、たしか目のうへにござつた。まし、そんならこゝらがよからう。母、そんぢやアがい、ふたいでござらア。まし、ツツト爰でいゝね。ソレ、見なせへ。よく出来た。マア右の眉はこれでいゝが、ひだりの眉はどうかきやせう。兩はうおんなじやうでは見つとむなかる。おやち、さればなア、おかた、どうしるのへ。母、あんとしずか。マア先生さま、一ツぶくあがりなさんし。おやち、イヤコレすぐに、ふだりのはうをもかいてくれさい。みぎりへばつかまい毛をつけて、ひよつと先生が、これなりにわすれてしまつたら、をかしからず。まし、なるほどかたつぽばかりで、わすれてかゝずにしまつたら、をかしからう。序にひだりも、おなじやうにいたしておきやせう。ソレ、これよからう。おやち、またつせへまし。そんぢやアふだりのはうが、ちくと長からず。コレおかた、物指をもつて來され。まし、ナニそんなら右のはうをちつとのぼしやせうか。ソレ、おやち、ア、またみぎりがのびすぎた。まし、そんなら又ひだりのをのぼすか。おやち、インネもうよからず。あんまりがい、こつちをちくとながくし、又あつちをちくとながくしたら、まい毛がほゝべたまでぶらさがらずに、もうえいにせず。サア、おかた、着物はあにをきせず。母、びんらうじの鶴龜の模様を。おやち、オ、よからず。コリヤ野七、おまはこさいたか。コノまた仲人の宗匠は、まんだ來ないか。あにをしてゐるずらア。宗匠、イヤわしさつきから、こゝに來てゐるに。おやち、ホンニあんまりがいに、こなさまのからだがつかいもんだんで、見つけなんだ。サア支度はどうしる。宗匠、したくはとつくによくござらア。おやち、アニそれでか、上下はあぜきない。宗匠、アニ坊主天窓で上下はいらない。この十徳が上下のかはりでござらア。おやち、インネそんぢやア衣のやうでむづわるからず。上下着ていぢやかつせ。宗匠、わし上下はきられましない。おやち、あせ。うらがとこでは先祖から代々、聲舅は猶のこんだ。仲人しるふにも、上下をきせなく

ちやアならない格式だんで、うらのぼんばあどんのむかざれしてわせた時も、棚谷の太郎兵衛が仲人で上下きるし、これがあんねいを、保高の伊五左がとこへやるにも、仲人は木安どんだんで、そのひなたのやうに、十徳とやらいふもんを、やぐく着てわせられたを、うらがぐざりぬいて、すつべり上下をきせをつたもんだんで、今度の仲人も、上下をきせなくちやア、さきのうちへ外聞がわるいに、ぜつび着てくれさつせへ。宗匠、そんでも木安どのは物髪だんで、上下もよからずが、わし坊主あたまではきられましない。ヤアでござらア。おやち、インネきせなくちやア。うら仲人にやアもうたのまない。母、宗匠さまはヤアでもあらずが、わし家の風だんで、どうぞ上下をきてくれさつせへまし。宗匠、コリヤ迷惑せんばんなこんだが、あんとしず。しかし、わし上下は持合せがない。おやち、うらがのをかせてやらす。コレおかたどん、出して來いちやアト、此うち女ばう上下を出してもつてくると、宗匠はめいわくなから、日頃せわにもなる内の事ゆゑ、せんかたなく、ふしようくんに、



じつとくをぬぎすて、宗匠「わしつひに、此上下をきたこんがない。コリヤアこのそへ脚をつつこみませずか。おやち「ヲ、すねをかたつぼづ、そつちのそへもつつこむのだに、上下をきるこたア、うらがえてものだ、きせてやらす。かさねてもあるこんだ。よくおほえておかつせへちやア。宗匠「アニ坊主の上下をきるこんがかさねてあらず、ト、くちの内にはことたらん、やう／＼上下をきてしまへば、おやち「ヲ、えい／＼、マアしたにござらせへちやア。宗匠「アニこんなもんをきては、すわられまじない。おやち「そんでも、立はだかつてばつかはあられぬに。宗匠「エ、おもひきつてすわりませず。ヤアえつとこな。サアすわつたぞ。おやち「ソリヤアえいが、むかざれの座敷では、あんだかい／＼いふこんに、嫌ふこんがあつたつらア。肝心のこんだ。アノ歸るこんを、あんとかいつつらア。わしずだいわすれた。宗匠「ホンニそれ／＼、かへるこんを、ひらけませずと、たしかいふずらア。おやち「ひらけるではをかしからず。宗匠ふとつ、爰ていつて見さつせへ。宗匠「いつて見ず。コレハめてたうござる。そんだら仲人は宵の内と申す。うらどもはもうひらけませず。イヤ／＼ひらけるといふは、嫁御へさしあつてわるい。ひろげませずと、いつてはどうであらず。おやち「イヤ、ひろげるも、ばいらくのやうでわるからず。母「おもひつけた。ひらきませずといふづらア。宗匠「ひらくもひらけるもおんなじこんだ。花のひらくをさくといふもんだんで、斯いひませず。仲人は宵の内の内と申す。うらどもはもう、さけませず、と。おやち「エ、さけてたまるもんか。このふとは。宗匠「ハ、ハ、コリヤむつかしい。あんといつたがよからず／＼、ト、小さくびをかたふけ、いろ／＼かんがへてゐるところへ、この宗匠の女ばう、きがへを布ふくろにいれて、ひつ抱へいそがしうに、せい／＼いつてかけてきたり、女房「ヤレ／＼今夜はおめでたうござりますア。仲人は夫婦どうしに、いくもんだんで、わしとつくに來ませずと、おもひふくらみをつても、あんだのかだのと、おそくなつたもんだんで、コレわしのなりを見てくれさつせへまし。男はしよりにひつばしよつて、かけ出して來ましたが、ア、てきないこんで息がきれる。宗匠「どどこにゐます。おやち「コリヤおなあと

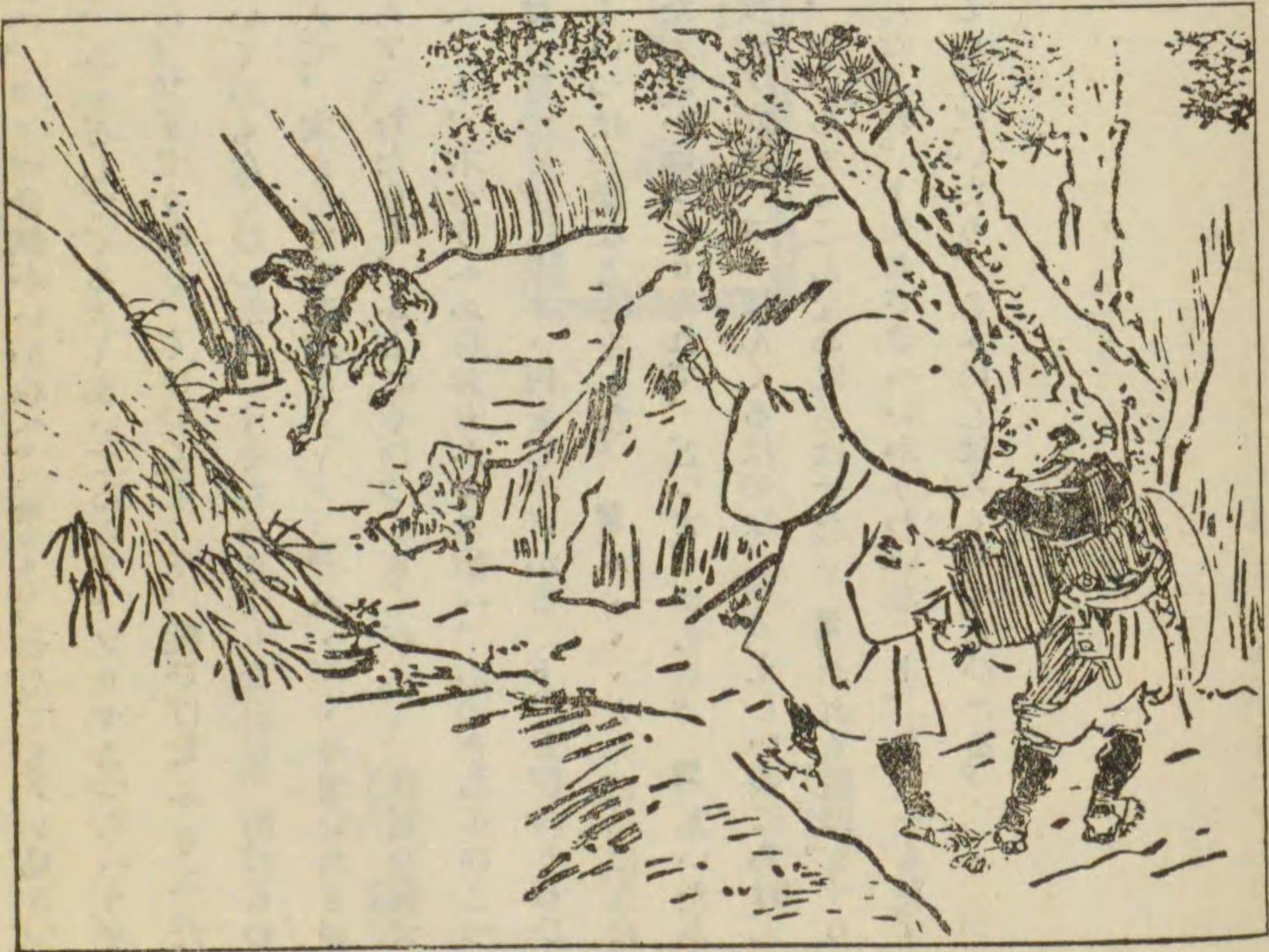
ん。御太儀でござらア。宗匠はとつくに來て、そこに。女房「ドレどこにのへ。おやち「ソレ上下をきてそこにだ。女房「ヤア／＼ひなたの此なりは、あんのこんだ。見たくでもない。ばあずが上下をきるもんか、ふとがわらはずに、外聞のわるい。あせそんなもんを。マアぬがつけへちやア。宗匠「エ、われがくるとやぶせつたい。コリヤア爰の内の格式で、仲人はぜつび、上下をきせにヤア、すまないといふもんだんで、うらやアだけれど、どうもしずこんがない。女房「エ、ひなたもえいとしをして、ふとの笑ひもんになるこんだ。はやくぬげつちやア。宗匠「イヤさうはならない。女房「エ、このだぼうばあず、えいかげんに馬鹿をこけ。氣がちがつたらす。宗匠「うぬこのふと中で、うらをだぼうたアあんのこんだ。女房「だぼうだんで、いつたがどうしる。わしひなたのやうなもんと、同志にいくはやアだやアだ。宗匠「このひやうたくれめ。めでたいとこへ來て埒へしもない。うぬがやうなやつは、同志にいかない。出ていけつちやア。ト、はらたちまぎれにつきとせば、女房「うむつとして、女房「ヲ、出ていかず。ひなたには、うらもあきはねた。去狀をよこせちやア。ト、つかみつ、宗匠もやつきとなり、たゞきたふすと、あるじふうふ、あわてうろたへ、やう／＼におしわけて、おやち「コレ／＼この衆たちは、うらがあんねいの、むかざれしるところへ來て、出ていけの、去狀よこせのと、あんまりむたらくなこんだ。母「コレおなあとんもめつぽふな。マアこつちへいぢやかつせ。女房「インネコリヤおかつさま、かまつてくれさつせへますな。わし出ていけといふに、出ていきませず、コレばあず、わし出ていくには、もつていくもんがある。宗匠「ヲ、内へいつて、あんでももつていけつちやア。女房「イヤわしのもつていくもんはこゝにある。宗匠「ヤイ爰にあるとは、あにがふとのうちに、うぬがもんがあるもんか。女房「インネ此袋に入れていくもんがある。ト、布ふくろから、きがへのきものをはふり出して、ふくろをひろげる。宗匠「ばかつつらめ、その袋にいれるもんだア、ドレどこにある。女房「ソレ／＼そこに。宗匠「どこに／＼、女房「うらがとつていくもんは、こいつだ／＼。ト、布のふくろを宗匠のあたまからひつかぶせて、ひもをひくとくびすぢがしまり、宗匠「コ

リヤコリヤどうしる〜。ヤレ目が見えない。首がしまるわ。どうしる〜。女房、ひなたを、ひこずつていつて、うらがしやうがある。ト、ひもをひつぱり〜、ひきずりまはす。宗匠ふくろをかぶせられて、手あしばかりを、もがきあせるを、あるじの夫婦をはじめ、家内のものども、みな〜とりさへ、ひつぱりあふはずみに、あんどどうをひつくりかへし、たばこぼんをふみこけし、やくわんがころげて、茶がこぼれるやら、くんずころんず、ごつたかへして、大さわぎとなりしが、やう〜のことに、宗匠夫婦をひきはなし、おくのざしきへ、ひきずりつれゆきたるが、しばらくしてしづまりたるやうす、それよりはいかゞなりしや。彌次郎きた八、二かいのあがりくちより、しどりのぞき見て、をかしさはらをかへながら、もとのざしきへきたり

婚禮のあげ句となりて女ぼうの去嫌ひにはこまる宗匠

かくてふたりは下女をよびて床をとらせ、打ふしけるゆゑ、その跡はしらず。旅の疲れにあくる朝まで、ひとねいりにしておきたち、支度と〜のへ、この所を立出、大町をさしてたどりゆく道すがら、或村にとりつく手前にて、子どもまじりに、所の若者ども大ぜい、わめきたちてかけ来るを、何事やらんと、たち留り見てゐるうち、跡より来る旅人、所の人に向ひて、旅人「モシ〜なんぢやいな。所の人「やま犬めが、ふとをくらひつくだござらア。旅人「エ、病いぬかいな。ソリヤきみのわるい。彌次郎とは氣のね〜ことだ。コリヤめつたにさきへはいかれねへぞ。ト、此内又所のもの大ぜいかけ出し、ソリヤ來たぞ〜。ワアイ〜。旅人「ヤア來をつたさうな。モシおまいがたも、怪我さんすな。そこな木へなどのぼらんせ。アレ〜こつちやへ來をるさうな。ト、此旅人うろたへて、あたりの松の木へかけのぼると、しきりにさわぎたちて、人のにげはしるやうすに、彌次郎きた八も、これはならぬと、おなじくあわて、木のうへ〜あがる。所のもの「オ、いつちいヤアイ、病犬めはあんとした。所のもの「今曾太アのあんにいめが、でかくくつつかれた。ドリヤまたいつて見てこず。ト、又みな〜かけ出して、あとへもどる。旅人「もうえいかい

な。あつちやへいたさうな。ト、松の木の上からおりると、ふたりもおなじくおりたちて、そろ〜と行かゝると、又大ぜいくづれたちて、かけ來り、所のもの「ソリヤアソリヤアワアイ〜。旅人「又來たかいな。ト、うろたへて又木のうへ〜かけあがると、ふたりもおなじく又のぼる。しばらくして、旅人「なんのこつちやいな。だまかしくさるさうな。ト、木よりおりにかゝる。彌次郎も北八も、つゞいておりさうにすると、又むかうより大ぜい、所のもの「ハアイ〜そいつた〜きたふせ〜。ソリヤ、うせるぞ〜。彌次郎、又來たか。北「また木へあがるのか、ばか〜しい。かまはずといきやせう。所のもの「サア今度はほんとうに來たぞ〜。子どもはあぶんない。はやくぬげていけつちやア。ト、又さわぎたつゆゑ、せつかくおりた木のうへ、三人ともうろたへてかけあがる。此うち所のものども、かけ出してはもどり、もどりはかけ出し、石をとつて打つけなどして、さわぐにぞきた八木のうへから。北「モシ〜病犬めはどつこへいきやした。所のもの「病犬は今、ふんどしのしらみを見て



あらア。彌、ナニやまいぬが、ふんどしをしてゐるものかへ。コリヤ合點がてんがいかねへ。所のもの「そんでもアレ見さんせへ。しかもあいつめは疝氣せんきもちだんで、でつけい金玉きんぎょを、ふんどしでぐる／＼まいてあらア。ソリヤこつちへうせるわうせるわ。ト、大ぜいはやしたつて、にげ出すあとから、「ソリヤうぬら、くひつくぞ。ト、髪ひげをふりみだし、あかだらけなからだに、しぶかみやら、むしろやら、いくぢもなくひつかけ、すそをひきずりながら、所のものどもをおつかけるこつじきは、なるほど、せんきもちと見えて、大ぎんたまをぶら／＼。彌、ハ、ハ、やまいぬといつたは、アノ乞食こじきめが事か。所のもの「アリヤア氣違きがひでござらア。むたらく、ふとにくひつくもんだんで、仇名あだなを病犬やまいぬといふ乞食でござらア。北、エ、なんのこつた。つまらねへ。ト、木のうへからおりかゝる所へ、かのきちがひこつじきはしり來り、乞食「ワアン／＼。ト、くちをあいて北八にくひつく。北、エ、何をしやアがる。ト、とびおりるひやうしに、きものすそをひつかけてびり／＼。北、こいつは大變なことをした。彌、ハ、ハ、とんだめにあはせやアがつたな。ト、是も木よりおりようとして、ふまへたえだがほつくりをれて、どつさりおちる。彌「あいたあいた／＼。所のもの「ワハ、ハ、ハ。彌「いめへましい。なにを笑やアがる。エ、ばんくるはせな。旅人「えらいめにあはんしたな。北、エ、きさまが先達せんだちをして、木へのぼつたから、おいらまでこんなめにあはせた。彌「おれも膝頭ひざがしらをすりむいた。此やらうめ、ぶつころしてやらう。旅人「ハア御めんなされ。ドレおさきへいかうわいな。ト、あとをも見ずして、さう／＼ににげ出してゆく。ふたりもそれより大町のしゆくにいたり、こゝにしばらくやすらひける。

從本曾路 善光寺道 續 膝 栗 毛 八編 下卷 終

續 膝 栗 毛 九 編

善光寺 續 膝栗毛九編序

豊年の貢の雪ふらざる年なき信濃路は、自然と腹も喰ひろげけむ、吞込はやき人の情は、更科の附合安く、浅間の煙、たちまち親み深くなりてより予年頃此國に遊行して、旅の寐覺の床の上に、岐會川の流をしたひ梓筑摩をうちわたりて、桐原望月の駄馬に附たる、煮かけ蕎麥の喰飽せし頃、園はらや、ふせ屋に生ふる婆々達の、牛はうし連にひかれて、善光寺に詣つゝ、此巻を編りたれど、本来小田井の底もくみえざれば、諏訪の湖の深きにもいたらず、風越の嶺の高きにも登らずして、相初川のあいもかはらぬ戯れに、久米路のはし書する事しかり。

文政二卯の春

十返舎一九誌

凡例

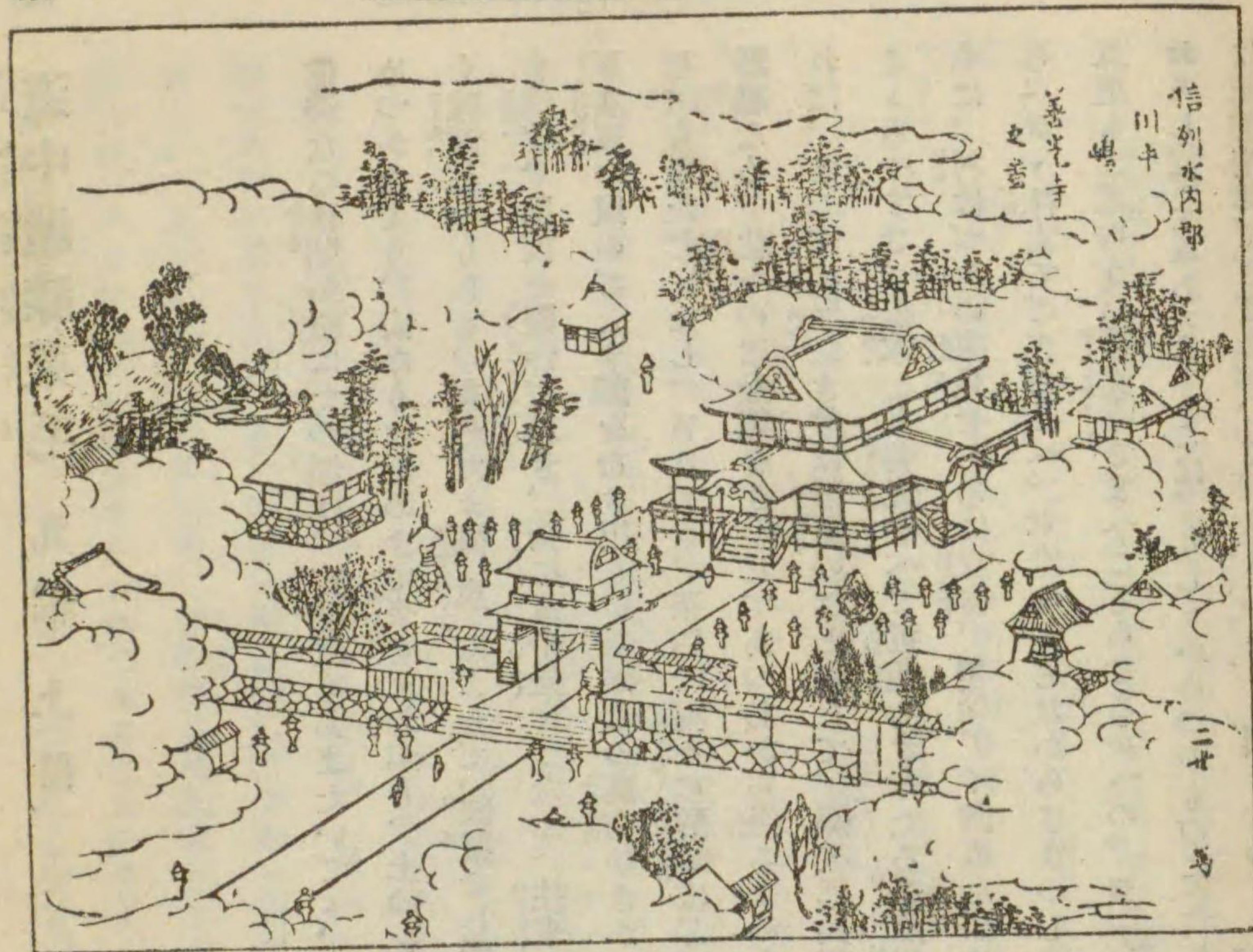
○鶴に入編にいへが如く木曾路より善光寺道は洗馬の驛より村井松本にいたり岡田かりやはらに出る本街道なれどもこゝに著すは松本より成相新田保高池田といふにかゝりてゆくこれ越後糸魚川に出る街道にて善光寺へゆくには稻荷山に出るなり近年此道旅人通行多く栗尾觀音松尾藥師宮城不動などいへる靈地ありて殊にめぐらしければ予も一とせ此街道を經ておもしろくおぼえたるまゝ巻中の驛士も此道に赴しむ

○予去年卯月の中頃越後にいたるに中仙道高崎より三國通に出鹽澤驛鈴木牝之なる人を尋ねて滞留せしとき山中に熊を捕を見せんとて近友兩三輩をつどひ僕に米味噌鍋などを負せ牧之子案内して夜の寅の刻ばかりに立出清水入といへる山中にわけのぼるに奇怪の事こそあれ予はしめて天狗といへるに出合たるに其恐しきまことに一命をも拾ひし心地したりしよにめぐらかなることゆへ此編穴澤峠の趣向として兩士にゆづる

○越後赤倉温泉高田屋富五郎といへるに滞留せしが此所近來開地のよし殊に繁昌いふばかりなく入湯の詞客おほく相客予が禪をまちがへたることありいと興あるわざなれば此編新町泊の趣向とす

○善光寺より上筋草津にゆかんとして大笹通といへるをゆく殊に難澁の山道なり仁禮宿より田代といへるまで行程七里のあいだ村里なし予中飯の儲なくして空腹堪がたく山守の小屋に一飯を乞ひたるはなしいと興あれば水内村の趣向とす

○大笹驛黒岩氏に止宿せしに酒興の上あるじのかたられしは心中といへることの男女相對死のしかもしなすして祥るに一命を全ふせし嘸珍らしくおかしければ善光寺泊の趣向とす予が去年の旅行に多分の買出しあればこの次十編には洩さず趣向を著すべし此膝栗毛も最早二三編にてめでたく東都に歸着なれば今少しの所御辛



穴沢峠旅人奇難番



抱御高寛のほどを
希ふものなり

道中續膝栗毛 九編 上册

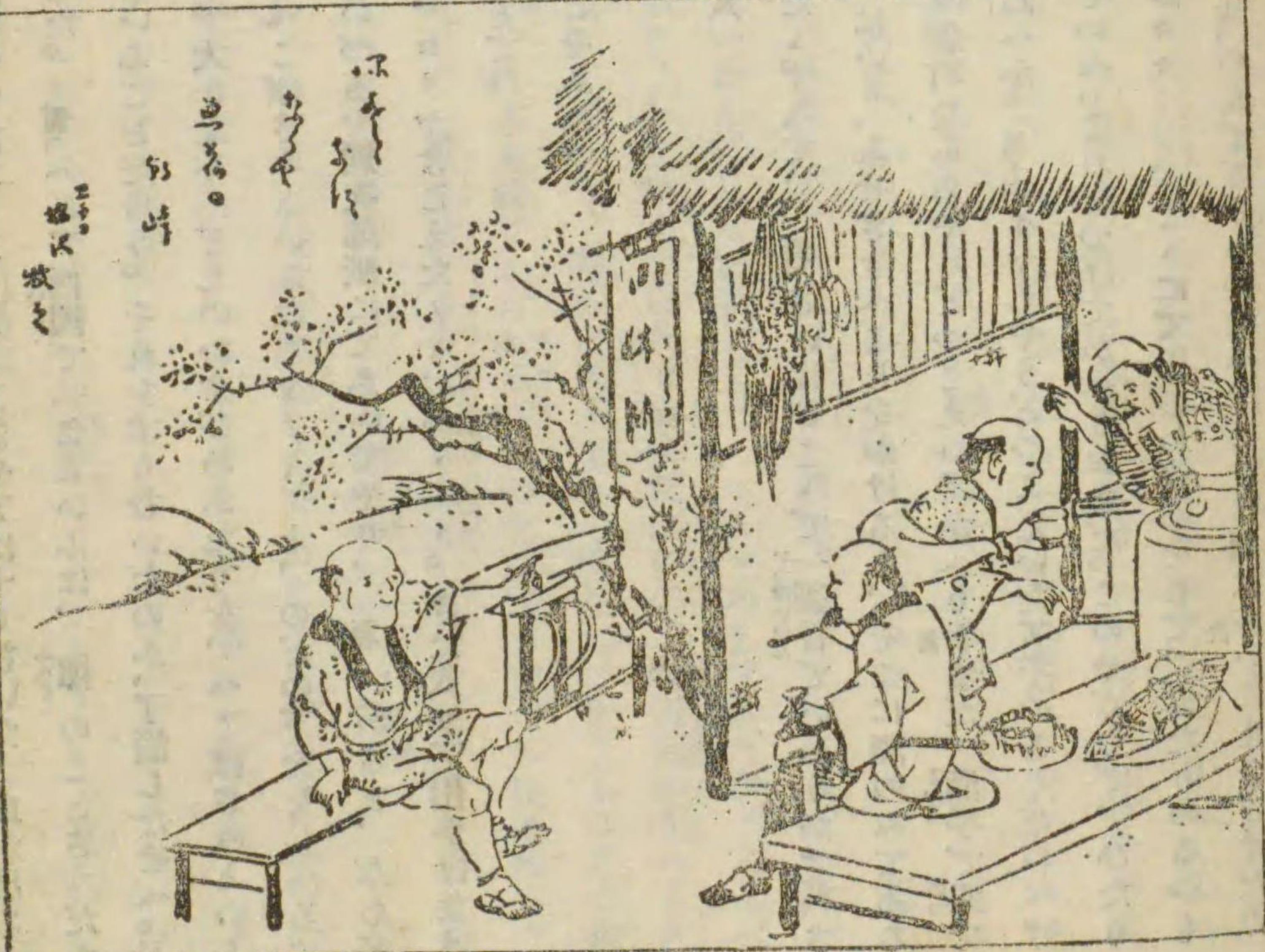
東都 十返舎 一九著

信濃なる淺間が嶽にたつ煙は、古歌にもあまたいで、よく人のしる所なりしが、いにし天明三つの年、初秋のはじめつきたより、山なりはためきて炎もえあがり、土砂をふらし石をまろがし、吾妻川に泥水あふれて、山林田圃、悉く流滅したりしも、有がたき御恵によりて、破壊せし所を修造あり。ふたたびもとのかたちにかへりしより、雨風時を迭ず、田ばた豊作打續き、街に太平樂をうたふ。往來の旅人ひきもきらず、名物の蕎麥切延る間なく、旅籠屋の噴、石灰藏の鼠のごとき顔をむき出し、むかしの藤布ひきかへて、青梅棧留肩かはるとて、按摩とりの四十八文は、いかにしてもあたじけなし。されども、茶店に狸々の酔醒ほど、茶をかはかせども頓着せず、馬士大道にひよぐるをも咎る野暮なく、化ものは猶氣をきかしてあつちから逃るよの中、大金を懐にして、山の中を往來するとも、氣遣ひなければ、まして貯なき身は猶更のことにして、彌次郎兵衛喜多八、原より荷物とは風呂敷づみ、たつたひとつのころやすさ、松本より善光寺へ、近道ときゝたる糸魚川街道に出、池田の驛に一宿し、大町の宿を打過、たどりゆくに、村はづれの茶見せあるに立寄、彌次ア御めんせへ。ト、はいり、こしをかくれば、わらを打ながらおやぢうヲ、休んでござらせへ。北八モシこれからさきのしゆくまではいくらありやす。のばや「しん町まぢやアなから五里もござらう。善光寺さまへござらせるかへの。彌アイさやうさ。ト、此内みせさきに、すこしのせおひつらをおろし、やすみあるをとこは、九しうからつものにて、しよこくをしゆぎやうしてめぐるをとこなり。からつ「おどもは肥前唐津でござるが、さてもよんによう國々をめぐりさるひて、善光寺さまへもいたちくうたが、へいたちくうとは

いつてきたといふくにことばなり。あぎやアな、おほたましい、よかとこはえんなはにやアござらんばい。彌ナニおめへ善光寺さまへいつて颯をくつた。ソリヤとんだものを。颯よりか紅葉牡丹のはうが、よつぽと美味さうなものだに。ちや屋の「西國からせんくわうじさまへとは、ア、遠い所から信心なことだのへ。北ソリヤさいはひ此街道へかかりなざつたものだから、このさきの池田といふ所でよく聞なさつて、宮城の不動、松尾の薬師、栗尾の觀音へも參詣して、松本へ出なせへ、少しばかりの廻りだから。からつ「よかくそぎやアなとこさなへも、いたて見うばい、おども「もこぎやアに「がんにじうに、道中よかしをるも佛さまのおかげ、有がたいことんばい。ちやの「善光寺の如來さまはのへ、なから壹寸八分のちくい佛さまでも、三國傳來とやらでのへ、むかし守屋の大臣といふずだいのむたらくものが、如來さまをのへ、アノ三日三夜火の中へおつくべさつせへたが、そんなもあんともなかつたといふことんばい、有がてへ佛さまのへ。北ナニ如來さまを火にくべたへ。ソリヤ大かたこのしるをやく匂ひがしたらう。彌さうさ、とてものことに三まいにおろして、一夜味噌漬にしておいてから焼てくうと、めつさうにうまいものを。おやち「アニさんまのひものぢやアござんない。御勿體ないことをぐぜりこくふとたちのだへ。からつ「そぎやアないはれおどもきいたことんばい。それから難波の池さなへ、ぶちこんだといふことんばい。おやち「それからのへ、本田善光といふふとが、そこをとほりかゝらせへた時、池の中から如來さまが、よしみつ〜とお手をつん出して招せへたを、よしみつがとん出してあげさつせへたのでござるげな。彌ハ、そのよしみつ〜といふ人は、とんだ目のきいた人だわへ。壹寸八分の佛さまが、水の中から手を出してまねくのをよく見つけた。コリヤア虫眼鏡で風を見るよりか、まだむづかしい。おいらが目で見たら、目高でもはねるかとおもふだらう。おやち「アニ御勿體ないことをためかかずと、きかつせへ。それから如來さまがいはつせることにやア、コリヤよしみつ、にしおれをおぶつてあよべ。夜るはまたおれがにしをおぶつてやらうと、いはつせへたによつて、よしみつが如來さまをおぶい申て、やく〜今の川中じまへ

おつれ申たのでござるげな。彌「コリヤアよしみつも氣のきかねへ男だ。ナニそのちつぼけな如來さま、鼻紙袋か
 袂の中へも入れて、もつてかへればいゝのに、おぶつたとはをかしい。それもいゝが、よるは如來さまが、アノよ
 しみつをおぶつてやらうも大笑ひだ。壹寸八分の佛さまにどうしておぶさられるものか、こいつあきれたはなしの、
 ハ、ハ、ハ。からつ「およつこりよ（ト、いふ詞は江戸にてヲヤ／＼といふにあたる）われ達はうすぬるか人ばい。そぎ
 ヤアなことというて、罰があたらんばい。如來さまはづうたヤアちつさうても、夜るはよんによう、ふとかものになら
 れるといふことんばい。彌「ナニよるはふとくになるとかへ。成程わつちらの如來さまも、晝はちぢみあがつてゐるが、
 よるおぢやれでも抱て寐ると、そのふとくなること大木の生際。そのうち、此男の如來さまのふとさ、御首などはぼつ
 てう笠をかぶつたごとく、其むかし此御母がゑんくわうぼふ大師の御作、またと開帳は叶ひませぬ。ちかうよつて、
 御縁をむすばれませう。ト、きた八のまへをまくりにかゝる。北「ア、コレ／＼何をするのだ。よしなせへ。ゆうべ
 の宿へ御戸帳のふんどしをわすれて来て、けふは如來さまをふつてゐるから、おぶつて貰ふけれど。北「ア二年
 つてござらせるなら、わしおぶいませう。北「おめへもう三四十ねもわかいと、おぶつて貰ふけれど。北「ア二年
 寄のやくだア。その如來さまアドレどこに。北「こゝに／＼。北「こゝにたアどこにのへ。北「コレサ臍の下に。
 北「アニ此ふとはじようけさつせる。そんな如來さまは、わしきらひたのへ、見たくてもなへ。ヤク／＼善光寺さま
 の有がたいはなししるのを、だまつてきてゐたにのへ、このふとたちは、はなしををへらなく、らりこくたいにし
 てしまつたのへ。からつ「ホンニ如來さまの事ばアおろよかいふ、あいかりな外道たちばい。北「きさまのいふこたア
 何をいふかさつぱりわからねへが、外道とはおいらが事か。コレ何て外道だといつたへ。からつ「ふうけものは外道ば
 い。北「やつぱりわからねへ。そつちが外道人だわへ。北「こんなんふとたちにヤア、かまはせるな。あにをくぜつて
 も、むたらくものにヤアしるやうがないのへ。ふとはあんといつても、ぜんくわうじさまア有がたへ。このまへわし、

ぢつさまと善光寺さまへお参り申て、ア、ありがてへ、
 せめて賽銭たんとあげ申さうとおもひをつて、錢二百べ
 し紙におつくるんで、おん投うとしたが、よくおもつて
 見りヤア、如來さまよりか、ぜにのはうがよつほど有が
 たくなつたから、あげずに持てかへつたがのへ、今てお
 もヤア残りをしいことをした。さいせん箱のはたに、い
 くらも錢がはふりちらけてあつたものを、とつて來ても
 だれもしらなんだに、こんな残をしいこたアござんしな
 いのへ。からつ「おどもはそぎヤアなことぬかりはなかば
 い。そこらにぶちあやしてあつた錢ばア、みながんどう
 して、もてきたことばい。北「イヤ此手合は、いまおい
 らが佛をわるくいつたとつて、腹をたちヤアがつて、そ
 のぎまはなんだへ。こつちよりそつちが、大それたいけ
 盗人め。よこつ頬をはりとはしてやらうか。ト、立あが
 れば、からつものもおなじくたちあがりて。からつ「エ、
 ふうげこゝな。ト、がんしよくかはれば、北「コノ毛唐
 人めが。ト、突とばせば、ひよろ／＼してしきあにつま
 づき、うつむけにこけて、おきあがり、からつ「ア、いた



いた、いたばい、おどもがへこばさみに、出ものが出をつてあるとこばア、こぎやアにすりむいた。血が出る、ア、いた、北ナニへこばさみへ出ものとは何のことだ。彌ハ、ア西國でへこといふは、禪のことさうだから、そのふんどしをはさむ所へ、出ものは出来物があるといふことだらう。それをすりむいたのか、了簡しなせへ。ドレドレどんなになつたか見てやらう。うしろをむきなせへ。大かたふんどしのむすびめあたりを、へこばさみといふだらうの。からつイヤそぎやアなところやなかばい。コレへこばさみといふはこゝろ、ト、のどの下ををしへる。なるほどの下にすこしばかり、しゆもつがあつてちのいづるを彌次郎紙にてふいてやり、彌いかさま、ふんどしをしめるとき、願てはさむ所だから、それでへこばさみ、コリヤきこえた、ハ、ハ、ハ、きた八サア出かけようト、大わらひをしつゝ、この茶だいをはらひ、たちいづるとて、

みあかしも爪に火ともす人ごゝろ佛たのむも慾てこそあれ

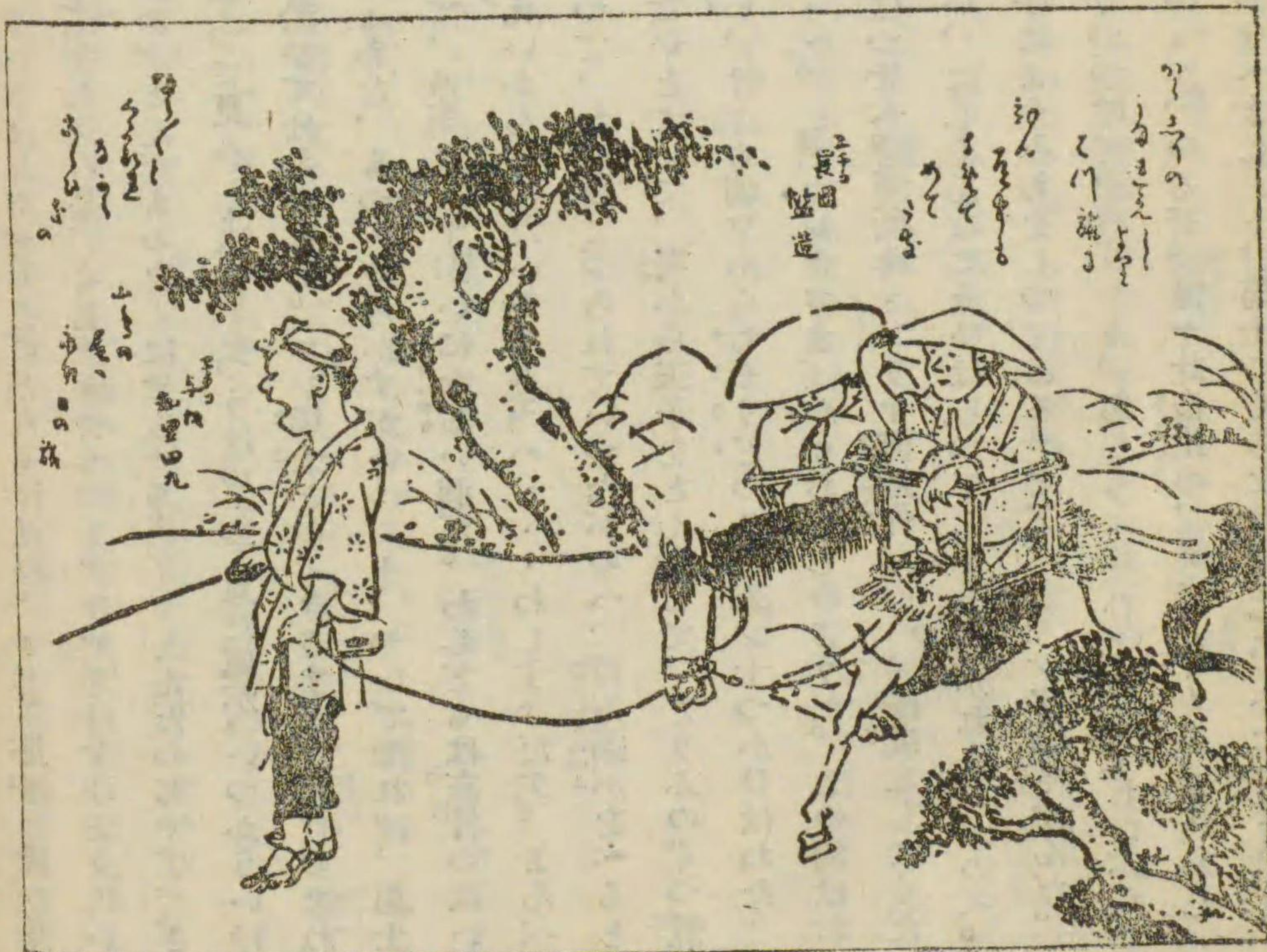
それよりこゝを打過ゆくに、俄に夕立のしければ、

禪を忘れしゆゑのしるしにや俄夕立ふつて喜多八

かくて雨は頻にふりて、をやみなければ、或酒屋のかどにたゞずみて、彌さいはひこゝで一盃呑ていかうか。北さうささうさ、とてもこの雨ぢやアいかれめへト、さかやへはいり、みせさきへこしをかける、そこに酒のみてある馬かた、馬主「コリヤア旦那たちやア、どつちらへいかつせる。新町ならちやうどつこえい。かへりおまだ、酒手で乗てござらつせへ。彌それもよからう。きた八、手めへのらねへか。馬主「イヤちやうどつこえいたアそのこんだのへ。今爰まで、ばさまたちひたりを、此槽にのせて来た。どうてのへ、これをつけてかへりおまだ。このやぐらで、ひたりのつてござらつせへ。北「コリヤ二方荒神が出来るか、奇妙々々ト、こゝにて馬のねだんをして、ふたりのるつものにきはめ、彌そんなら雨のやむうち一ばいやらう。馬主「のんでござらつせへ、こゝの酒はがいにいさけだの

へ。彌「さかなはなにがある。赤鯛にまぐるのすき身か。こいつはあやまりこのとろゝ汁だの。さかや「昆布と鯿の煮たのもござります。北「イヤそいつもくえん法界だ。さかや「そんなら是でも上げませう、ト、ひやぎけをゆとうにいらぬ、いなごのたのをもつてくる。彌「ヤアこれは稲虫か。とんだものをくはせる。馬主「イヤとんだのぢやアござらない。しんだのでござるのへ。彌「何にしろ、いつばいやつて見ろト、ひとつうけのんで見た處が、いつかういけぬおにころしなり、彌「こいつ地藏經だ。あく酒に出現し給ひてはあやまる。コレ馬主どの、きさまどうだ。のまねへか。馬主「わしもう、むたらくのみはらつた。北「サアいゝわな、もつとやらかすがい、ト、ついでやれば、馬主「いたつてのくらひどれにて、あとひきなれば、ぐつとのみて、馬主「コリヤがいにいなるい酒だ。わしどもは灰汁のはいつた酒でなけりやア、むづきかない。さかや「コノおぢいはいかんにしないか。馬主「ハ、ハ、ハ、わしすきだア。よんべもなア、ぞつかけの駄馬七がとこで、ぢつさまの年季だつて、わしひこづられていつたかのへ、百万遍がをへるとなア、釋迦堂の西念ばあすが、コリヤ精進ものぢやアのめないとこいて、塙から玉子をとん出して、とうふのぐつ煮でやらかしたが、わしがいにゑひはらつて、それからずだい、けふも朝ツからちやうどつこ百五十分かひはねた。しるこんがない。つばやちしやどの咲てあるだのへ。ハ、ハ、ハ、彌「コレきさまばかりおもしろさうだ。この酒はおいらにはのめないから、みなありきり、きさまやつてしまはつせへ。馬主「エ、ソリヤ御造作だのへ。辭義なしにくだつせへます。ア、えいきもちになつたアのへ。さかや「おぢい、にしそんなにゑひはらつておまアひかれまいがのへ。馬主「アニおれ、ひこづらないでも、おらがおまア、ふとり手によくみちをしつてゐるチヤア。彌「サア雨もやんだ、馬主どの、もういかうぢやアねへか。馬主「ドリヤやぐらアくつつけてやらうト、あしもとは、ひよろゝしながら、やぐらを左右へつけて、いくぢもなくしぱりつける。彌「いゝか、のるせ。イヤ此畜生め、ドウゝゝ。馬主「わし、しやつつかまへてゐる。あんじごとはない、ひたりとももらつせへましト、馬主「にくちをとらせて、ふたりともどう

やらかうやら、のつてしまふと、馬士「わしもうふとつくんのんでいきたい。そこへついでくだつせへ。まかや、インネもうおけつちやア、がいにすぎるがのへ。馬士「わしどこにすぎた。いくら呑はねても多ひはらつたことのない男だ。コノひやうたくれんのだぼうぢいめが。まかや、エ、やぶせつたいやつだ。えいかにしていけつちやア。北「コレいかねへか。どうするのだ。ト、せつかれて、ふしようぐに、馬をひき出せしが、まごはあしもとひよろつき、いねふりしながらひくゆゑ、いつかうにらちあかず。きた八じれこみて、北「コレもつと馬をおつばしらかさねへか。きさまめねふりをしながらひくから、埒くちがねへ。馬士「わしがいにねぶたくなつたのへ。おまいおりて此はづなアひいてくだつせへ。わしそこらで、ふとねいりしていきたい。北「べらぼうめ、なんぼ日が永くても、新町まで四里からの道だ。はやくやらねへか。馬士「エ、コレ氣の短いふとだのへ。おまへその氣で、かつかさまの腹の中に、十つきはよく辛抱してゐさつせへたのへ。彌「たはこといはずと、はやくやれ〜。



馬士「そんだらちよくと待てくだつせへ。このはづなア、おまへたのんます。ト、馬のたづなを、北八へわたしてかけ出し、あとへ引かへす。北「コリヤ〜どうするのだ。馬士「すつべりわすれたものがある。いつときまつてくれさつせへ。ト、かげ出してあとへもどり、そこらの家のうちへかけこむ。この馬かた酒にゑふと、ねるがくせにて、どこでもかまはず、きやくをもすて、ねてしまふことたび〜なれば、今もしきりにねぶたくなりたるゆゑ、ねにゆきたるなれば、まてども〜いつかうきたらず。そのうちむまは、のさり〜と、そこらのくさをくひあるきて、へいきなり。彌「コリヤ馬かためはどうしをつたのだやら、コウきた八、手綱をぐつとひきあげるやうにして、ちやら〜いはせるがい。さうすると馬がしやん〜とあゆむから。北「おもいれのつばしらかして、馬士「めにおつかせせよ。ト、馬のしりをやたらにた〜きたつれば、やう〜馬はあゆみ出して、十丁あまりも行すぎたるが、またのろつき出して、くさをくふ。むかうより駄ちん馬二三びきおつてくる。この馬士どもこれを見て、ハ、ア辨太おぢいがおまだな。また多ひたふれて、どこにかねふさつてけつかるのだな。彌「コレ〜貴様たちに頼みてへ。この馬士がそこらにゐたら、はやくこいとさういつてくだせへ。の馬士「ハ、ハ、ハ、あつつめはのへ、ゑひだれるとどこでも構ひごとはない、ねふさるがくせで、今ごろは、ずうたら〜駈をかいでけつかるだらう。いくらおこしても、アニズたいおきるこんぢやアごさんしない。彌「エ、そいつはつまらねへ。馬士「わるいおまにのらつせへた。そんどもいつかいちだアくるだらうから、ゆつくりとまつてござらせへまし。ハ、ハ、ハ、ト、打わらひつゝ、この馬士どもは行過る。北「コリヤはじまらねへ。まだ駄賃はやらす、爰まで乗て來たを徳にして、もうおりていかうぢやアねへか。彌「ソレ〜此また畜生めはい〜ことにして、草ばつかりくらつてゐやアがる。もうおりべい。きた八しつかりしてゐろへ。おれがさきへおりるぞ。ト、くらにつかまり、おりさうにすると、きた八のはうへかしぎて、きた八おぢさうになるゆゑきもをつぶし、北「ア、コレ〜それではおいらがおつこちる。まちなせ〜。彌「ホンニおれがおり

ようとすると、片荷^{かたに}ずつてそつちらのやぐらが、ひつくりかへるだらう。コリヤつまらねへ。兩方いちどきにおりるさんだんがありさうなものだ。北「まちなせへ。おめへさうして居なせへ、おれがさきへおりよう。エ、此ちくしやうめ、ぢつとしてゐねへか。彌「コリヤドウくく、ア、待てくれく。手めへそんなに身うごかしをすると、おれがはうがおつこちさうだ。北「こいつはおりることも出来ねへな。彌「まことに是は、こまり煎豆^{いりまめ}さんしよ味噌。北「エ、洒落^{しゃれ}所ぢやアねへ。つまらねへめにあふものだ。そのくせ。此ちくしやうめが、ちつともぢつとしては居やアがらねへ。エ、コリヤく土手^{どて}へあがりやアがる。シツシく。彌「あいたくく、松の木へよこつつらアこすりつけやアがつた。ソリヤく此せまい並木^{なみき}の間へはいらうとするわ。エ、是はあやまる、どうするのだ。あいたく。北「コリヤやぐらがこはれる。出ねへかく。ト、いくらあせつても、馬はいつかうかまはず、並木^{なみき}のあひだをあちらへぬけたり、こちらへのさりくくと、くさをくつてゐる。北「コリヤいゝことがある。おめへその枝にとつつまつてとびなせへ。おいらはこのえだにつかまつてゐるから。彌「こいつはいゝ。そんなら手めへそこへしつかり、ソリヤいゝか、飛ぞく。ト、手ごろの松のえだに兩手をかけてとびおりようとする、松のえだがぼつきりをれて、彌次郎どつさりおちるはずみに、きた八ののりたるやぐら、くるりと馬のはらはうへまはり、北八つまかさまにおち、木のねにておもふさま、いやといふほどこしをうちて、北「アイタ、おれも、いてへく。北「彌次さんコリヤ酷^{ひど}いめにあはせた。彌「イヤもうおれもむかふすねをこんなにすりこはして、ア、ひりつくく。コウ手をとつてひつたてくれ、おきられねへわ。あいたく。ト、かほをしかめておきあがると、おなじく北八もひざをかへて、おきあがりながらうらめしさうに馬のはうをにらめつけて、北「いめへましいめにあつた。此馬をどうぞしてやりてへ。彌「やりてへとつて、どうしやうがあるものだ。とんだ馬に乗^{のつ}たはこつちの災難^{さいなん}だ。北「このどうちくしやうめ、よくおいらをおつことしやアがつた。うぬおほえてけつかれ。彌「ナニ馬がおほえてゐるものだ。

うつちやつておいて、サアくいかう。あいたく。ト、ふたりはびつこをひきく、はては大わらひして、このところをうちすぐると、

二方荒神^{くわうじん}にのりしがいかなれば南無三ぼうとおちてくやしき

それより次第に爪先あがりにて、山道にさしかゝれば、人家絶^たてなく、殊更^{ことごと}此あひだ大町の宿^{しゆく}より、五里の場所なれども、田舎道^{いなかみち}は大づもりにして六里あまりの道、先刻の夕雨^{ゆふぐ}に長休^{ながやす}みし、又馬の隙^{ひま}入、彼是^{かれこれ}に餘程^{よほど}のあひだ、日はたけて、ゆくさはまだ遙^{はるか}なれば、足の痛^{いた}をこらへて、いそぎゆくに、山ふかくなりてもの淋^{さみ}しく、新町までは今一里にして、穴澤^{あなざは}といふあたりにて日暮^{ひくれ}ければ、啞氣^{うそき}味悪^{あじわる}く、ことに闇夜^{やみよ}なれば、いとど心ぼそくなりて。彌次「コリヤアいよいよつまらねへ。きた入どうだ、心もちほ。北「イヤ心もちほむぐらもちがあきれらア。しかしなんだか身うちがぞくくするやうだ。彌氣^{やまき}をはつきりさつし。こんな所でうかくすると、きやつめにつけこまれようわ。チト、大きな聲でなんぞうならねへか。北「イヤおいらア何もこはくはねへが。なぜかからだか、がたくふるへて何も出ねへ。彌「エ、氣のよわい男だ。ア、いたく。何だかあしへくらひついた。北「ソレく犬ころのやうなものが、ヲヤくこゝにも足首^{あしむ}へまとひついて邪魔^{じゃま}くさい。コリヤなんだらう。ト、よくく見れば兎の子なり。兎といふもの、よるは、わうらいの人のあしのうごくを、友とおもふにや、とかくあしもとへまとひつきて、じやれるものなれば、ふたりのあしもとへもじやれつくを見て、彌「ホンニ何だとおもつたら、兎だわ。コリヤめづらしい。北「大きに肝^{きま}をつぶさせやアがつた。彌「ぶちこころしてやらう。ト、小石を拾ひて打つれば、一疋の兎にあたりころげる。彌「しめたく、こいつもつていつて、宿^{しゆく}で煮^にてもらはう。ト、くさを引むしり、うさぎをしばらくして、手にさげて行に、くらがりにておもはず人にゆきあたり、びつくりしてすかしみれば、てつばうかたげたる男「エ、たれた、太郎右かへの。彌「イヤ旅のものでござりやす。まつびら御めんせへ。男「こんたしゆは、この夜道^{よみち}をあぶんない。どこへ

ござらせる。彌しん町まで参りやす。まだよつぼどあり
 やすかね。男「この峠をこすと新町だかのへ、まだなか
 ら半道のうへもあらうが、此山は狼が出る。わしと同
 志にござらつせへ。此ナニサおほかみが出るとかへ。
 おめへのかついであさるはてつばうだね。こいつは大丈
 夫だ。男「わし獵人だが、この火繩のほひで、狼も
 あにも出ましないから、氣を嚴丈におもつてござらせ
 へ。彌ナニわつちらア、おぼえがなくてよる夜中、こ
 んな山道もあるくものかへ。狼でも熊でも出たら最期の
 すけ、ソリヤもう太平樂ぢやアねへが、手づらまへにし
 て見せやせう、わつちは夜道がすきて、どんな山でも野
 はらでもあるきやすが、これまで追剝どもに出やつたこ
 とは何度あつたかしれやせん。たとへ何十何百人來ても、
 わつちがこの杖壹本で、みんなたゞきちらしてしまふと
 いふもんだから、そこへいつちやアへいきの平左衛門と
 いふは、わつちのことさ。ト、出はうだいに、わざとつ
 よいことをいふは、この出あうた男、かりう人とはいふ
 ものゝ、もしやわるものにてはなきやと、うたがひて、



わざとよわみを見せぬつもりのだいへいなり、狩人ハ、こなさま、がいに頭無ことをくせらせる。わしどもゝの
 へ、年中夜山はつかかせぎをるから、あにもおそがいといふことアしらないが、そのうちたまげをるは、天狗さまひ
 よつくりしると、この山へも出やらしやるがのへ。これにあつちやア、ずだい身うちが、くすばつたくなるやうでい
 けましない。彌ナニ天狗、イヤくそがあきれる。わつちやア生れてから、まだ天狗といふものを見たことがねへ。
 どうぞ出やひてへものだ。鼻柱をひんもぎつて、小鳥の餌をする摺子木にでもしてやらうに。ト、むしやうやたらに、
 つよいことをいひながら、だんぐとたうげにさしかりて、此ナントいづぶくやらねへか。彌次さんひとつうち
 なせへ。彌イヤあそこに火繩がある。モシちと火をひとつかきなせへ。狩人「ソレつばうのさきに火なはが。彌「ヲ
 ヤヤ今まで火なはがぶらんとして見えたが。狩人「ハテわしかたげたてつばうのさきへ、ひつかけておいたはずだ
 が。彌イヤ見えねへ。狩人「ア今まであつたが、おとして來たか。コリヤおやかしたことをした。にしたちもそこ
 らア見てくれさい。ト、立もどりて、こゝかしこうろくとたづねまはるに、いつかう見えず。ふとあふむきて見れば、
 はるかにたかき木のえだに、火なはの火ほどのひかり、ぶらついて見ゆるゆゑきもをけし、三人ながらあきれかへり
 て見てゐる。このやま天狗のすむ山にて、をり／＼かやうのことをして、人をおどろかす。かりう人のつばうのさ
 きに、ひつかけておきたる火なは、てんぐのわざにていつのまにやら、はるかにたかき木のえだへ、ひつかけたるな
 り。此あゝの火はなんだらうねへ。火なはにしてはどうもあそこへひつかゝらうはずがねへ。彌こいつはおとした
 のぢやアねへ、あがつたのだ。狩人「まつてござらせへ、アリヤア火なはでござらアのへ。此それでも下からは五六
 間もあらうといふ木の枝に、どうして火なはが、ハ、アきつねか狸めが、おいらをひやかしやアがるのだな。いめへ
 ましいちくしやうめだ。石でもぶつつけてやらう。ト、そこのいしをひろひにかゝると、かりう人あわておしと
 め、ちひさなこゑをして、ふるひながら、狩人「コレ／＼しづかにさつせへ。きつねやたぬきのしることぢやアござん

ない。あのソレ今いつた鼻のたかい ト、きくより彌次郎、くびすぢからぞつとして、彌ハア天狗さまか。北サア大變だ。ソレ彌次さん見なせへ、あんまりおめへの太平が過るとおもつた。それで天狗さまがおはらをおたちなすつて、コリヤ逃たくてもにがしはなさるめへし、どんなめにあはふもしれねへ ト、きた八もうそきみわるく、まじめになつてこはがる。彌次郎も目のまへにこのふしぎを見たることゆゑ、がた／＼ふるひ出して、ひとところへかたまり、彌コリヤどうしたらよからうねへ。狩人「コレ聲が高い。シツシ／＼ ト、このかりう人もおそれて、つちにべつたりあたまをつけ、狩人「ハイ／＼どうぞゆるさつせへて下さいまし。わしせつしやうはもうこれからしますまい。お慈悲におたすけなさつて下せへまし。コレ／＼にしたちものへ、さんげをしてあやませへ。北ハイわたしは何もぞんじやせぬ。さつきあなたのことを茶にして、太平樂を申したはこの人、わたくしではござりやせぬ。どうぞわたくしをば御めんなされて下さりませ。彌コリア北八、手めへばかりいゝ子になりたがる、ハイお天狗さまへ申上ます。あんなにわたくしの事ばかりわるく申すが、こいつめもさつきこの兎を一疋ぶちころしました。北アアコレ啞をつく。兎もおめへが殺したぢやアねへか。彌ハテさうおればかりをかたおちにするものぢやアねへ。手めへも義理をしらねへものだ。狩人「あんでもこれまで、おぞいことをもしつらア。かくさずにおちあけて、さんげをしてあやませへ。彌ハイさやうなら、わたくしにもとで、となりうらの粘屋のかかしゆを、ちよつとつまんでたべたことがござりました。もうこれからは、きつといたしますめへ。北是からいたさうとつて、だれがもういたさせるものだ。そればかりぢやアねへ。夜鷹蕎麥をくひにげして、どぶの中へおつちたこともいひなせへ。彌エエ人のことをいふ手めへが、木曾の彌生のちや屋で、わらび餅をふた盆くつて、ひと盆ぶりしか、錢をやらねへぢやアねへか。北それよりか、おめへ洗馬の建場で、だんごをぬすんでくつたとき、しかも消炭の火がだんごにくつていてゐて、くちをやけどしたと、おぼえがあるだらう。彌エ、うぬが、玉味噌のほしてあつたのを、餅のかびた

のだとおもつて、ぬすんでやいてくやアかつて、顔ぢうを灰だらけにしたことはいはずに。狩人「アレ／＼あれを見さつせへ、火繩の火が今のまに、あんなでかい火になつたのへ ト、ふりあふぎで見れば、今までたばこのすひがらほどの火、たちまち大たばのたいまつほどの火となり、かぜもなきに木のえだぎは／＼となるおとして、ものすごくなれば、三人ともひとぢぢみとなりて、がた／＼ふるひ、北ハアなんまみだぶつ／＼。彌なまいだ／＼。お慈悲でござります、どうぞ命はおたすけなさつて下さりませ ト、しんそこからなみだをこぼして、ねんぶつをとなへ、まことにいきたこゝちはなく、ひれふしてゐるうち、大ぼくのをれるごときすさまじきおとせしゆゑ、三人いぢどにきやつというてふしたるが、何か上よりものゝおちたるおとせしに、すかし見れば、狩人の火なは也。狩人「エ、ありがたい。コレ火なはをおかへしなさつた。もう／＼えい／＼。彌ヤレ／＼／＼まづはありがてへ。イヤもうこんな肝をつぶしたことはねへ。北ハアほつといきをついた、ホンニおそろしかつた。コレ／＼わつちが汗を見なせへ。彌おいらも大あせをかいた。もう／＼天狗さまにはこりはてた。ア、がつかりしてあるくちからもねへやうになつた。狩人「マアいのちびろひだ。わしこの商賣するが、こんなめには初めてあつたのへ。彌まづめでたい。サアはやくいかう。狩人「もう峠をこしたら、あにもあんじことはない ト、はう／＼のていにて、やがてたうげによぢのぼり、打こしてほつといきをつきにける、この所にては、をり／＼かやうのことありとかや、やう／＼こゝろおちつきたるに、

かゝるめにあうて眼もくらまぎれこゝろは有頂天狗おそろし

やがて麓におりたち、新町宿をさしてぞ急ぎけり。

道中續膝栗毛 九編 下冊

梟松桂の枝になき、野干亂菊のもとにあそぶもの寂敷も、詩歌の種とは、御苦勞なしのそげ者の戯言、えしれぬ山中に日をくらししては、風雅でもなく、洒落でもなく、命ありてのものだねと、彌次郎兵衛喜多八、辛うじてやう／＼夜の五つ時過、新町の驛につき、はじめてほつと息をつき、少しもはやく宿をとりて休足せばやと、或はたご屋に立よ、彌次、モシわつちらア善光寺へめへるものでござりやすが。どうぞ今夜アおたのみ申てへの。やど屋の「アイ商人衆ががいにとまらせへて、せばからうが、おひたりばつかなら、とまつてござらせへまし。ソレ脚あらはせる水くんでこいちやア ト、此内男たらひに水をもち來ると、ふたりはあしをあらひあがるに、やがておくのこぐらき、ほこりだらけのざしきへあんないする。北「ふけいきな内だぜ。彌「それでも見やれ、床の間にかけものがかけてあらア。しかもアレ／＼繪が逆さまに表具してあるから、大わらひぢやアねへか。北「ホンニ雁のとぶところが、こいつはなるほど、うへ／＼とぶのか下へ飛のかわからねへ ト、此内やどのていしゆいで、ていしゆ「コリヤよくおとまりてござります、あにもはやあげるものはござんないが、ゆつくりとござらせへてくださりまし。彌「コレへおめへ御亭主か。大きにおせわになりやす。時にもし、お坐敷もいゝが、この掛地は見ごとだね、コリヤアだれが書てござりやす。ていしゆ「ハイ此まへ行脚のふとがかきました。彌「それはいゝが、なせこの晝はさかさまになつてゐやす。ていしゆ「イヤあれがほんたうでござんせう。上から柳の枝がぶらさがつてあるのへ。彌「ナニこれは柳のえだぢやアねへ。蘆のはえてゐるのだから、上から蘆がはえちやア、ナントつまらねへぢやアねへかへ。そして見なせへ。逆さまの證據にやア、朱印がさかさまになつてゐやす。ていしゆ「ハアさうかのへ。わし手細工に表具しました、そんなときどうも上

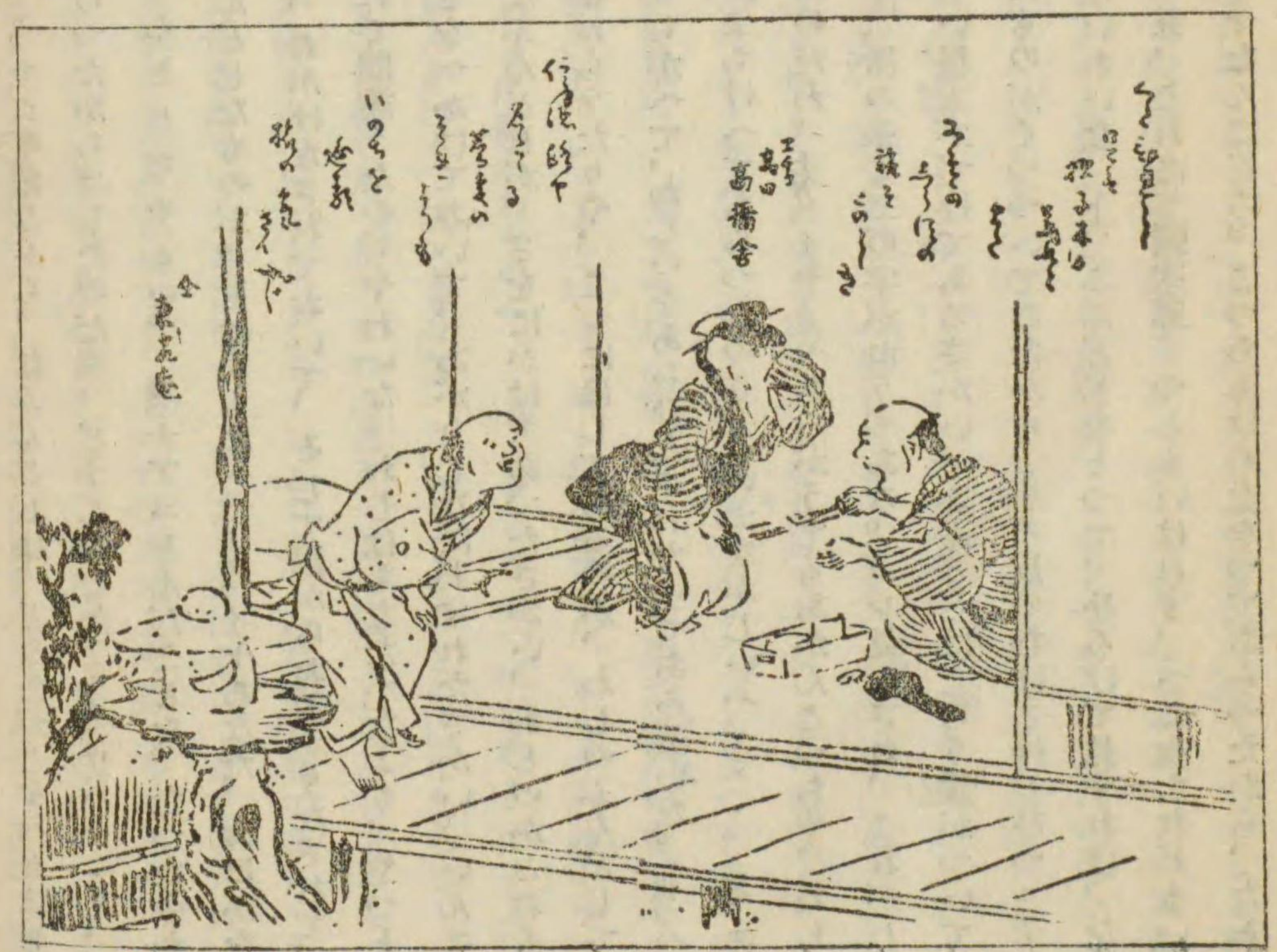
下がむづしれないで、近所のふとが四五人よつて、コリヤアすめない晝だ、これが上であらうか、イヤかうしるがほんたうか、どうもむづ上と下がすめないで、どうしるがよからうと評議をして、ハ、ア柳のえだがぶらさがつてゐるから、これだ／＼と、ふとが皆いはつせるによつて、わしそんとほりにしましたのへ。ハ、コリヤア埒くちもなアイコンだ。今に御膳を出しますに ト、打わらひてかつてへゆく。北「四五人よつて、これがほんたうであらうと、きはめたところが、やつぱりさかさま、これでおもひやられる。こんやアとでもろくなものはくはせめへ。へんちきなもののばかり出すだらう ト、此内十四五のやらうが、ぜんをもち出、ふたりへすゑると、ひらのふたを取て見て、北「ソリヤこそな。また焼酎にはあやまるわへ。彌「そしてこの汁の實はなんだらう。ぼき／＼とかたたくてくはれねへ。やらう「ソリヤア蔵のほしたのだにのへ。彌「わらびも、こいつは根のかたい所ばかりだ。やらう「やはらこい所はうちでくひまさア。北「コリヤアありがてへ。くはれねへところばかりを客にくはせるのだな。彌「それでも奇特に米のめしをくはせるが、めつけものだ。やらう「米のめしをくふのはろくなこんぢやアござんしない。こゝらぢやア病人とおきやくさまでなけりやアこめのめしやアくひましない ト、しようじきに、やつてのけるもをかしく、此内ふたりはめしもくひしまふと、かつてよりばよいで來りて、ば「おきやくさま、おめしをしまはせたら、湯へはいらせへまし。北「ツイすぐにいきやせう。風呂場はどこだ。やらう「その障子をあげてござらせへ。ゆはそこだアのへ。北「ヲツト承知／＼。彌次さんさきへはいりやす ト、うしろのしやうじをあげて、えんがはへいづると、ぢきにそこがゆどのなり。きた八戸をあけて、北「よし／＼、しれた／＼。ていしゆ「おきやくさま、ゆがぬるくはござんしないか。北「コリヤめつさうにぬるい。かぜをひきさうだ。ちつと焚てくんせへ。ていしゆ「そんたらいつときまたつせへましト、ゆのしたへたきたて、ゆどの、わきにある、すゑふるをけのふたをとりて、北八のあたまへかぶせる。北「コリヤコリヤ、どうする／＼ ト、いひつゝ見ればどこにもよくあるやつにて、めしびつめしのためぬやうに、わらにて

あみたるものに、めしびつをいれておくものあり。そのふたのごとく、このすゑふろのふたもわらにて、ちやうど桶のふたになるやうに、あみたるものにて、これをふたにして火をたけば、はやくゆのわくりかたなるゆゑ、このあたりにては、みなかくのごとくのふたをして、すゑふろをわかすと見えたり。それゆゑ、ふたをせんと、北八のあたまりのうへへかぶせたるなり、北八はびつくりして、北「コレくちとまつた」。下から火をたかれるうへに、こんなもので、あたまへふたをせられてたまるものか。いきがつまる。コレサくおいらをゆでころすつもりか。どうするのだへ。北「いしゆいきのつまるこんぢやアござんしない。うへへ首をつん出してござらせへまし。ト、あさいかまはず、あたまへかぶせると、ちやうど、ふたのまん中ほどに、くびの出るほどのあなあけてあり。そのあなより、によつとくびを出して、北八をかきさこらへられず、ゆどのうちより、北「ヨ、イ彌次さん」。ちよつと来てこれを見なせへ。ト、よびたつるゆゑ、彌次郎來りこのていを見て、彌「ヤヤなんだ。ハ、ハ、ハ。生た獄門だ。それでしたが五右衛門風呂だといひぶんはねへ。北「エ、縁機えんぎのわりいことをいふ。モシ御亭主さん、もうこれはとつてくんなせへ。ていしゆいよいつときさうしてござらせへ。ぢきに湯がわくのへ。北「イヤもうよつほどわきやした。ト、かのふたをとつてもらひ、入しまふと、あとへ彌次郎入かはり、入しまひて、ふんどしをゆどのにてあらひ、しぼりながら出きたりて、彌「なんだかわるくさいにほひのする湯であつた。そのかはり、あの湯でふんどしをあらつてきた。此あひだから金玉のあぶらでねばつて、きみがわるかつたから、ぐつくと、おもしれ骨を折てあらつたから、こゝろもちがいゝわへ。ト、いひつゝえんさきにぶらさがりてあるさをへ、ふんどしをほして、ざしきへはいる。つぎのまにとまりしたび人、うろくして、旅人「ハイおゆるしなされ。ト、このたび人は上がったものと見えて、ことばやさしくあいさつして、ふたりのまへをこゝしをかめてとほり、えんさきより、ゆどのへゆきしが、立もどりて、なにかものをたづぬるていにて、上方「ハテめいようなこつちやわいの。ト、そこらを見まはし、えんさきに、彌

次郎のほしておきたる、ふんどしをひねくりまはして、上方「モシ卒爾そつじながら、此ふんどしは、どなたがこゝへおほしなされたのでござりますぞいな。彌「アイわつちが今あらつたからほしたのだが、どうしやした。上方「ワハ、ハ、ハ、コリヤおきのどくなこつちやわいな。これはわしのふんどしぢやもの。彌「ナアニとんだことを。たつた今わつちが湯へいつたとき洗あつたのだに、どうしておめへのふんどしなものか。とはうもねへ。上方「イヤあなた、おほかたゆへはいりなざるとき、はづしてゆどのうかけぎをへ、おかけなされておいて、そして湯からおあがりなされて、お洗ひなされたておろぞいな。彌「アイさうさ。上方「それで間違うたのぢやわいな。わしはあなたがたより、やつとさきへゆにいりましたがな。ふんどしをはづして、かけぎをへかけておいて、あがりしなにわすれたさかい。いんまおもひ出して、ゆどのへとりにゐて見たら、おなじやうなふんどしが、さをにかけてあつたさかい、わしのかとおもつて見たりや、そぢやないわいな。コリヤどしたもんぢやとおもうたりや、こゝにほしてあるのが、わしのふんどしとしてござりますわいな。おほかたあなたが、かけぎをからとりちがへて、わしのをあらひなされたのであろぞいな。北「ハハ、ハ、コリヤさうであります。おめへのを、この人がまちげへてあらつたのさ。こいつをかしいハ、ハ、ハ。彌「エエばかをいふな。ナニまちげへるものか、アリヤアおれがのかわ。上方「イヤくあらがうてもあかんこつちや、わしがのといふには、しようがあるわいな。ふんどしのはしに、紺こんの糸で二の字がぬうてある。コレ見なされ、これがしやうこぢやわいな。そしてまだあるわいな。わし尻にえらい根太ねとがでてあるさかい、ふんどしにえらう膿うみがついてあぢやあるな。彌「ヨ、何だかがうせへに、かたまつたものがくつついてゐたから、手の皮のむけるほどひつこすつてあらつたわ。上方「そぢやさかい。わしのにちがひはないわいな。ト、ふんどしをとつて、ひろげて見すれば、なるほどはしの所にこんのいとにて、二のじのしるしあるゆゑ、これにて彌次郎ぐつともいはれず、へこみたれどもいひがかりにて、よこにくるまのまけをしみをいふ。彌「イヤなんにしる、こつちもほねをつてあらつたから、たと

うろ／＼してある内、やどやのふうふはしりきたり、ていしゅ「コリヤあんとさつせへた。北「イヤこの人がめをまはしたが、なんといふ名の人だへ。ていしゅ「わしとこへは、ふさしくござらせるお客さまだが、もとの名は辨平さまといつたが、今は名をかへさりせへたといふこんだ。わし今の名はしりまじない。北「そんならもとの名の辨平ヤアイ／＼コリヤ氣がつかない、名がちがつたらう。ていしゅ「ちがつてもかまひごとはない。こんな時ヤアだれが名でもえいちやア。北「御ていしゅ、おめへの名は何といふ。ていしゅ「わし丹九郎と。北「そんならおめへの名でもよんでやらう。ヲ、イ／＼丹九郎どのヤアイ ト、いふと、かつてより下男とんできたり。男「アニ旦那さまア、あんとさつせへた ト、いひさま手水ばちの水をくゝんで、ていしゅのかほさきへ、はきかけると、ていしゅ「ヤイ／＼ばかつらめあにをしるちやア。男「ヤア且様様ぢやアないか。だれがめをまはさせへたのへ。ていしゅ「ホンニだれであつたけ。女房「このふとは、ソレそこに、ふんぞつてあさせるお客がのへ。男「エ、めをまはしても、だまつてあるからしれない。ヲ「アイお客さまア／＼ ト、よつてかゝつてよびたつると、やう／＼きがついたと見えて、上方「ア、ウ、。、ていしゅ「ヲ、きがついたか／＼。マアこつちらへ ト、下男とていしゅ、ふたりがだきかゝへて、もとのざしきへつれきたり、いろ／＼かいはうするに、とかくたわいなければ、いしやよりはりとさわぎたつ。きた八つぎのまをさしぞき、北「彌次さんわりいことした。ぶち所でもわかるかつたやら、むつかしうに見えろぞ。彌「さうか／＼。北「アノをとこがひよつとしんだら、おめへどうする。彌「そいつはつもらねへ ト、少しふさぎで、まじめになつてある所へ、やどのていしゅ、むつかしきかほつきしてきたり。ていしゅ「うけたまはれば、おまへがあふとをぶつて、つきとばさつせへたげな。そんでがいにあばら骨をぶつて、ずだいほんたうにヤア、氣がつきまじない。むたらくなことをさつせへて、宿が難義なんぎする。マアあんとさつせへたのでござるのへ。彌次「ナニサわつちが、あのをとこのふんどしを、わつちがのだとおもつてあらつてやつたから、そこでわつちのふんどしをもあらつてよこせといつたを、何のかのと

へきさまのふんどしでも、たゞやることアならねへ。おれがのも、きさまあらつてよこせ。上方「ハ、。、。コリヤ無理いうてぢや、おまいが鹿相そらうで、わしのをあらはにしたぢやないかいな。彌「イヤなんでも、うそきたねへものを、人にあらはせておいて、其分ですむか。是非おれがのもあらはせにヤア合點がてんならねへ。そしてせんてへ。うぬがゆどのへわすれておきヤアがつたばつかりで、とつちげへたといふものだから、こつちよりそつちがわりいのだわ。上方「コリヤえらいへげたれぢや。それが鹿相そらうさらして、なにいふぞい。彌「コノべらばうめ、たはこぬかすとどてつばらへ風穴かぜあなをたゝきあけるぞ。上方「へちよございな。彌「ナニこのやらうめ ト、立ちかゝれば、さきもきかぬきの男とみえて、手をふりあげさうにするを、こんなことにはすばやきえどつこ、上がったものゝよこつらを、おもふさまくらはせて、つきとばせば、うしろへこけて、えんさきのはしらにどこをうちしや、うんといつてめを見つめ、きをうしなふ。北「ヤア／＼是はめをまはした。よびいけたくても名がしれない ト、



ぬかしやアがつたから、おこつたことさ。ていしゅうソリヤアおまへがおぞい。あつちのふんどしをあらはせへたは、ソリヤおまへの龜相だのへ。それにおまへのを洗つてよこせたア、無理ぢやアござんしないかのへ。北「さうさ、もうこつちのふんどしはあらつてもらひやすめへから、おめへもし、どうぞいゝやうにしてくんせへ、おたのみ申やす。ト、ていしゆをたのめば、ていしゆさきへかけ合のうち、さきの男もはやこゝろよくなりたれども、わざとまだよこはらをかゝへ、いたむふりしてさつそくにはしようちせず、だんぐむつかしくひねくるゆゑ、あやまりしよらもんをかくにきはまり、それにてさきもなつとくしければ、ていしゆいつさつをしたよめ、彌次郎にはんをおさせる、彌次郎もたびのことなれば、どうでもよいといふ心なれば、へいきにてきせるのがんくびに、たばこつぎて印判にする。その文言、

一札之事

一貴殿 禪を我等心得違にて洗ひ候に付我等の禪をも貴殿洗ひ可申旨理不盡申懸其上突倒し御怪我致させ候段不埒に付御詫申入候處御承知被下忝存候然ル上は以後我等禪に付貴殿へ少も御苦勞相懸申間數候爲其一札仍而如件（このしようもんにてあひすみ、中なほりのさけくみかはして、夜をふかし、やがてみなく打ふしけるが、ほどなく夜あけてしたくそくにして此やどを立出し、彌「コウきた八、手めへはおとゝひの宿へ、ふんどしをわすれて来て仕合だ。おれはわすれねへばつかりで、とんだめにあつた。業さらしな、いめへましい。

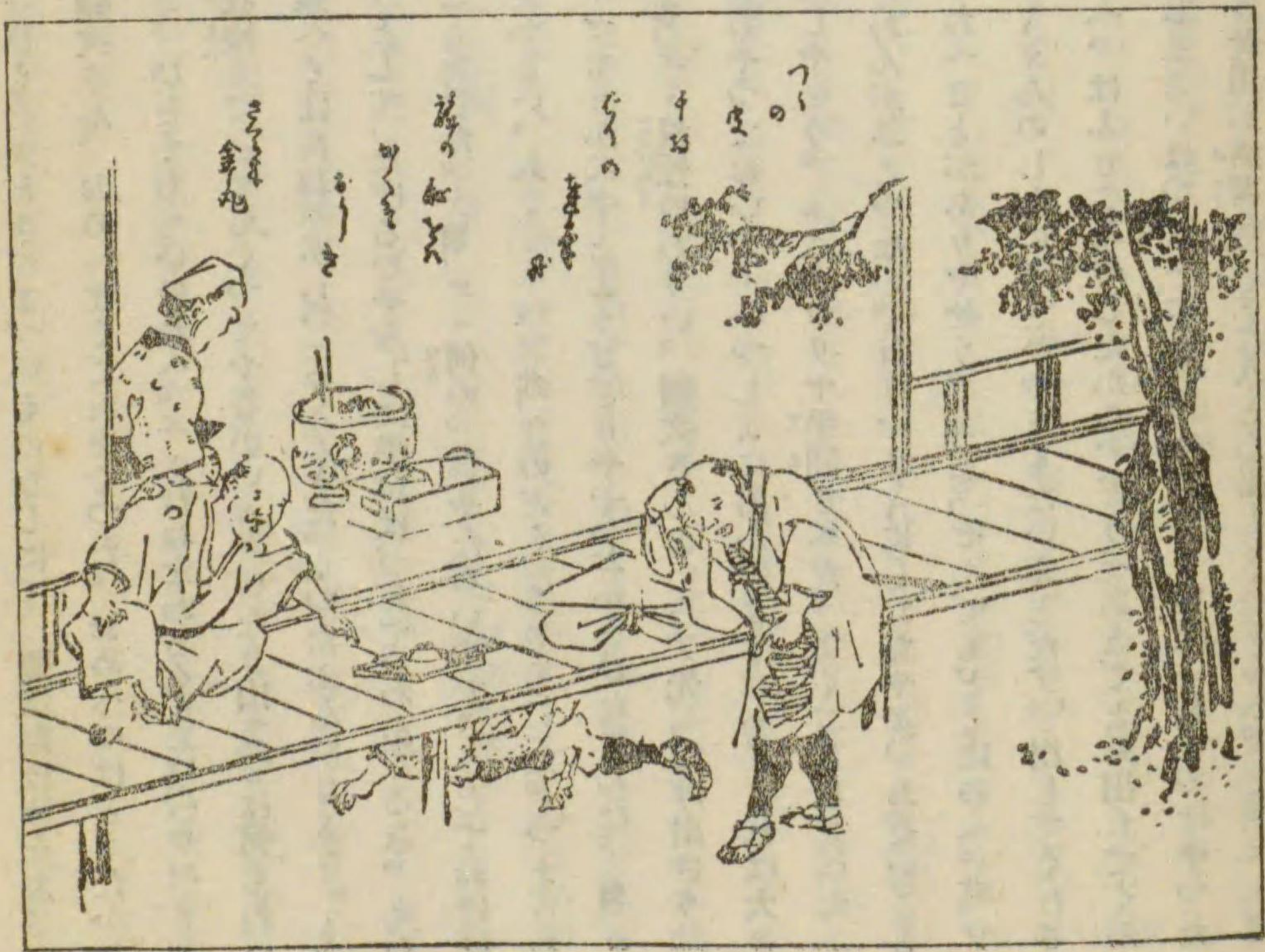
ふんどしとともにかきたる赤恥をあらひすゝぎしことぞくやしき
それより水内といへるところにいたる、こゝは梓川犀川落合て大河となりたるに、かけはしあり、おもしろきかたちしたる岩ども數多ありて、まことに絶景の地なり。このはしを水内はしといふ。これ當國三橋のひとつなり。（三はしといふは、當國より飛騨へ行道に難食橋、池田の戸張ばしと、此水内ばしなり。）

ゆくさきの所かはれば信濃路にかゝる難所のうきみのちばし

山にそひたる棧道をわたりゆくあとより、このあたりのものと見えたる、六十あまりのおやぢ、ふるしきづゝみとわらづとなど、いつかにしてかたにのせたるが、おやぢ「コリヤがい異なるおひよりになつたのへ。彌次「さうさ、しかしふりもしめへ。おやぢ「にしたちはどこへござらせるぢやア。彌「アイ善光寺へ。おやぢ「くにはどこだのへ。彌「アノ江戸神田の八丁ぼり。おやぢ「おえどはえいとこだのへ、わし若いとき。やくくおえどへいつてみたがのへ。ア、あんとかいふとこだ。ソレ屋根屋町とやらいふ、芝屋のあるとこに、わしゐたがのへ。北「やねやちやうといふはねへ。葺屋町のことか。おやぢ「さうだ。あんでも、みなやねのふいてあるとこだとおもつたのへ。北「しれたことをいふ。やねのふいてねへ所がどこにあるものだ。おやぢ「わしおえどで、むずすめないこたア手の筋を見るばつかぢやアない。おえどぢやア足のすぢも見るだらうか。北「ナニ足の筋を見るものか。おやぢ「そんな、手のかいてある看板の出であるとは、手のすぢを見るとこだらうが、足の看板のかけであるとは、足の筋でも見るだらうと、わしおもつたことか。北「ナニ足のかんばんといふのは、大かた足袋屋の看板のことだらう。おやぢ「まだある。アノ江戸前とやらいふ、のぼりのあるとこのへ、コリヤあにを賣るのだと、わし、やくく覗いて見たら、おなぎの事を、おえどぢやアえどまへといふかのへ。北「さうさ。鱧は江戸のまへでとつたのがいゝから、それだえどまへといひやす。おやぢ「えどのうしろぢやアとれまじないか。北「ナニえどのうしろといふのがあるものか。彌「イヤうしろをとる所がある。葺町といふところでは、うしろをとりやす。おやぢ「ソリヤアあにをとるのへ。彌「かまをとる。若しゆのかまを。おやぢ「わしの村にやア、娘の鍋といふがあるが、わかしゆのかまたア、これもむず、すめない。あんのこんだのへ。彌「エ、めんだうな、尻のことさ。おやぢ「アノおえどぢやア、よくふとの尻のあなが、せばいのふろいといふがあぜだか、わしゐたとこの大屋どの、けつあなア、せばいとふとがいふから、わし大屋どのが雪陣へいかつせ

へた跡へ、じきにいつて見たがのへ、アニけつあなアせばかアござんない。わしどもの國の中じま大根のやうな、
 がかいやつがひたつまで、ねぢりたふしてあつたものを、アニコレ、でかくふろくなくちやア、あんなてかいものは
 出ましないのへ。彌エ、おめへきたねへことをいふ。そのたれるのでおもひ出した。きた八、ナントめつさうに、
 腹がへつたぢやアねへか、北さうさ、今朝中食のむすびを宿へわすれて来たから、つまらねへ。モシこゝらにめし
 をくふ所はありやせんか。おやち、インネ稻荷山までいかつせにやア、あんでもくふものはござんしないのへ。彌、そい
 つはこまつたものだ。ないときくと、なほ腹がへつてこたへられねへ。おやち、にしたちはこの街道を、辨當もたないであ
 るかれるもんか。わしがうちはこのさきだ。まづくとも、麥飯でもふるまつてしんぜませうかのへ。彌、ソリヤアあり
 がてへ。むぎでも何でもいゝから、どうぞそれは、のうきた八。北さうさコリヤいゝおかたにあつて、わつちらが仕
 合だ。ト、つゐしやういひつゝ、うちつれてゆくに、やがてかのおやぢのうちにいたりて見れば、ながやもんありて、
 中ぐらゐのひやくしやうのうちなり。おやち、サアこゝだに、ござらせへちや。ばどあどの、今かへつた。ア、おぞい道で、
 足がくすばつたくなつたのへ。サアにしたち、そこへかけさつせへちやア。ト、おやぢはわらじをぬぎ、あがる。ふた
 りはそのえんがはにこしをかけると、うちのばどたち出、ばどちつさまア、權十の所へよらせへたかのへ。おやち、あ
 つめは、おれおなごら、やくやくいつたに、むずいかないやつだ。去年の豆の錢もよこさないで、芋の種をかせてくれ
 さいと、だめばつかくぜりやくわのへ。ばどしん田の太さむどのが来たがのへ。かつさまがこんぢうから、疝氣を
 おこらかしたうへに、ぢつさまが血のみちで、おへないといふこんだのへ。おやち、ぢつかけのよたものめも、きんに
 よう芋のぼた餅を、のかアくつつけてくつた上に、しよんばいさかなア、ごんばうといつしよに、辛子味噌でくつた
 にあてられて、いけないといふこんだのへ。彌、モシわつちらア、さきへ急ぐものだに、どうぞとてもものことに、は
 やくしておもらひ申てへの。おやち、ホンニさうづらア、ばどあどの、コレこのしゆが、辨當わすれてひだるいげな、

麥めしてもしんせてくだりせへちやア。ばどその麥で思
 ひつけた。ぢつさま栗のことはどうさりせへたのへ。
 おやち、あはア、ぢつかけにも、なから五俵もあるずらか。
 むずかせないわのへ。北、コリヤはじまらねへ。おいら
 をひきずりこんで、あつちのことばつかりいつてゐらア。
 彌次さんもういきやせう。おやち、ホンニばどあどの、めし
 はどうしるちやア。ばどアニもうめしは、晝餉にたらな
 いで、もろこしもちをくつて、みな野らへいつたがのへ。
 おやち、ハア、めしはないか、餅はあるずらア。にしたち
 やア、きのどくなこんだ。めしはないが、もろこし餅で
 もよかア、くつてござらせへ。彌、めしがないと聞いてい
 よいよひもじい。北、イヤもうなんでもいゝ。もしわつ
 ちやア、其もろこし餅が大好物でござりやすから、どう
 ぞ、それでもおねげへ申やす。おやち、すきなならソレ、ば
 ばあどの、餅をしんぜさつせへ。ばど、またつせへまし。
 ぬくとめてやらう。ト、へつつい下へ、まつばをくべ
 てきたたて、やがてすひものわんに、二せんもりでもつ
 てくる。ふたをとりて見れば、たまみそのにぎりし汁に、



大こんのはをきざみこんで、もちをいれたるぎふ煮なり。ひもじきときのまづいものなしにて、彌次郎はめをふさいでいちぜんくつてしまふに、北八ほき出して、北「コウ彌次さん、おめへよくこれをくつた。おめへのはどうだかしらねへが、コレおいらのもちは、じやり〜と砂だらけて、ひとくちもいけねへ。エ、むねをわるくした。ペツペ〜ペツペ。彌「それでも、くはねへけりや、義理がわりい。我慢して一ぜんくつてやるがい。いなり山までは何もねへといふから、ひもじくはつまるめへ。北「このひもじい腹へくはねへから、よく〜だ。くつたぶんにしよう。ト、人の見ぬまに、わんの中のもちをえんの下へはふりこまうとして、なげるひやうしに手がはづれて、わんぐるみ、えんの下へぐつとはふりこんでしまひ、北「ヤア〜とんだことをした。彌「エ、何の。いやならいやでさうしておけばいゝのに、椽のしたへ椽ぐるみはふりこんだか。コリヤをかしい、ハ、ハ、ハ。北「きのどくなことをした。つまらねへ。ばゞもちがよかア、まつとかへさつせへまし。北「イヤもうかへずとようござりやす。おかまひなさんな。彌「コレ〜手めへ逃ちやア、おれがこまる。いゝわ、うつちやつておいて、いつしよに出かけよう。ハイこれは大きに御馳走になりやした。いそぎやすから、たべだちにいたしやせう。おやぢ「コリヤ手間ざへだ。よくござらせへたト、そこらを見まはし、わんのないを見つけて、おやぢ「ヤアわんがふとつない。コリヤ〜にしたちやア、おぞいことしる。わんがふとつない、どうさつせへた。北「ナニ椽のねへことがありやせう。おやぢ「そんなもどこのへ。北「ソレそこにツイえんの下へ入れておきやした。おやぢ「アニ〜えんの下に。とひやうもないふとだア。出してくれな。北「わつちがツイ籠相で、吸物わんはその椽のしたへ、はふりこみやしたから、どうぞあとでとん出してくんせへ。おやぢ「イヤにしたちやア、辨當もたないで、難義しるといはつせへたから、やく〜餅をふれまつてやつたに、あぜ椽のしたへ、わんをぶつこんだのへ。彌「イヤもう此男が無調法。きた八とん出してあげろへ。北「エ、面

倒な。出してやりやせう。ト、そこら見まはし、竹のさのありしをとりて、えんの下をかきさがすうち、おやぢはぶつぶつと、なにかこどとをいつてある、彌次郎をかしくふき出せば、北八はらをたて、北「エ、わらひごとぢやアねへ。コリヤまつくらで、さつぱりしれねへ。なんでもこゝらのけんたうであつた。彌「さうしてかきまはしたら、結局でしれなくしてしまはうからいつそのこと、手めへむぐりこんで、とつてきやな。北「コリヤこまつたものだ。エエしかたがねへ。ト、しれこみて、北八四つばひになり、えんの下へ、そろ〜はひこむ。おやぢ「きんによう、うちのどんじやあまめが、さいこ榎をそこへはふりこんだ。ついでにそれも、とん出してくれさい。ばゞ市まが足駄も、かたつぽなくならかした。そこらにあるずらア、それも見てもらはせへ。北「エ、いめへましい。わんはしれねへで、猫のくそをつかんだ。エ、きたねへ。彌「ハ、ハ、ハ、業さらしだ。おもしろ〜ト、彌次郎もおなじく、えんの下をのぞいて見るに、かのすひものわんは、ぢきにくちもとに見ゆれば、彌「ソレ〜、そこに赤いものが見える。ツイそこにあつたものを、北「ドレ〜ほんにくちもとにあつたを、見つけねへで大ぼねをつた。ト、こどとたら〜、わんをとつて、はひいづるかほ、そこらぢうでひつかき、きずだらけになりて、あたまには、くものすをひかけて出る。彌「ハ、ハ、きた八。そのつらはなんだらう。生捕ました〜といつて来さうな、奇妙希代のつらになつた。北「しやれずと、脊中の埃でもはたいてくんせへ。おやぢ「さいこづちは、あぜとつてくれない。北「エ、そんなものを。おいらがしるものか。ト、こどとをいひながら、からだぢうを手ぬぐひにてはたき、北「ホイこれはしたり。えんの下へたばこ入をおつことしてきた。彌「またはいるのか。北「コリアとんだめにあふわ。ト、またえんの下をのぞき見て、竹のさをいれ、たばこ入をひつかけて取出し、はては大わらひとなりて、やがてこのところをいとまごひして、たちいづるとて、

椽の下犬のまねして四つ這ひにはうてとりしは吸物わん〜

(きた八、おもひもよらぬめにあひて、ひとりはらたちまぎれに、あしはやく、さつ／＼といそぎゆくまゝに、はやくも、いなりやまのしゆくに出ける。このところは、ぜんくわうじの本かい道なるゆゑ、わうらいにぎはしく、ちや屋もあまたありて、じいかなれば、まづこゝにておもふさま、したくとゝのへ、やう／＼ちからつきければ、) ざるにてもかくひもじさにあやまつた稻荷山にて腹をこやせり
 それより、丹波(たんば)を打すぎ、犀川(さいがは)のわたしにいたる。こゝのわたし船は、兩方の川岸(かはぎし)より綱を引はり、それをつたひてわたるふねなり。

はや川を舟でむかうへ渡邊(わたなべ)の綱ひとすぢをたよりなりけり

かくて善光寺の町にいたれば、とり／＼の商家軒(しやかのき)をならべ、繁昌(はんしやう)いふばかりなく、兩側のはたごやより、はたごや「ハイ尻垂屋(たなや)じやう兵衛(べゑ)でござりす。とまつてござんしねへか。ト、このへんにては、十をじやうといひ、丈をじやうといひ京をきう、久をきやうといひ、てうをちう忠をてうといふ、ことばのまちがひあり、やどや「お荷物(おにもの)をあづけてござんしねへか。 綱鍋屋(かんなべ)長四郎(ぢやうしやうらう)でござりす。おとまりなさりいし。ト、やどやみな／＼、じぶんの名をよびたて、りよじんをよぶ、此所のふうなり。北(きた)ナントこゝらへとまらうか。やどや「おはいりなさりいし。彌(や)そんならふたり頼みます。ト、こしをかける、ちやをくんでくる。此内西(このうちにし)こくどうしや廿人斗(にじゅうにんと)、どや／＼は入、同者(どうしや)身がとうは、西(にし)さなへ九州肥後(きゅうしゅうひご)のもんぢやが、はたごどもどれしこで、とめてくれしやる。やどや「百五(ひやくご)じやう文(ぶん)がじうねでござりいす。同者(どうしや)「イヤ身(み)がとう、そんながい(なんがい)にやアづることならんでや。同行(どうぎやう)よんにやうぢや。あんがい(あんがい)「こんがい「はしやれずと、まけてとめんてくれしやれ。そんな(そんな)「身(み)がとうは、何(なに)しこかしこもいらんでや。めしども七八(しちぱち)はいに、汗(あせ)どもは六七(はくしち)はいもくふが、平(ひら)どもかへてはくはんでや。中食(ちゆうじき)は此柳(このしやなぎ)ごりにいつばいつめてもらやア、それしこでなにもいらんでや。はたごどもはひとりまへ八拾(はちじゅう)文(ぶん)づづらします、よかならとめてくれしやれ。ア、けふはるすいみちども、そこねいこゝねい、よん

にようさるいて、ぬたのごとしぢや。やどや「そんだら。百二(ひやくに)じやうづつとめいせう。ト、だん／＼おしあひ、相談(さうだん)ができて、みな／＼にもつをこゝにおいて參詣(さんげい)する。彌次郎(やじやうらう)きた入も、ふるしきづみかさなどをあづけて、參詣(さんげい)し、

すゑ膳(すゑぜん)の善光寺(ぜんくわうじ)とて有(あ)りたや衆生(しゆじやう)度(ど)もかんでくゝめる

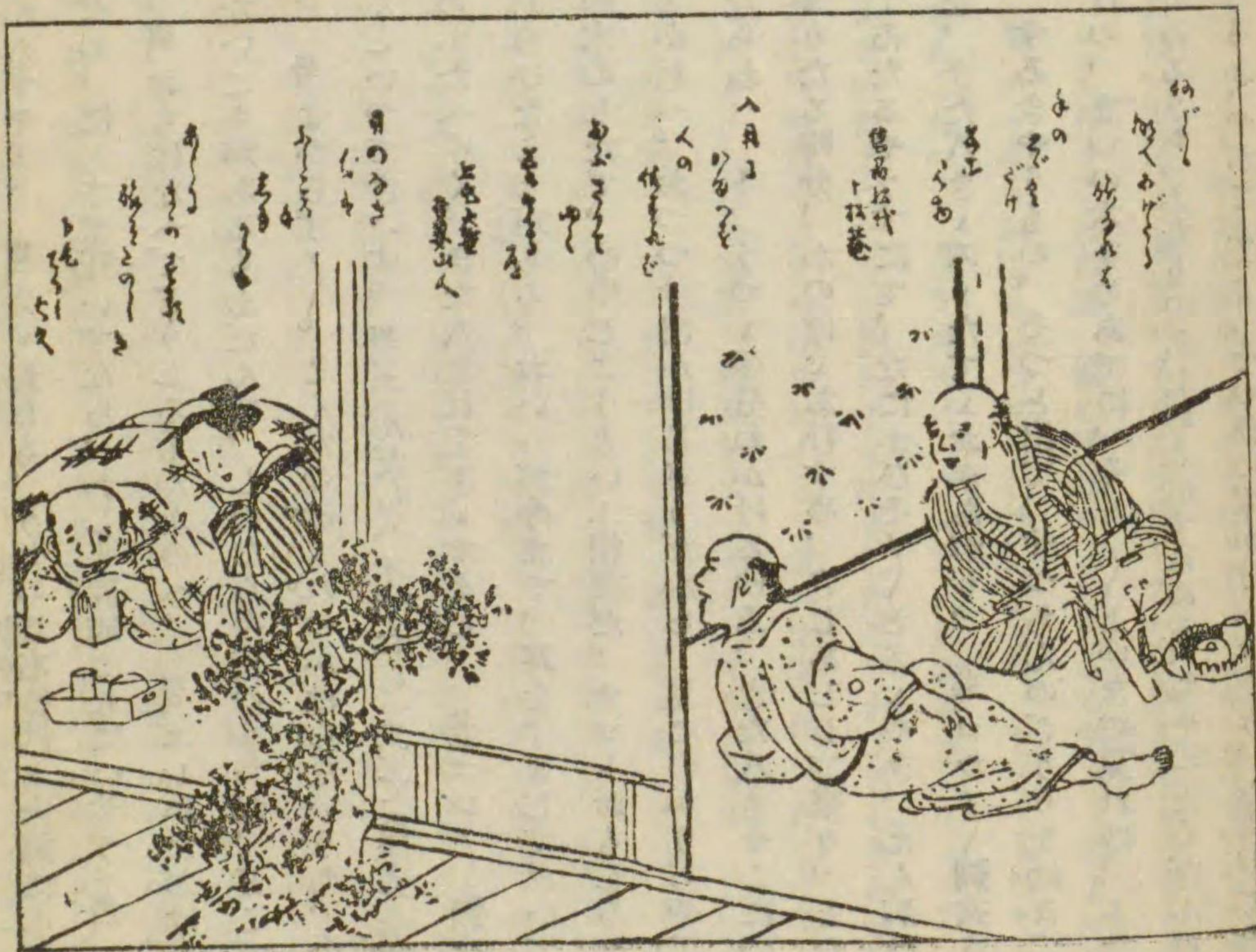
抑(おさ)善光寺(ぜんくわうじ)如來(にょらい)三國(さんごく)傳來(でんらい)の靈佛(れいぶつ)にて、皇極(くわうごく)天皇(てんわう)元年(げんねん)、この水内郡(みづうちぐん)に建立(けんりつ)したりとかや。塔堂(たつだう)の結構(けつこう)、善美(ぜんび)をつくしていふばかりなし。本願主(ほんがんしゆ)は本田(ほんた)よしみつときけば、

よしみつも背中(せなか)に腹(はら)をかへてげりおぶひ申(まを)て安置(あんぢ)信濃(しんぬ)へ

かくて境内(けいだい)の諸堂(しよだう)こと／＼く巡拜(じゆんぱい)して、以前の宿(しゆく)に歸(かへ)りければ、やど屋(やどや)「おはやうござりいした。サア／＼これ／＼ト、あんないして、おくのざしきへつれゆき、おやぢ「おたくびれてござりいせう。ちとおかたげなさりいせう。彌(や)コリヤとんだ御奇麗(ごきれい)だねア、いゝ庭(にわ)だ。モシ、ぐつとむかうに見える松(まつ)は、おめへの所の松(まつ)かね。おやぢ「ハイわし脊(せ)戸(こ)のおくてござりいす。彌(や)ハテ大木(おほき)だね。モシ松(まつ)もあのくらゐになるには、年數(ねんすう)はどれほどたつたものだね。おやぢ「ハイことして千(せん)じやう六(む)年(ねん)になりいす。彌(や)それはくはしい。十六(じゅうろく)年(ねん)といふはしたまで、おぼえてゐなさるはどうしたものだね。おやぢ「さればでござりいす。私(わし)とこの弟(あに)が。このじやう五年(ごねん)あとに、病死(びんじ)しいしたがのへ。其(その)まへのとしに、あの松(まつ)のえだが地(ぢ)べたへたれました。松(まつ)は千年(せんねん)たつと、枝(えだ)が地(ぢ)べたへつくと申(まを)すから、ちうどつことし千(せん)じやう六(む)ねんになりいす。北(きた)ハ、なるほど田舎(いんが)は正直(しやうじき)なものだ。かんしん／＼ト、ていしゆはたつてかつてへゆくと、すりちがひて、女(め)ぜんをもちきたり、五十(ごじゅう)ばかりのぢゝむさき女(め)、きふじをしてめしもすみ、ゆにも入(い)れまひて、ふたりねころびゐたるところへ、下女(げによ)ちやをふたつもちきたり、女(め)「にばなが出(で)出した。ふとつおあがりなさりいし。ト、この内(うち)かつてより、よぎふとんもち來(き)ると、下女(げによ)とこをとる。彌(や)どうだ姉(あね)さん、ちとこゝではなしねへ。女(め)「おまへさまがたア、おえどかのへ。北(きた)「さうさ、えどつ子(こ)さ。女(め)「わしとこの娘御(むすめ)が、ふさしく

おえどのおやしきにをりいして、こんちうかへりいしたかのへ、がいにおえどはえいとこだと、いまにおえどのしゆといふと、むたらく戀しがりいして、おまへさまがたア、大かたおえどであるすらア、どうぞおはなしがしいしたへと、今もいつてをりいしたのへ。彌むすめときいては、やぼでねへの。北「ことに、おやしきにつとめてゐたとあればこのもしい。さだめてうつくしからう。どうぞはなしに來なせへと、さういつてくんせへ。女「アノおまへさまがたのまへへ出いすのを、がいにはづかしがりいして。彌ナニはづかしいことがあるもんだ。どんなおむすか見てへものだ。女「さいぜんこゝへきいした。彌ナアニむすめらしいものはきやしねへ。女「ソレ御膳のときおきふじをしいしたのへ。彌エ、きふじしたは五十ばかりの、みつちやくちやのばあさまだ。女「それがこゝのむすめでござりす。彌ナニあれか。おきやアがれ。あれでも娘か、いくつになる。女「わしとこのばあさまがのへ、二じやう五のときうみしたげなで、ことしばあさまがちうどつこ、七じやう一になりす。あのお子は四じやう六とやらに、なりすと申いすのへ。北「おやしきは、どなたのおやしきに、なにを務めてゐたのだね。女「アノ山の手とやらのお屋しきに、おまんまをたいてをりしたと、もうとしごろでもありす、どこへか片付たへといひすが、どうも縁遠くて、えいとこもござんしねへ。彌「イヤちよつと見た所が、色が眞黒で鼻がひらたくて、あばたも念の入たひつりだらけのうへ、おまけに横小髻が、はげてあつたといふもんだから、なるほど、縁遠いはずだ。相手になる人があるめへ。女「そんでも舅のない身上のえいとこへ、ちくと支度のかねでもとつて、かたづけへといつてをりすが、世界はふるいやうでもせばい、どうもそんなくちはござんしねへ。北「イヤあつてたまるものか、むしのい。女「そんでもきまなざりいし。ト、こゝゑになりて。となりざしきのかたへゆびざしをして、女「この隣座敷に、逗留してをりすふとは、遠州の商人衆でござりいすがのへ、ふさしくわしとこにゐいして、うちの娘御とわけが出來へしたが、あんだかひたりづれて、ぬげるやうなはなしをきまゝいしたが、あふとは、むすいけなへよたものでありすから、ぬげたらしまひ

には、女郎にでも賣れいすだらうと、わしつぼくてなりいしねへ。彌「あんなさんな。あのつらで、うりたくても買手があるめへ。北「イヤさうもいはれねへ。ひよつと見世物師なら、かはうもしれねへ。彌「となりざしきの色男といふは、どんなをとこだ。女「そこからのぞいてお見なさりいし。ト、いひすて、ゆくと、あとは打わらひつゝ、彌次郎はよぎ打かぶりねかける。きた八そつと、からかみのすきまより、となりをのぞきて見れば、あんどこのうしろにふとんをきて、ねてあるをとこのそばに、やどやのむすめひそくと、なみだごゑにていふをきけば、彌「どうせのへ、くされえんだア。わしにしさまをのけて、外の男はやアでござりす。ト、いふと男はゑんしうのもの。男「アニハイ、おらもこんたと申かはしたこたア、けゝれにやアちくともわすれずこたアござんない。がらあおらも、親方の爲替のかねをつかひこんで、國へもいかれない。こゝの内にやア、借錢ががいにできたアもんだんで、どうしずかうしずと、異な氣になつて、いつこのこと、しなすと覺悟をきはめて見たが、



アニハイこんたがかはいくてならない。あんとしたらよからずヤア。嬢ア、わしも、うちの馬右衛門と夫婦にしると、かつかさまがいひすから、そんでかなしくてなりへせぬ。にしさま死しにすなら、わしも同志どうしにしにいせう。男、エレばあちや。こんたおらがことをそれほどまでに、嬢おもはなへてどうしるもんかのへ。男、エレかたじけない。おらハイしやつ是非び、あしたはかねがなくちやアならないことがあるもんだんで、しぬなら今夜のうちだ、どこでしなずヤア。嬢、せどの松の木の上で、しにいせう。男、よからず。こんたのけ、れのかはらないうち、今からそこへいかずかヤア。嬢、またつせへし。わしちよくといつてきいす。男、そんたらハイ。おらまつてあずヤア、ト、ふたりひそくとしめしあはせて、女は出て、かつてのかたへゆく。きた八これをきましまし。北、コレ、彌次さん、ねたか。彌ア、ウ、どうした。北、イヤ大わらひなことがある。おいらが今まで、耳をすましてきいてるたら、隣座敷の色男と、こゝのぼゞあ娘が、うらの松の木の上で、心中しようといふ相談だ。ナントおもしろへぢやアねへか。おいらアついで、心中する所を見たことがねへ。おつつけ出かけるさうだから、見にかうぢやアねへか、どうだ。彌、ばかアいふな。おいらアねふたくてならねへ。ト、うつゝ半分ねかけるゆゑ、きた八もそこにつぶしてゐるが、しばらくありて、もはや人もねしづまりたる時分、かのぼゞあむすめ、さしあして来り、となりざしきのしやうじを、そつとあけてはいると、男まつてゐたるやうすにて、なにかひそくとさゝやき、えんがはの雨戸をあけて、にはさへきおりたち、打つて出てゆくを、きた八きまみゝたてゝおきあがり、北、コウ、彌次さん、今だ、コリヤたあいがねへ。ト、きた八ひとり、すみきやうもの、そつと出て、せつちんのさうりをはき、あけかけてある雨戸から、にはへおりたち、かのおくにはの、まつの木をめぐらして、そろくといひきて見れば、ふたりは見えず。これはどうだと、松の木の上にもうろくしてゐるうち、ふたりのあしおとがするゆゑ、ちやつとくだんの松の木へかけあがり、ほどよき所のえだをふまへて見てゐると、やがてふたり、その松の木かけへきたり、なみだごゑ

して、男、エレハイおらアこんたと、爰でしぬは嬉しいが、こんたのかつかあさまやとつとをさまが、あとでやぶせつたくなかずとおもやア、がいにそれが、かなしくてならないヤア。嬢アニもるかまひしなへ。わしにしさまとどうしにしにヤア、本望ほんぼうだアのへ。男、こりよアしつたら、こんぢうこんたが、紺こんの木綿のふんどしを買かてくれといつたがヤア、おらハイそれがかつてやらないが残のこをしい。嬢、エ、もうあにもいつてくれさいますな。しんでもひたりどうしに、つるんでいくとおもやア、思ひ残すこたアござんしねへ。男、アニハイ、こんたとはなれずこたアないヤア、かくごはよからず。今がハイ、此よの別れだ、なんまいだぶつ。ト、男がこしにさしたる、わきざしをぬきはなし、ふりあげたるきつきき、松の木の上にあたりし、きた八の目のさきへひらめくと、北八おもはずびつくりして、はつといふひやうしにふみはづし、女のあたまの上へどつさりおちると、男あわてうろたへてかけ出し、にげてゆく。女はきをとりのしなひ、きた八はこしのほねをしたゝかうちて、なでさすりゐる内、女しやうきつきて、嬢、わしたまげた、今のはあんずらア。ト、やつぱりきた八を、かの男とおもひてよりそふに、北八はこしほねのいたさに、只せい／＼ばかりいつてものをもいはず、女北八の手をとりて、嬢、けつねでもあるずらア。コレにしさまは、おくれへしたか。今となつてあにをしあんしるのへ。わしさうだらうと思つて、剃刀かみそりをもつて来た。わしさきへしんでも、にしさまぬげちやアヤアだから、サア／＼かくごをなさりいし。にしさまからさきへかうしる。ト、北八のむなぐらをつかみ、かみそりをつきつけられ、北八きもをつぶし、北、ヤアコレ／＼、おれだ、人ちげへだ、まつてくれまつてくれ。ト、かみそりをもちたる手をしつかりとらへて、もぎはなさうとせりあふ所、やどやのうちではむすめが見えぬと、大さわぎに、かねてよりとうりうの旅人と、わけあることは、家内にたれしらぬものはなきゆゑ、おくざしきをせんぎするに、その旅人も見えず。さてはつれてにげたるならんと、そこらたづねさがすうち、おくにはに人ごゑするといふにまかせ、やどやのおやぢをとこどもに、てうちんをもたせ、こゝにきたり、むすめを見つ

て、おやぢ「ヤア、こゝにゐる」。コリヤ段七、そつつめをぬがすな。ヤイこのごんじやあまめ、うぬどうしるか見されちやア。ト、むすめの手をぐつとねぢ上、おやぢ「コリヤ、こいつめをまづ、ひこずつていけ」。ト、下男にむすめをつれさせて、うちへやり、きた入をとらへる。此内北八にげようとするに、こしいたみたゞず。おやぢ「サアうぬうせつちやア。北アイタ、、どうする」。おやぢ「イヤどうしたア、此よたものめが。コリヤ、だれでも繩をもつてこいちゃア。ト、おやぢのほせあがり、むちうになりてはらちまぎれ、あしこしのたゞぬきた入を、ほそびきとりよせ、ぐる／＼まきにして、いひわけも何もみゝへはいらず、引ずりかへりて、うちのだい所へひきすゆると、北「コレ、おれは今夜こゝのうちへ、はじめてとまつたものだが、どういふわけてこんなにしぼつたのだ。ト、いふかほを見ておやぢびつくりし、おやぢ「コリヤあんのこんだ。ずだいなすめない。あるほどにしは今夜とませへたふとだが、あぜまた、わしとこのむすめを、あんとするきてひこずり出さつせへたのへ。北「イヤおいらぢやアねへ。おくに逗留の客だけな。心中しようとしてつれて出たとさ。おやぢ「そんなにも、にしとむすめとひたりばつか、あそこにゐたは、あぜだのへ。エリヤあまめ、われはだれと出たちやア。ト、むすめをせめても、たゞしく／＼とないてばかり、ものをもいはず。此内彌次郎めをさまし、家内のさわぎに何ごとやらんと、おきいてて、かつてのかたを見れば、きた入しばられてゐるゆゑ、彌次郎はしりよりて、彌「イヤ御亭主、此男はどうしやした。北「ヲ、彌次さんか、い所へ。おいらが隣座敷の客と、こゝの娘が心中するといふから、それを見に出かけた所、その男めはどこへかいつて、おいらが疑ひをうけて、此とほりだ。つまらねへぢやアねへかへ。彌「何にしろ、たとへ此男がどういふことがあらうとも、つれもあるものだ、なぜおいらに一言こたへもしねへて、ことわりなしにしぼつたのだ。その分ぢやアすまねへ。この男も外聞がわりい。きつとあかりをたてにやア、合點しねへぞ。ト、たかびしやにきめつけられて、もとよりきた入には、わけのなきこと人もしようちのうへ、おやぢ今さら大へこみにて、ぐつともいはず、まづきた

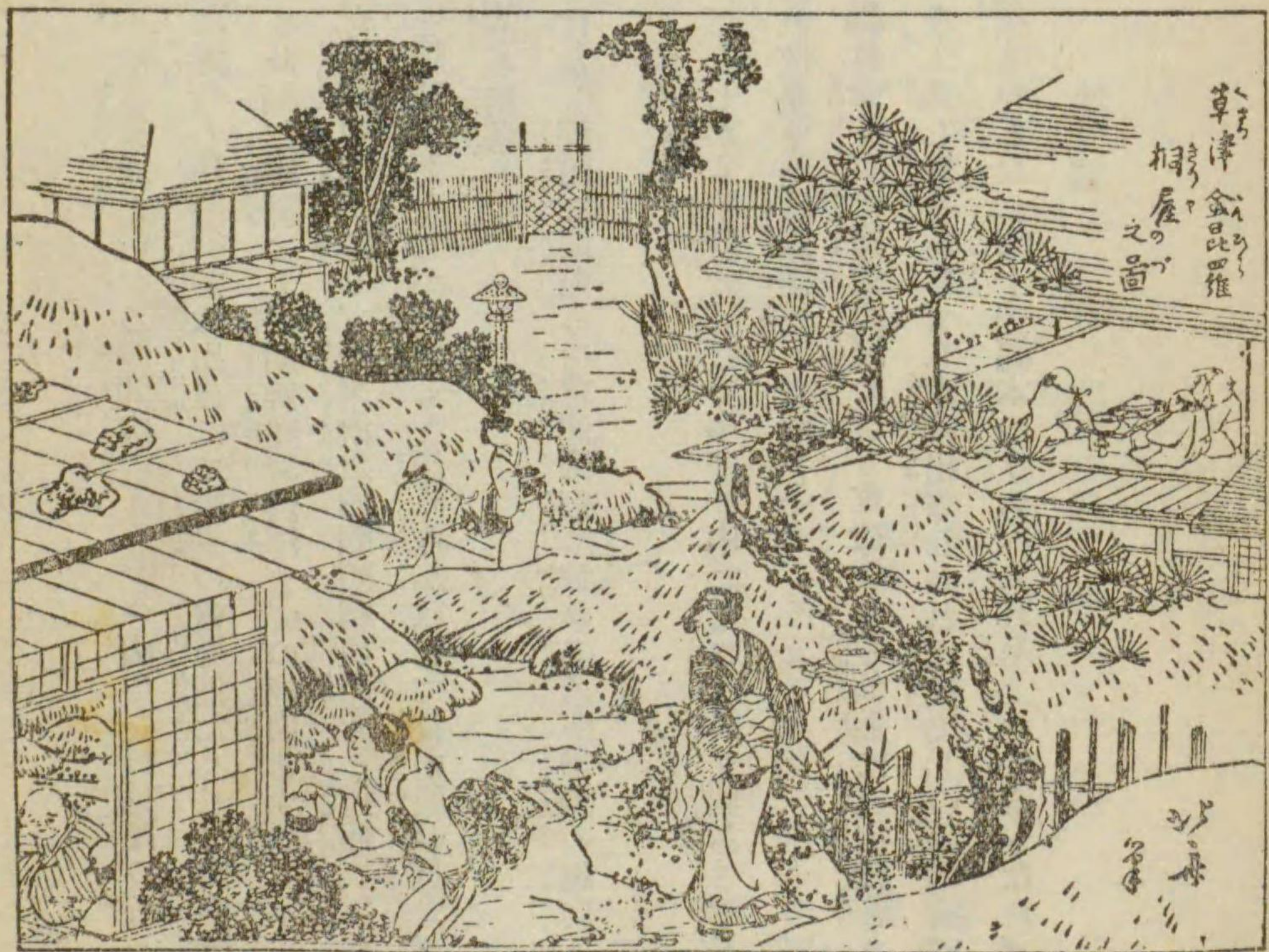
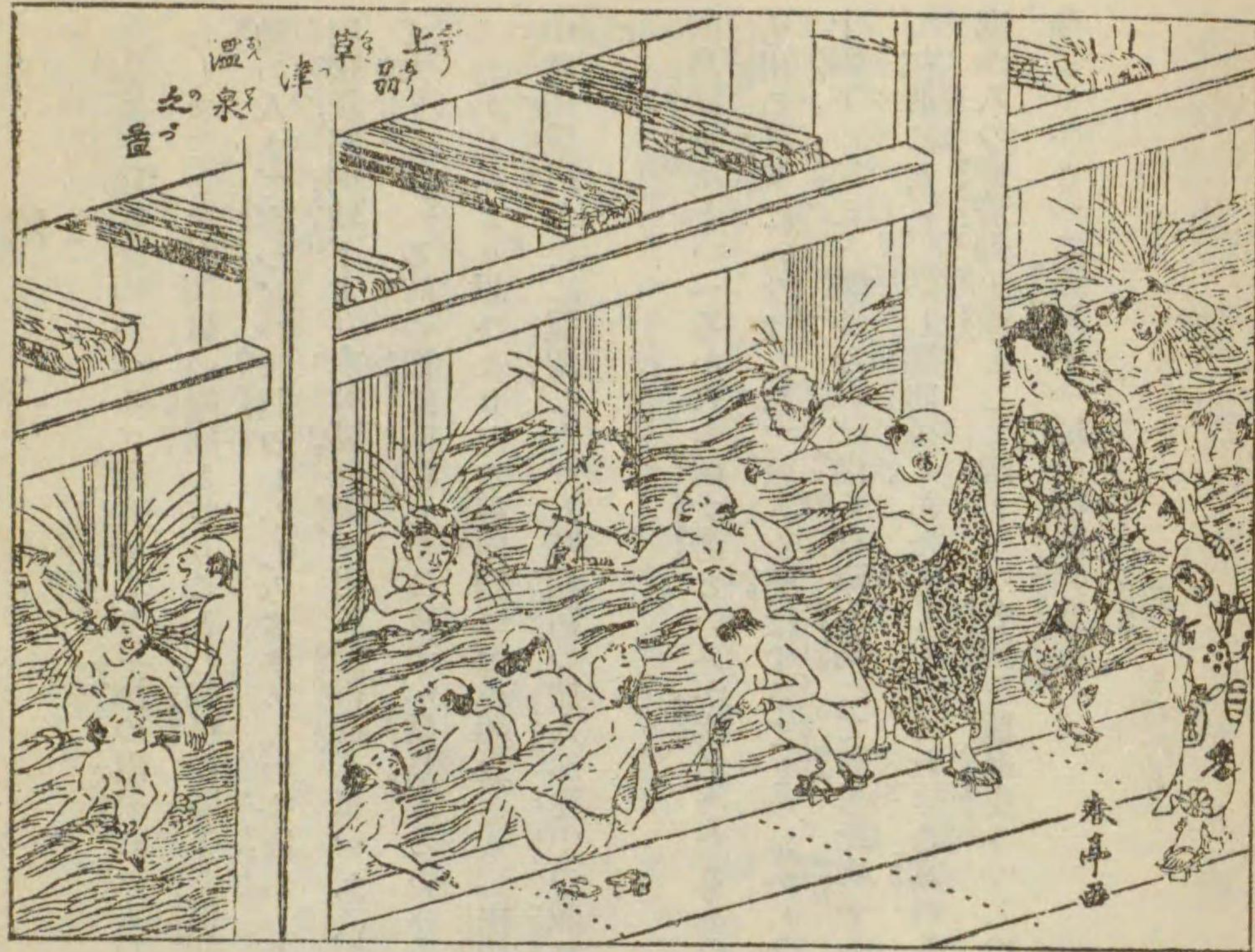
入のなはをときすて、おやぢ「わし、がいに氣がのほせあがつて、あるほどさういはずせいすといひわけがなへ。おの客が娘を、ふづくり出したこたア、ちがひはなへ。どうもそこへ、たち合せへたがすめなへて、異なことをしいした。了簡してくれさつせへし。ト、いろ／＼とあやまるゆゑ、しかたなくこれもはなしのたねと、れうけんし、きた入のこしのいたみも、やう／＼やはらぎ、はては大わらひとなれば、やどのおやぢもひつきやう、きた入のけがをせしゆゑ、むすめのいのちもつゝがなきをよろこびて、やがてひものゝむしりさかなに、さけをいだして、申なほりのさかもりし、ふたりはもとのさしきにかへりて、あさいのはなしをきゝ、大わらひして、彌「そんなら手めへ、ふたりのしんぢうを見るとつて、松の木へあがつておつこちて、腰のほねをいためたとか、ハ、、きのふは大町の宿で馬からおつこちる、今夜はうらの松の木からおつこちる、とかくおちることのすきなをとこだ。

心中の惚たどうしはさもなくして見にいたやつが腰をぬかした

かくよみて、打わらひつゝふしたりけるが、はやくも夜あけて支度とゝのへ、此宿を立出ける。

この末草稿あらまし出来しあれども帖數あまり多くなりて彫刻手間とり可申當春
賣出しの間にあひかね候故先これにて九編目をはり申候また／＼此次來辰の新板
追而差出し入御覽可申候

續
膝
栗
毛
十
編



序

をとこもすといふ日記をみれば、かつをふしにはことかゝねと、いもゝもちひもなかりけるとか。いほぬしかひとり行脚、きちんとまりもなつかしからず。あるは、いたこ出しまのまことをわけたる菅原のおじやう様、又いさよひの月にうかれて、ぼどアをいふつほしやうそくなと、長いたひちの同行にはこたつきも出くへくやけに／＼旅はみちつれにて、馬のあひたるともたちの道くさをくふひさくりけこそきさんしなれ。もとより作者の達者にひかれて、よむ人のめもくたひれざる、巨燧ながらの歌まくら、こゝろゆきてや人もみんかし。

六 樹 園

附言

予去夏越後遊歴のかへるさ善光寺より草津の温泉におもむくに大笹通といへる淺間山のうしろ山中を行見聞のめづらしきことを九編目の趣向とせりことし初秋の頃より信州に遊行し伊奈街道大出邑にて書畫の會を催たりしに山中辟地の人まで寄つどひ言語のおかしみさまの奇説ありしを此編仁禮驛より大明神建場澁澤までの趣向とす
 同國飯田御城下より木曾妻籠驛へ出る道行程八里のあいだ嶮難の山道にして往來淋敷西國願禮の同者と道連になりて大平といへる峠の宿に同宿したる夜予が僕鳥眼といへるを煩ひ居たりしが彼同者と酒くみかはして夜中眼の見えざるおかしみより思ひよりたる趣向彌次郎兵衛喜多八が田代泊の滑稽とす
 中津川扇屋かたに逗留したりし時相宿の旅人が途中の戯れはなし襖越に聞たるを草津湯宿に彼喜多八が争論の趣向とす

福島驛笹屋といへるかたの婢女清といふが鄙めきたるものごししかも早辯にてむくつけき中にもさまざま興ある事ども出る任せにいひはなちて旅人を笑はすることのおかしければ是また草津滞留の趣向とす
 十編下の巻こと繁多なれば漸く草津入湯にて終る此次十一編は全く東都歸着滿尾により草津より中仙道に出板橋驛まで三冊にあらはし趣向悉くあたらしく耳ふれざる事のみを工夫し最早あらまし草稿出來しつれば賣出しの節彌次郎喜多八の歸着御土産として國の名産を數品生うつしの摺ものとなし右十一編本のうちへ入れ呈上のつもりなれば今よりひとへに滿尾十一編の御評判宜敷

希ふものなり

上州草津 溫泉道中續 膝栗毛 十編 上册

東都 十返舎 一九 著

春の鶯はいふも更なり。空をかける時鳥さへ、青葉ふく軒にちかづき、本尊かけたかの聲珍らしからぬ信濃路の旅にうかれゆけば、鶏の卵に氣力を得るばかり、初松魚といへるものは夢にも見ず、されども若鮎の生てはたらく犀川のながれに、金色の光を放つ、善光寺如來の利益は、蒙らぬものなき街道の賑ひ、往來の貴賤ひきもきらず、驛々の繁昌佛都の功有がたく、彌次郎兵衛喜多八、こゝに一宿してそれより、上州草津の温泉におもむかんとて、道の程尋ねあはせ、福島といへる所まで、案内の人をたのみ、すこしの荷物を負せ、さきにたてゝ立出けるが、抑此街道は大笹越とて、草津まで行程十八里のあひだ、山道にして仁禮田代大笹の三驛の外、旅人の宿なく、難澁の地のみなりときくものから、朝とくより星をいたゞき、善光寺の宿をたち出、福島近くなりて夜明たるに、此邊田の水溢れて、往來道あしく、案内の男いかゞしけん、二度まで轉び倒れければ、見る人みなく聲をあげて咲ふにぞ、彌次郎取敢ず、
 こねかへす道のわるさに荷持までべたりくと尻もちをつく
 かくよみたれば喜多八もおとらず、

尻餅をつくく見ればべたくと荷もちのあしの弱きなりけり

といひもはてぬに、ありあふ人々、またどつとうち笑へば、轉びたる人足、我ころびたればこそ、かく賑かなれとて、不興顔するもをかしく、やがて福島の村はづれなる、茶店にいたれば、茶ヤのか、「おはやうござりへしたト、ちやしぶだらけのちやわんに、ちやをくみてさしいです、かみさん、何ぞうめへものはありやせんか。酒はどうだ。いゝ

のがあるかね。かゝア伊サ仁禮の羽生田の酒がござりへす。こゝらぢやア名代の酒だアのへ。北八「ナニあさつから、まだ吞ずともいゝぢやアねへか ト、かれこれはなして、やすみあるうち、何やらうらぐちのかたやかましく、此家のていしゆと見え、もうそうちくのほそきたけのこを、二三本手に引さげて、はしりかへりながら大ごゑにて、ていしゆ「アニだめなこくな、よたものめが。おらがせどへはえたのだから、とつたのだわ、あてこともなへ ト、ことごとをいひながらうちへはいると、おもてのかたより、此となりのていしゆと見え、大はだぬぎにてかけ來り、うちのていしゆにむかひて、となり「コレその竹の子はおらが藪から出たのだから、おらがものに、あぜとつてかへさなへ。ていしゆ「ばかアぐせる。アニコレおら、かへさなへがどうする。となり「インネこつちへかへせ〜 ト、くだんの竹のこをとりにかゝるを、やるまいとせりあふ。女ばうはあわて、とりさへてもとまらず、うちの子どもは、なきいだすゆゑ、きた八見かねて、やう〜ふたりをひきわけて、 北「マア〜何のこつたかしらねえが、しづかにしなせへ。どうしたのだへ。となり「イヤわしのとこの竹の子を、こつめがとりをつたから、かへせといふこんでござらアのへ。ていしゆ「アニそんたの藪でとりやアしまへ。おらが畑へはえたのだアのへ。となり「インネ尤はや。にしのとこのはたけへはえたにやア違ひはないが、おらが藪から、にしの畑へ、ちうどつこ竹の根がはつていつてはえたのだから、おらが竹のこだ、かへせ〜。 北「ハ、アきこえた〜。おめへのとこの藪の根が、こつちの畑へ這出てるによつて、筍がはえたから、こゝの御亭主がとつたのだな。コリヤ御ていしゆが理屈だ。たとへおめへとこの藪のねから出來たとつて、こつちのはたけへはえたものを、とつてもいゝぢやアねへかへ。そのくらゐなら、おめへの藪の根を、こつちのはたけへ、出ねへやうにすればいゝに。ていしゆ「お客さま、コリヤよくいつてくれさつせへた。おらずだいなこたアいはねへは。コノひる〜がら〜野郎めが。となり「えい〜。にしさういやア竹の子は、さつてくれやるわ。そんだけまた、にしからとるもんがある。コノ、ア、やうにしとこの牛が、おらの牛部屋で子を産たとき、コリヤと

なりのうしのうんだのだと、そのうしの子を、おらとらずに、にしとこへひかせてよこした。それをこつちへかへせかへせ。彌次「なるほど、これも尤、うしはこつちのうしでも、おめへの所で産だ子だから、コリヤおめへのほうへとりさうなものだ。ていしゆ「そんたら、またおらがにしかるとるもんがあるわ。ソレこんじやう、にしとこへいつたとき、にし雪陣へいつてたれたこんがある。もつとも雪陣はにしとこのせつちんだが、たれた尻はおらがけつた。サアそんときたれたのを、よこすかのへ。となり「ヲ、いくらでも、ソリヤとつていけちやア。ていしゆ「インネ外のものたれたのはいらなへ。おらがのをよこせ。まやものはくはなへぞ。おらがのはてつかくて、ながいやつを、蛇のとぐるをまいたやうに、ねぢたふしてあるはずだ。となり「エ、コノだほう親仁めが、えいかにぐれちやア ト、つかみかかると、こなたもまけずあらそふを、きた八またおしなだめ、 北「マア〜待なせへ。わかつた〜。はやくいへば、牛の子と雪陣は、いんだりにして、いひ分なし。引残つて、筍の一件だ。コリヤわつちが仲人だ、斯しなせへ。竹の子はこれかへ、六本あるから三本づゝわけなせへ。それで双方申分はあるめへがね ト、兩はうへわけてやれば、これにてふたりともなつとくし、となりのていしゆ、一れいして出てゆくと、うちのていしゆ、「コリヤお客さま。お手間さへでござりへした。モシおまへ、おやかましくござりへしたらうのへ。彌「ナニサものゝ行違といふものは、どこでもあることさ。サアきた八いかうか ト、此ところを立出るとて、

竹の子の争ひながら喧嘩にはたがひにふしのなくてめてたし

かくて仁禮の驛にいたり、これよりだん〜と、山坂道を登り行に、あとより此邊のものと見えたる男、徳利ふろしきづゝみなどを荷ひて來るを見かけて、彌次「モシけふはいゝ天氣でござりやすね。をとこ「アイサえいおひよりでござりへす。北八「しれたことをいふ。雨さへふらにやア、いつでもいゝ天氣だ。 男「アノこなたさまたちは、どこへいかしるのへ。彌「くさつへさ。 男「ハア草津へははじめてかのへ。 北「今度はじめて行やしたが、なるほど名物ほどあ

つて、姥が餅屋は大きなものだ。彌べらぼうめ、東海道の草津とはきちがへてゐらア、ハ、ハ、ト、だん／＼はなしつれてゆく。むかうより、近在のてらがたと見えて、小やらうひとりつれたる、をしやうどの、とゆきちがひて、和尚「コリヤ念七どのか、どこへ。ふさしくまちがつて逢ませなんだが、マアいつも嚴丈でえいこんでへす。男「ハイわしもハアうちが、やぶせつたくて、御無沙汰しるこんでござりへす。和尚、わしも持病はおこる、それにはや、近年にない大雪で、舊冬などは、ア、がい寒いこんでござつた。ト、あたまを、むしやうになてていへば、此男舊冬といふは、あたまのこととおもひしと見えて、男「さればでござりへす。きよねんからの雪にやア、わしどものやうな、毛舊冬でさへ、さぶい風がひゆう／＼と、なうてんから氷つくやうでござりへしたから、アニハア愚僧さまは丸舊冬で、さぞつべたいこんでござらしつらう。のう愚僧さま。ト、いふゆゑ、をしやうをかしなほして、あいさつもせずゆきすぐると、男「アノばあすめが、おらたてぶんで、ぐそうさま／＼といやア、返事もしなへていきをつた。ト、こゝとをいふを、きた八きよてをかしく、ふりかへりて、北「ホンニさきが出家だから、おめへあがめて、愚僧さまといふものを、挨拶もしねへといふは、アノ和尚め、何もしらねへと見える。男「アニしるもんか。わしのせなアが、わしのこんを舎弟／＼といふから、あぜわしの名は念七といふに、名はいはなへて舎弟たアどういふこんだと、わし今のばあすにきいたこんがありをつたが、むずしらなへかして、あんともしはんなんだがのへ。北「ハアその舎弟といふこと、おめへわからねへか。男「ずだいわしすめましなへ。北「いつてきかせやうか。舎弟たア何さ、どろばうのことさ。それだから舎弟／＼泥坊舎弟と、よく法印さまがいふことさ。男「さうだかのへ。アニコレわしついに、ハアどろぼうしたこんはないに、わしのこんをせなアめが舎弟／＼といふは、業の煮たこんだアのへ。ト、ひとりむしやうにはらをたてる。このうちはやたうげをうちこし、大明神といふたてばにいたる。山の中にわびしげなる、ただいつけんの家あり。ふたりはこのうちへはいりて、彌「ハイ御めんせへ。サア／＼いつぶくやつていかう。ト、

こしをかけると、かの男もこゝへはいる。みち／＼はなせしこの男の兄といふは、このたてばのちや屋のていしゆと見えて、こいしゆ「コリヤおはやくござらせへました。ヲ、舎弟もきたか。コリヤ舎弟。こんじやうの齋麥はどうしる。もつていかなへか。虫がくふだらす。男「エ、おけつちやア。おらしるまへとおもふかのへ。コノよたものせなアめが。おらどこに、あせ舎弟だのへ。兄「エ、こつつめが。あにをぐせるちやア、舎弟だから舎弟だわ。彌「ハ、ハ、壬生のしやてい／＼が、きいてあきれらア。男「イヤこんたしゆまで、きよたくもなへ。わししやていしたおぼやアなへ。せなアこそふとのこんをいふ。そなたが、伊喜右が畑のこんぼうを、舎弟したこんがあつたわ。兄「アニおれ、こんぼうを、しやていした／＼あア、あんのこんだちやア。男「へ、あんのこんたア、わしハアこれ、しるまへと思ふかのへ。まだ／＼そなたア、去年踊のとき、ざつかけの兵太郎おちいがとこの、ばさまをしやつつかまへて、むたらくしやていしたちやアなへか。兄「アニおどけたこんを、あにこくちやア。男「コノこんぼうしやてい。ばさましやていめが。兄「イヤこつつめ、あんといふ。そのあごたぼね、ぶちいがめてくれうか。ト、やつきとなりつかみあふ。弟はした／＼かにつきとばされて、顔をしかめおき上り。男「アイタ、ハ、金玉をぶつた。アイタ、ハ、ハ、にし、おらが金玉をぶちなくした。北「ハ、ハ、ハ、きんたまがなくなつたとは。男「どこへかいつた。そこらにやアなへか、見てくれさへ。兄「われどこぞへおとしてきたらす。男「インネ今まであつたが、むず見えなへ。彌「おめへうちに、おいて來はしねへか。男「インニヤもつて出たにちがひはなへ。コリヤ／＼せなア。おらがきんたまをどうしたのへ。兄「アニソレなへこんがあるもんか。ドレ／＼エ、それほどあるものを、しかもエ、きたなへきんたまだのへ。男「イヤなかの玉がなくなつた。北「ソリヤ上へつるしあがつたのだらうから、錢を壹文あたまへのつけなせへ、じきによくなら。男「アゼこのふとは、だめこくわのへ。さうしるとあんでよくなる。北「ハテ錢が上ると金がさがる道理だから、つる／＼あがつたきんたまがさがるだらう。ハ、ハ、ハ、彌次さんサアいかうか。彌「ホンニ舎弟さわざが、おもしろかつ

たから、おもはず長休をした。おめへがた、あとでゆるりと喧嘩をしなせへ。わつちらアもういきやせう。ハイお世話になりやした ト、このところをたちいづる。

陰囊のにぶきがうへの争ひはふんどしかぬふりくつにこそ
それより中の澤といふを打すぎ、澁澤の建場にいたる。此所も谷間に只壹軒ありて、六十あまりのむさくろしき親仁不肖く、に茶をくみてきたるを、

おのづから人の心もなまぬるき茶も澁澤の山家そだちは

爰にしばらく休みて立出たるが、すべて此あひだ村里見えず、浅間山のうしろ通にて、樹木さらになく芝はらの峰道なり。はなしも盡て退屈のあまりに、北八「ナントけふはねつかからおもしろくねへみちで、晩のとまりもろくぢやアあるめへから、慰にひとつ趣向がありやす。なんでもふたりが聾と盲になつて、とまつて見ようぢやアねへかい。聾「そいつおもしろ狸だの。ドレ「おれが闇を出さう。なんでも長いほうをとつたものが盲。短いほうをつんぼうときめよう ト、くさをむしりてくじをこしらへると、北八くじをとりながら、北「きめておくことがありやす。だれがあたりにしろ、つんぼうがきこえたふうをするか、めくらがひよつと目をあくかすると、其過怠に、今夜の旅籠や酒のぜにを、ひとりに出さすといふことにしやせう。聾「勿論、サアどれく。イヤすいくのすいとこな。ハ「アおれが長いのだな。北「そんならおめへは盲わつちが聾になつてとまりやせう ト、さうだんきめて、はやくも田しろのしゆくにつけば、はやその日の七ツさがりなれば、このしゆくにとまらんとて、はたごやあるを見つけて、北「サアくむかうのうちへとまらう。おめへ目をふさぎな。ヲ、さうだ。いゝ盲頼だわへ。ドレ手をひいて、いかう ト、やくそくなれば、彌次郎盲目のふうをして、兩はうの目をふさぎ、北八に手を引かれてゆくと、向うよりくるだちん馬のむまかた、馬士「あさま山ではうらなへけれどよエ、ドウくくエ、コノごんじやおまめがソレあ

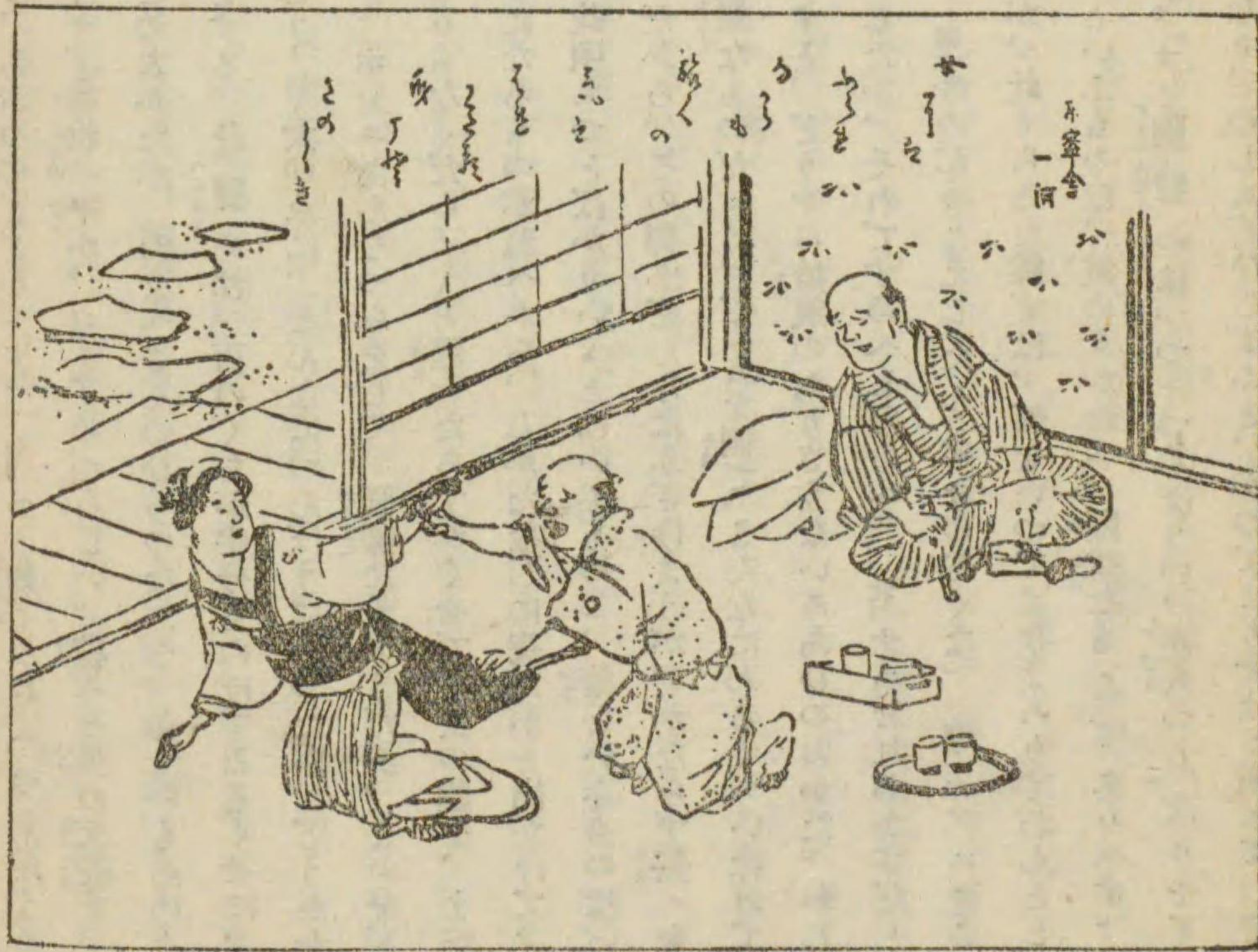
ねへたちのつらア見るとねつれたがらア。うらも氣持がわるくなつた。えいけつだに、ふとつひんねぢつてやれちやア ト、すれちがふ女どもの尻をなでるととびのき、女「エ、手間ざへな。おいてくれさつせへ(女のことゑがすると、おもはず彌次郎目をあきさうにするゆゑ、北「コレ目をあく tonight 奢をかぶるのだが承知かね。聾「ヲツトよし。北「イヤ承知だといつても、あとでいさくさいひつこなしたよ。聾「イヤ手めへこそ、聾てゐながらさうきこえては今夜をおごるか、どうだ。北「ホンニさうだつけ。ソレくはたごやへ来たぞ。モシちとおたのみ申やす ト、はたごやのかどにたてば、うちより、女房「ハイようお出なさりへした。聾「ふたりづれだが、今夜どうぞお頼み申しやす。見なさるとほり、わつち目は不自由なり、このつれの男は、かなつんぼうでござりやすから、御面倒だらうけれど、のうきた八。北「ナニいゝ天氣だといふのか。あしたもこれぢやア、ふるきづかひはねへ。聾「ハ、あのとほりてこまりはてやす。女房「ホンニそれは御不自由でござりやせう。マ



アおあがりなさりへし。ト、此内男たらひに水をもつてくると、ふたりはあしをすゝぎあがる。北八しじう彌次郎の手をひき、おくへとほる。彌今のはこゝの鼻衆か、しろものはどうだ、北人の居ねへときには、きこえてもいゝの。彌さうさ。おいらもこのとほり、目をあいてみらア。北イ、ヤもう、こゝのかゝアの頬はいけねへ。あれでも女かといひさうなつらつきだ。彌そいつは見ねへはうがいゝわへ。北ソレ人がくるぞ。彌ヲツト承知くト、うろたへて目をふさぐうち、かつてより十八九のいろろなむすめ、ちやをふたつもちきたり、彌おちやおあがりなさりへし。北ヲイくこれは御馳走。ソレ彌次さん茶だぞ。エ、それは灰吹だわな。コレ茶碗はこゝだく。まらげへておむすの手でもにぎるめへぞ。のうおむす。とんだうつくしいの。コリヤくあくことはならねへよ。彌ヲ、こゝが辛抱どころだ。彌おたばこの火はありへすか。彌コレ煙草の火はあるかと。北ナニ馬が太鼓をうつ。ドレどこに。彌ヲホ、。彌此男はいつかうなつらうぼうだから、こまりものさ。時におめしの時、い酒があるなら二三合買てくんせへ。彌ハイ大笹の間屋の酒がようござりへす。とつておきへしたからあげへせう。ト、たつてゆく。彌次郎目をそつとあきて、むすめのうしろすがたを見れば、なるほどかほは見ねども、ふうぞくはまんざらでもなきゆゑ、彌コリヤ目があいてゐたくなつたわへ。北ホンニコゝの娘だらうが、なかくおつりきなしろものだ。ト、人のこぬ内なれば、ふたりはねころびながら、ひそくとはなしてゐるうち、やがて今のむすめ、ぜんをもちきたりすると、彌次郎はめをふさぐ。北彌次さんサア飯だ。箸をとつてやらうか。彌イヤよし、ときにモシ酒は來やしたか。彌もつて參りへした。今おつれさまがあがつてお出なさりへす。北ソレさしやせう。手を出しなせへ。ト、あしのおやいびにさかづきをはさみ、彌次郎の手もとへつきつけると、そのまゝさかづきをとりて、彌ヲツトいたゞき女郎衆ありがてへ。北ハ、。彌ヲホ、。彌何をこいつらはわらふのだ。彌アノおつれさまが、いつそのへ。彌なんぞ、ぶしやれをしたか。よし。そのかはり、盃はおれが

はなしはしねへ。彌ナニあつちらでは、おつけのかさで、あがつてござりへす。彌へ、如才のねへつんぼうめだ。北ソレその平を喰て見なせへ。彌なんだドレくヤア香物の平か。コリアめづらしい。糠みそ漬の大根を、平につかふとは、とんだものをくはせる。彌ナア今このおかたが、おまへさんのひらのなかへ、かうのもんのかひかけをいれなさりへした。彌エ、いめへましいことをする。此鹽めは、百のくちが半分もぬけてゐるくせに、わるくふざけてならねへ。姉さん聞なせへ。この男は、とうく女ゆゑに、こんなにつんぼうになつたが、どうか女ゆゑといふと、人聞はいゝが、あんまり夜鷹を買過してさ、ホンニあんなつらをして、強勢に女ずきだが、このをこにはわるい癖があつて、女の腹のうへへのると、ひつきりもなくだらく、と涎をたらすがくせで、女の顔を、よだれだらけにするから、だれもうるさがつて、こいつの相手になるものがねへから、しかたなしに夜たかとお出かけて、うんとこさと瘡をしようつて、ひさしく煩つたが、やうく此頃ちつとばかりいゝとはいふものゝ、瘡といふものはいやなもので、ちつと手をにぎられてもじきさまうつるものだから、この男がどんなにふざけようが、かならず側へもよりなさんな。モン鹽めはどんな顔をしてゐやす。後生樂なものだ。うぬがことを側で、こんなにわるくちいはれても、しらぬが佛だ。ハ、。彌ホンニさういひなせへすと、どうやら瘡氣のありさうないろあひのおかた。わしさつきからをかしげな、わるくさい匂ひがしるとおもへいたが、それですめへしたのへ。北ナニおれがかさだとは。彌コリヤくきこへると、ソレ約束のとほりだぞ。彌今のがきこえたかおきのどくな。彌ナアニきこえるものか。あてずつばうに、きこえたやうなこともあるが、此くらゐな聲では、何をいつてもきよろりくわんとして、馬鹿げた頬をしてゐるだらうね。彌ホンニつんぼうといふものは、氣のきかねへ、間拔なもんでありへす。彌ナントきこえはしめへな。これがきこえてたまるものか。コノ胴鹽のはつつけつんぼうの、死人つんぼうやア、ハ、。彌ヲホ、。ト、此うち酒もつもりとなり、めしもくひしまふと、かつてより女ばう來りて、せ

んのすみたるをてつだひ、とりかたづけて、女房、モシお客さま、お湯へおはひりなさりへし。彌、ライ、湯はどこだ。女房、ハイこつちへお出なさりへし。ト、彌次郎の手をひき、かつてのかたへつれてゆくと、あとにできた八、そつとかのむすめの手をとるに、むすめはびつくりして、にげゆかんとするをとらへて、北、コレサ何もこはがるこたアねへ。みな啞だよ。彌、うそたアあにがのへ。マアこゝをはなしておくれなさりへし。北、イヤ、はなしたくねへ。ナントきこえるだらう。わつちのつんぼうはうそつこさ。つれのやつが盲だから、こつちばかり満足では、つきやひがわるいによつて、ほんの洒落にしたつんぼう。こんなに耳のきこえるが證據。そして瘡氣なぞといつては、微塵もねへをとこ。念のため、あらためて見せよう。コレ見なせへ、兩肌を脱だ所が、どこにひとつ出来ものゝあともねへからだ、きづけへのきんのじもねへから、おめへどうぞ今夜こつそりと、おいらの頼みをきいてくれる氣はねへか。こんなこと、アノどうめくらへはけつして沙汰なし。盲といふ



ものは根性骨のいけねへのものだから、あいつのまへでは、やつぱりつんぼう。おめへのこゝろいきで後にそつとナ。承知か。ト、いやがるをむりにひきよせて、あやなしかける所へ、彌次郎そろりさぐり、ゆよりもどれば、北八何くはぬかほにて、北、彌次さん。ゆはあいてあるか。ドレ爰から裸になつていかう。ト、わざとはだかになりむきずのところを、むすめに見せるつもりに、ふるばへゆくと、彌次郎ばかり目をあきしゆゑ、むすめは肝をつぶし、さうにげゆかうとする。そでをひつとらへて、彌、コレおめへ、びつくりしたらうね。わつちの盲はうそめくら。つれのやつめはほんとうのかなつんぼう。あいつへは沙汰なしだが、わつちはあの聾に附やつてやらうと、ほんの洒落に、今夜ばかりめくらにはなつてゐたが、おめへのこゝろをきくと、顔が見たくても、今までちつと辛抱して、目をあかずにゐたわ。ナントかはいさうぢやアねへかへ。あいつめはほんとうの聾。瘡が耳へ出てあのとほり。今度わつちが草津へつれて行くのだから、かならずあいつめが、どんなことをいつても、相手になりなさんな。そして、わつちが目をあいたことは、つんぼうへはさたなしに、おめへそつと後に來てくれる氣はねへか。コレサ笑つてばかりあてはわからねへ。大かた承知だらうの。ト、何をいふやら、ひとりのみこみ、しなだれかゝれば、むすめはさすがゐるなかそだちにて、かほばかりあかくして、めいわくさうにもぢく、と、やう／＼やつとふりはなし、にげてゆきしあとへ、北八ゆよりかへると、彌次郎はまた目をふさぐ。このうちやどの女ぼう、かいまきとふんをもちきたり、とこをとると、彌次郎もきた八も、こゝろにいちもつあるゆゑ、すぐねて、たがひにはなしもせず、ひとりをはやくねいらせんとて、兩はうとも、はやそらねいりして、くちもきかず、たがひにうぬぼれにて、むすめをしようちさせた氣になり、今くるか／＼と、まぢぼうけにあひ、夜のふけゆくにしたがひ、たびづかれにて、おもはずふたりながら、とろ／＼とねぶりたるが、はや大いびきにて、前後もしらずついに夜あけければ、かつてより女ぼうきたりて、女房、おきやくさま、もうおきなさりへ。モシ、おきやくさま、ト、よびおこされて、ふたりはびつ

りめをさせしが、うろたへてきた入。あいためをまたやつとふさげば、彌次郎もまちがへて、つんぼうの身ぶりを
 して、きよろ／＼としたかほつきして、彌次郎もなだへナニ雨ふる。ハテ降さうな空ではなかつたに。ト、めくらと
 つんぼう入かはりたるもをかしく、女ぼうはふしぎさうに、女房ヤアようべ、つんぼうのお方が、けさア目が見えな
 へて、又めくらだといひなさりへしたお方が、でかい目をむきだして、つんぼうの様にきよろ／＼なさりへすは、
 むすめなへこんだアのへ。ト、いはれてうろたへびつくりして、彌次郎もさうだつて。ト、また目をふさぎたる
 もをかしく、女ぼうはかつてゆくと、ふたりはたがひに心のうちに、ゆうべついねてしまひしを、ほいなく、また
 まちぼうけにあひたるかとおもへば、小ばらもちちて、つらをふくらし、ふとんの上におきあがりながら、北いめ
 へましい、ばんくるはせなめにあつた。ト、ひとりごとをいへば、彌次郎もおなじく口の内に、彌次郎とんだつまら
 ねへことをした。ト、まじめになりて、たがひにあげてはいはず、そろ／＼おきいて、手水をつかふうち、はやぜ
 んをもち出しが、むすめはきたらず、みつちやくちやの下女、きふじをしながら、ふたりのかほを見ては、むしやう
 にわらひをかしかるは、ゆうべのことを、むすめはなしにきよしと見えて、おもひ出しわらひをするにぞ、ふたり
 はたゞ、つらをふくらし、そこ／＼にめしもくひしまひ、はやつんぼうもめくらもやめて、したくし、こゝをたち出
 ける。それよりはやくも、大笹の驛にいたる。此所はいたつて繁昌の地にして、商家あまた軒をつらね、旅籠屋にも
 中尾といへるが殊に賑敷みえたり。

繁昌と土地をえらびて商人の根のはびこれる大笹の宿

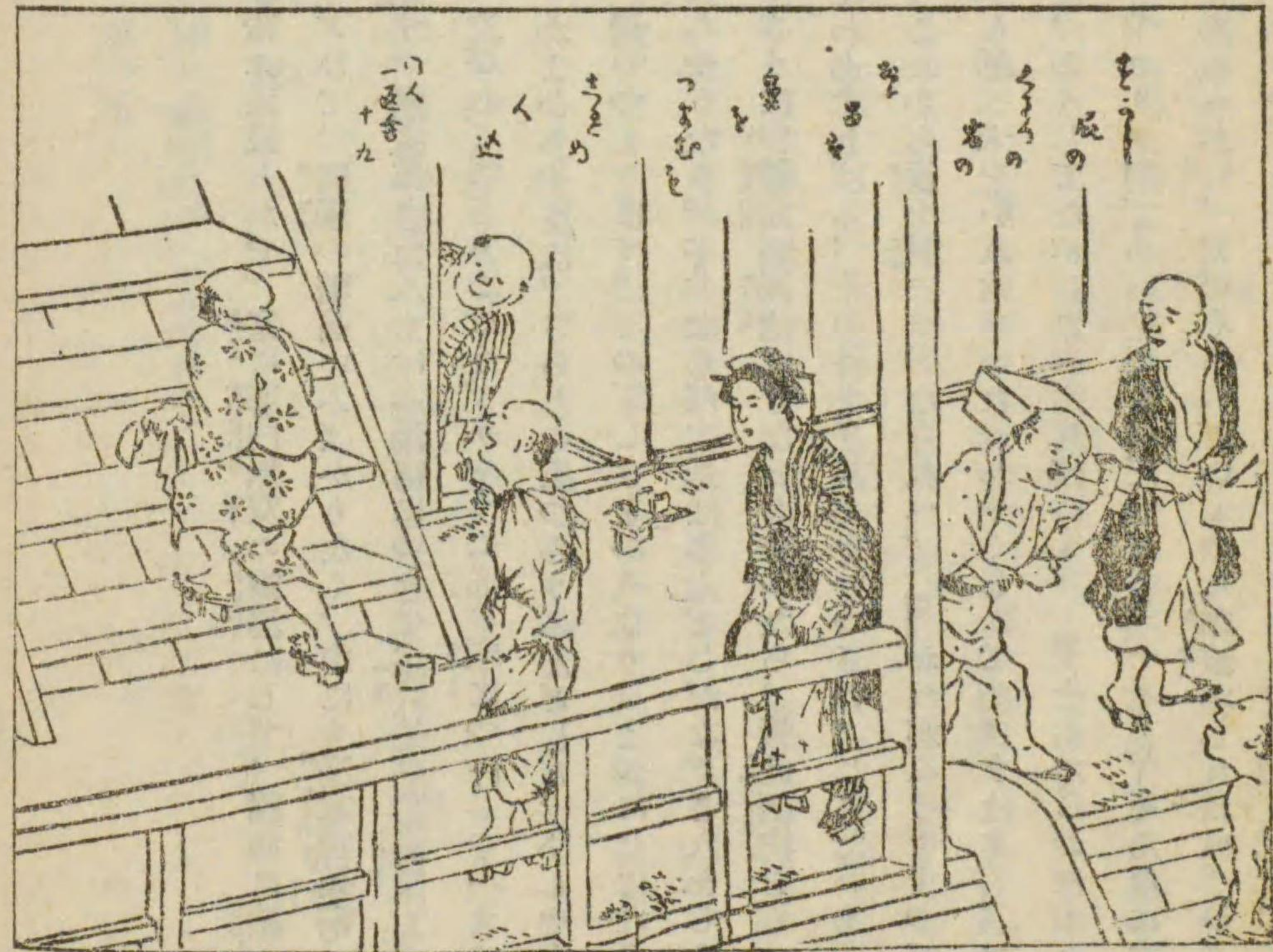
やがて大前、中井などいふところを打すぎ、ほどなく草津の温泉にぞいたりける

生茂る夏の草津に來てみれば今をさかりとひらく湯の花

上草津 續 膝 栗 毛 十編 下冊
 温泉道中

上毛の國草津は、むかし養老年中、行基ぼさつのひらき給ふ温泉とかや。寔に海内無双の靈湯にして、諸病に驗あ
 る事、普く人のしるところなれば、遠近の旅客こゝに入つどひて、宿湯の繁昌いふばかりなく、中にも湯本安兵衛、
 黒岩忠右衛門など、ことに家居花麗を盡し、風流の貴客絶す。彌次郎きた入もけふ湯宿につきて、壺と間を借きり、
 休息してゐるところへ、宿の番頭來りて、ばんとうさぞおきたびれてござりませう。かやうに通ひ帳につけて上ます
 から、御入用の品は何なりとも、仰つけられませう。ト、かよひちやうに、さらしのゑつちうふんどしと、ひしゃく
 とをもつて來り、おいてゆく。ふたりはこゝにしばらく入湯のつもりにて、このざしきをかりきり、こゝにてにたき
 をするゆゑ、その米みそしやうゆ、しよたい道具のかよひちやうなり。北八「なんだ、是はふんどしだな。これをしめ
 て湯へはいると見えた。御丁寧なことの。彌次郎してめつさうに伊勢詣が湯治にきたとおもつたら、皆此柄杓をもつ
 ていくのださうな。ト、此内男ども、ぜんわんなべ、やくわんすりばち、その外まきあぶらいつさい、しよたいまは
 りのものをはこび、水もくみいれてゆくと、北「サア／＼これから飯を焚にやアならねへ。彌次郎おれがみそをすつて
 やらう。手めへ米をとげ。北「よし／＼承知だ。ト、米かし桶へ米をいれ水をいれ、しやくしにてかきまはす。彌次郎
 リヤ無性をやるな。手てとがねへか。北「ナニめんどうな、かうしてながしへすればいゝ。彌次郎「そんなおれもみ
 そをするのは面倒だ。すぐにかきたて汁にしておかう。北「コリヤ鍋でめしをたくのだな。彌次郎「ヤイ／＼そんなに水
 を入れたら粥になるだらう。北「ホンニひさしくめしをたかねへから、どのくらへでいゝやら加減がしれねへ。ひよ
 つと焚ぞこなつたらしかたがねへ。犬にてもくはせず、やつぱりふたりでくつてしまはう。彌次郎「イヤ汁の實がねへ

の。北「なんぞ買て来よう ト、此内らう下をうりあるくあきん人、そばや、そばはようござりますか。お饅頭はへへ。もちや、まんぢう、いまさか、あんころもち。彌來たぞく。汁のみにあんころはどうだ。北「ばかをいふ。それよりか今豆腐屋のこゑがしたつけ。とうふや「あぶらげや。彌「ワイくこまだ。とうふや「ハイハイ油揚げか、何枚あげませう。彌「二三百まいもあつたらよからう。北「エ、そんなに買てどうする。彌「イヤねへからさういつたのだ。とうふや「ハイうれ残りか、たつた三まいござります。北「そんならおもひきつて、一まいかひなせへ。彌「この中でいちばん大ききうなやつにしよう。ソレ北八これを細にきつていれるがい。北「ナアニめんだうな、ふたつに引ききさへすりやア、ふたりまへだ。彌「ソレ鍋が煮こぼれる。はやくそこへいれねへか。北「エ、飯のなかへあぶらげをか。彌「まだめしはできねへか、がうぎにくさいぜ。北「ホンニいつのまにやらめしになつた。彌「すぐにその鍋へ汁をしかけにやアならねへから、飯はおはちへ其儘でぶんまけて



しまへ。北「ソレくイヤこれはきたねへおはちだ。埃だらけになつてあらア。彌次さん、ちよつとふいてくんなせへ。彌「ワイこまへよこせ。コリヤふくものがねへ。今きたあつちうふんどし、まだ新しいのだから、これでふかうか。北「ヲツトよし。ドレめしをうつさうか。ヤアくこいつはつまらねへ。米があんまりすくなかつた。みなせへ、めしがみんなまつくろになつて、鍋へこげついてしまつた。彌「ソリヤこびりついて急にはうつされめへから、なべからすぐにすくつてくはう。北「イヤそれぢやア、汁をにることがならねへ。ア、まよ、この摺鉢を火へかけて、すぐにこれで汁を煮ようか。彌「なるほど、土瓶で茶をにるも、おなじ理屈だ。摺鉢にてもよからう。北「それそれ。ヲヤ味噌がまだすつてねへの。彌「イヤ豆のところばかり摺子木でつきつぶしておいたらそれでいよ。北「そんならさうか ト、火のもゆるうへ、すぐにすりばちをかけ、なべのふたをすりばちのふたにして、汁をにかけふおつきかいな。わしやこのお隣のもんぢやさかい、お心安うおたのみ申すわいな。彌「ハイそれはおたげへ。サア、いづくおあがりなせへ。お國はどこでござりやす。上方、かみがたておますわいな。おえど見物に来て、こまは名湯ぢやといふこつちやさかい、こちへまはりましたわいな。ヤアすり鉢焚なざるは何ぢやいな。北「これはおつけをにるのさ。上方「イヤえらいく摺鉢で汁たくとはめづらしい。わしや今度遠州の秋葉へいたが、イヤあこの臺所で汁たくを見て、わしやとつともうあきたわいな。その鍋のいつかいは、酒屋の五尺桶よりもまだえらいので、汁たいてぢやあつたが、摺鉢もいつかいはいくつもならべて、大勢で味噌すりをと、そのすつたのを荷ひではこびをつけて、鍋のなかへあけるわいな。あないな仰山なこと見たことがないわいな。北「イヤ江戸では、そんなことぢやアござりやせん。尤お屋敷がたては大せい御家來衆があつても、皆お長屋といふにめい、籠があつて焚からい、が、越後屋だの白木屋だのといふ呉服屋みなさつたであらう。何百人くらすやら、それでもめしはひとつ釜でたくと

いふものだから、そのかまのたいそうさ、とはうもねへやつへ、といだ米を、これも荷ひではこんでしかけやすが、その水加減をするのが奇妙なものさ。上方なるほど、おつきな釜なら水かげんがむづかしがる。どうしてするぞいな。北「ナニ雑作もねへことさ。裸になつてかまの中をおよいであるいて、水かげんをしやすのさ。ト、はなしにうかれてゐるうち、すりばちからむしやうに、汗がふきこぼるゝゆゑ、北「これはしたり。ト、うろたへ、すりばちのふたとつて見れば、汗はたいがいふきこぼれて、すこしばかりの汗、そこにいりつき、すりばちのそこ、ジャ〜といひしが、丸いなりにすつぽりとぬけて、火のなかへおちると、ジウ〜。北「アツ、コリヤ大變〜。上方ハ、わしや、そないなこつちやあると、おもうたわいな。彌「エ、こゝらまで灰だらけになつたエ、〜プツプ〜。上方「イヤモやくたいぢや。おまいがたのふり見なされ、眞白になつたわいな。北「エ、やけどはする、澤山だ。つまらねへことをした。ト、そこらはきよせて、ぜんわんも灰だらけになりたるをはたき、北「しかたがねへ。さあ〜アめしばかり茶漬にでもしよう。彌「その飯もそんなにこげては、にがくてくはれめへが、それでも是非がねへ。上方「わしとこにえいかうもんがあるさかい、上ゲよわいな。ト、たつてゆき、やがてをここに、ごぼうのみそづけをもたせてよこせしゆゑ、それをさいにして、ちやづけをくひしまひ、あとのとりかたづけをしながら、すり鉢に汗をたくとは百の口ぬけたる底のみそをつけたり

それよりふたり、打連て出かけ見るに、湯壺あまたある中に、薬師の瀧湯天狗の瀧湯といふが、ことに應驗ありとて浴する人おびたし。

杓子より薬師の利生有がたき人の病をすくふ瀧の湯

その外熱のゆ、脚氣のゆ、わたのゆなどいふあり。またむかし頼朝公の浴し給ふといふ、御座のゆといふもあり。所見物して湯宿に戻り、休息しけるうち、彌次郎手水にゆきしが、しばらくして座鋪へかへり、彌「コレ、手めへに

も見せたかつた。今おいらアおもしろいものを見て来たわ。北「なにを〜。彌「イヤさつき爰へ来しなに、ちらと見た年増のあだなやつよ。北「それがどうした。彌「おいらが今こゝの雪陣へいつたら、其隣りのせつちんに、かの年増めがはいつてゐをつたが、ちやうどしきりのはめの板に、筋穴があつたから、ふつと覗いて見たら、としまが大きな尻をひんまくつた所が、うしろのはうからぢきに鼻のさきへ、正面に見るといふものだから、こいつはおもしろいとおもいれ見たうへ、紙を引裂て長くこよりをこしらへて、そのふしあなからそつと出して、あしきのとつさきをちよい〜とつゝいたら、振返つて見て、イヤモ肝をつぶすめ〜ことか、まつくらさんばう狼狽て、さう〜かけ出していきやアがつたわ。がうてきにをかしかつた。ハ、ハ、ハ。北「エ、そいつはおもしろかつたらう。おらも見やりましたかつたに、残念な。ト、此うち、はやその日もくれかたとなれば、やどより、かし夜ぐをかりて打ふしけるが、たびづかれにて、そのまゝいびきとなり、たわいもなく打ふしける。そとは夜に入れども、往來の人あしげく、唄淨留理やら、いたこ新内、麥つきうたもとりまぜて、按摩の笛、そばうりの聲ひきもきらず、座敷〜には三味線のおと賑しきも、次第に更わたりて、後には軒の聲のみ寝耳にひびき、彌次郎ふと目をさませば、はや鳥の告わたるにぞ、彌「コリヤ〜きた八〜、もうおきて、茶でも煮てくれねへか。北「ア、ウ、今朝はおめへおきるがいよ。彌「そんなら拳でいかう。まけたものがおきて茶をにるのだぞ。合點か。北「ヲ、承知〜。サアきなせへ。たつた一拳勝負だぞ。ソレさんな。彌「りやん。北「りう〜。彌「すう〜。ソリヤかつたぞ〜。北「エ、しかたがねへ。ごふはらなことをした。ト、しやうことなしにおき、手水をつかひ、火をたきつけ、どびんに水を入れてわかしかける。此内おくのかたより、三十ばかりのいきな女、ねまきのまゝほそおびをしめて、らう下をとほる。ざしきの入口の戸、きた八あけはなししておきしゆゑ、彌次郎ねてゐながら、この女のとほるを見つけて、彌「アレ〜きのふのとしまめがとほつた。大かたせつちんへいくのだらう。またあとからいつて覗てやらうか。北「イヤおめへはき

のふ見たからいゝぢやアねへかへ。けさはおれが見てくる。ト、火をたきつけおきて、かけ出してゆく。彌次郎はそのまゝ又ふとんをかぶりてねかける。きた八せつちんへゆきて見れば、女はさきへはいりあるやうすゆゑ、きた八そのとなりのせつちんへ、はいりてみれば、なるほどはめの板に、ふしあなあり。ちやうどのぞき見るだけの穴にて、きた八いきをころし、のぞき見るうち、又ひとりおくのかたより女きたりて、さきに女のはいりあるせつちんの戸をあけさうにして、女「ホイこれはしたり。ふさがつてゐるさうだ。ト、そとにたつてゐるうち、せつちんの内より、さきのとしま女、「おちんさんか。今に出やすよ。ちん「ヲ、おちんさんか。ナニゆるりつとしないさい。ちん「ようべのはなしはどうした。ちん「ホンニようべの人が今きて、さういつきやア、だん「ぼうさんが、がいに氣あひのわるいで、はなしのこたア、おやしてしまつたといつきやアが、どうだがな、かうだがな、わしモウ肝がいらぬわい。ト、これは上しうものと見ゆることばつきなり。せつちんの内にて、ちん「えいかにしないさい。あの人のはだめべいいつて、ひとをちよつくらかやすことが上手だから、だまくらかされべいと、わしおまいがいげぢないはむし。ちん「ホンニわしもナア、だん「ぼうさんがおぢい人だと、藝もないこんだが、なるい人だからどうしたらよかんべいやら。ナアおこらさんむく。エ、人にべいくちをきかせて、なんだちうがな。おちんさんむし。ト、いきせいはつて、はなしかくれど、せつちんのうちにはあいさつもせず、たゞウーンといけむこゑして、しばらくしてトントいふと、ちん「ホンニさうでございさア。ト、此内ふしあなからのぞいてゐるきた八、をかしくなつてふき出せば、女ががつきゆびさきにてふしあなから、きた八の目をぐつとつくと、北「アイタ、アイタ、こちんちもない。どこのやらうめか、じん「だいいぢないものゝやうに、人のまたぐらをのぞきやアがら。ト、此女も上しうものゆゑきがつよく大ごゑをあげて、わめきながらせつちんを出ると、ちん「だれだ、どうした。ちん「きゝなさい。となりのせつちんのふしあなから、きんのふもなんだちうがな、ふしあなからつん出して、わしの尻をつまきやアがつた。ヤイどんなやらうだ。

つらを見てやるべい。はやく出てうせちやア。ト、わめきたつるこゑにこの女どものつれとみえて、おくざしきよりだうらくものらしき、大のをとこふたりはしり來り、このやうすをきゝて、そいつひきずり出してぶちころせ、ときわぎたつを、きた八はせつちんのうちにもやらす、もしもこゝへふみこんできたらばと、身がまへしてだまりかへつてゐる。このさわぎを彌次郎はねてゐてしらす。となりざしきの上がたものきゝつけて、あわてはしりきたりて、上方「モシなんてござりますぞいな。ちん「イヤきんのふ、たしかこのうちへ來たやらうかとおもひまさア。わしが用たしにいつてゐるとなりの雪陣からのぞきやアがつて、がいにわらやアがつたから、ひきずり出して恥頼アかゝせてやるべいとふのでございさア。上方「ソリヤとひやうもないこつちやが、マア／＼かんにしなされ。そしてその人はどこぢやぞいな。ちん「やつぱり、あそこのせつちんにゐて、出へえないでこしぬけやらうめが。ヤイこゝへ出てうせちやア。男「エ、肝がにえかへらア、ひきずり出すべい。上方「マア／＼まちなされ／＼。こないにひとつうちかたにをつて、わしどもゝおきのどくぢや。どうなとおはらのゐるやうにならさかい。ト、立さわぐ人々をやう／＼なだめて、きた八のゐるせつちんのまへへゆき、上方「モシちとおゆるしなされ。北「ハイどなた。上方「わしぢやわいな。ここあけてもえいかいな。北「ヲヤどなたかとおもつた。サア／＼こちらへ。上方「イヤちとおはなしがあるが、やはり爰でようござります。北「それでもあんまりはしぢかな、ちとくさくともこれへおはいりなせへまし。コリヤ雪陣のなかくて、お茶もあげられねへ。上方「イヤ／＼お構ひなさるな。外のこつちやないが、おまへあの女中さまの、北「ヲツトもうこれのこらずきいてをりやした。イヤはや面目次第もござりやせぬ。男「エ、なまぬるきたい。サアやらうめ、出てうせちやア。上方「コレサえいわいな／＼。北「ナニこいつらア、さつきにからおれがだまつてありやア、とんだ猿松めらだ。こつちやア、忝なくもえどつ子だぞ。神田の八丁堀ぢやア、ちつとゝやつと、けぶつてへ男だわ。男「エ、だめべいきあがれ。おれも灘川の馬市ぢやア、へこたれたことのないをとこだ。ト、上がったものおし

のけ、とんでかゝれば、きた八もきかぬきになり、つかみあひ、大さわぎとなる。このどさくさに彌次郎めをさまし、きた八のこゑときくより、はねおきてとび出し、あひてのをとをつきのけ、きた八をつれてざしきへかへると、おこらつてはいり、こらモシおまいのおつれか。そのやらうめはふといやつてございさア。人の用たしにいつてゐるところをのぞきやアがつたうへに、きんのふはその覗いた穴から、わしの尻をつまきやアがつたはむし。北ナニきのふつまいたはおいらぢやアねへ。コレこの人だ。彌コリヤ〜とんだことをいふ。こらホニ二人さまにかづけるこたアない。うぬにちがひはないぢやア。彌マア〜なんにしろ了簡してくんなせへ。こいつは馬鹿でござりやす。ト、いろ〜此女をなだめるうち、らう下にて上がったもの、さきのをとこどもをさまさまとおししづめ、やう〜このいさくさはすみたるが、きた八目をつまかれて、いためたるうへ、ぐわいぶんをかき、ぶつ〜とくちのうちにてごごとをいふ。彌次郎をかしく打わらへば、北人のしたことまで、おい



らがしよつてつまらねへ。とんだめにあつた。ト、つぶやきながら、ぜんだてしてふたりはやう〜あざめしをくひしまひ、うちつれて、そとのたきゆへ出かけゆくとして、

波目板の節の穴よりおこりたるいさかひとてか丸うすみたり

(たきのゆつぽには、大せい入こみ、おもひおもひのはなし、めい〜おどけまじりに、くちから出はうだいのなかに、三四人ひとむれのうち、ひとりのをとこがいふをきけば、コレ十兵衛さん。せかいにはたはけなやつもあるものだ。わしらが宿でさつき喧嘩があつたが、イヤはや、はらすぢをよつたことさ。なにが女の雪陣へいくたびごとに、その隣のせつちんへいつては、ふしあなからどこやらを覗いてたのしむやつがあつて、あげくのはてに氣のつよい女めが、そのをとこをひつつかまへて、イヤモぶつたほどに〜、目をつまきつぶされ、足腰がぬけて、後にはほえづらかはひて、業恥をはたきやアがつたが、とんだをかしかつた。ト、きた八がそこに、ゆにいりてゐるともしらず、見できたやうに、尾に尾をつけてはなすをきいてゐるをとこ、おなじやどにゐるものと見え、せんこくのいさくさを見たるものにや、きた八のかほを見おぼえてゐると見え、ふりかへりきた八を見つけてにはかにこゑになりて、コレしづかにはなしなさい。そののぞいた人が、アレ〜あそこに。ト、さゝやけば、ぼつたりはなしはやみて、みなみなきよろつき、ドレ〜どこに〜。アノ色の眞黒な鼻のひらいたい男か。ハ、なるほどまぬけらしいつらつきだわへ。ト、めい〜きた八のかほをのぞくに、いよ〜ぐわいぶんわらく、あなへもはいりたきこゝろもちに、ふさぎあたるが、どうもこゝにゐたゝまれず、こばらもたてども、またはちのうはぬりとれうけんし、さう〜にしてゆからあがり、こそ〜とにげてかへりける。

鼻もちのならぬ喧嘩と雪陣のくさつ中にて評判ぞする

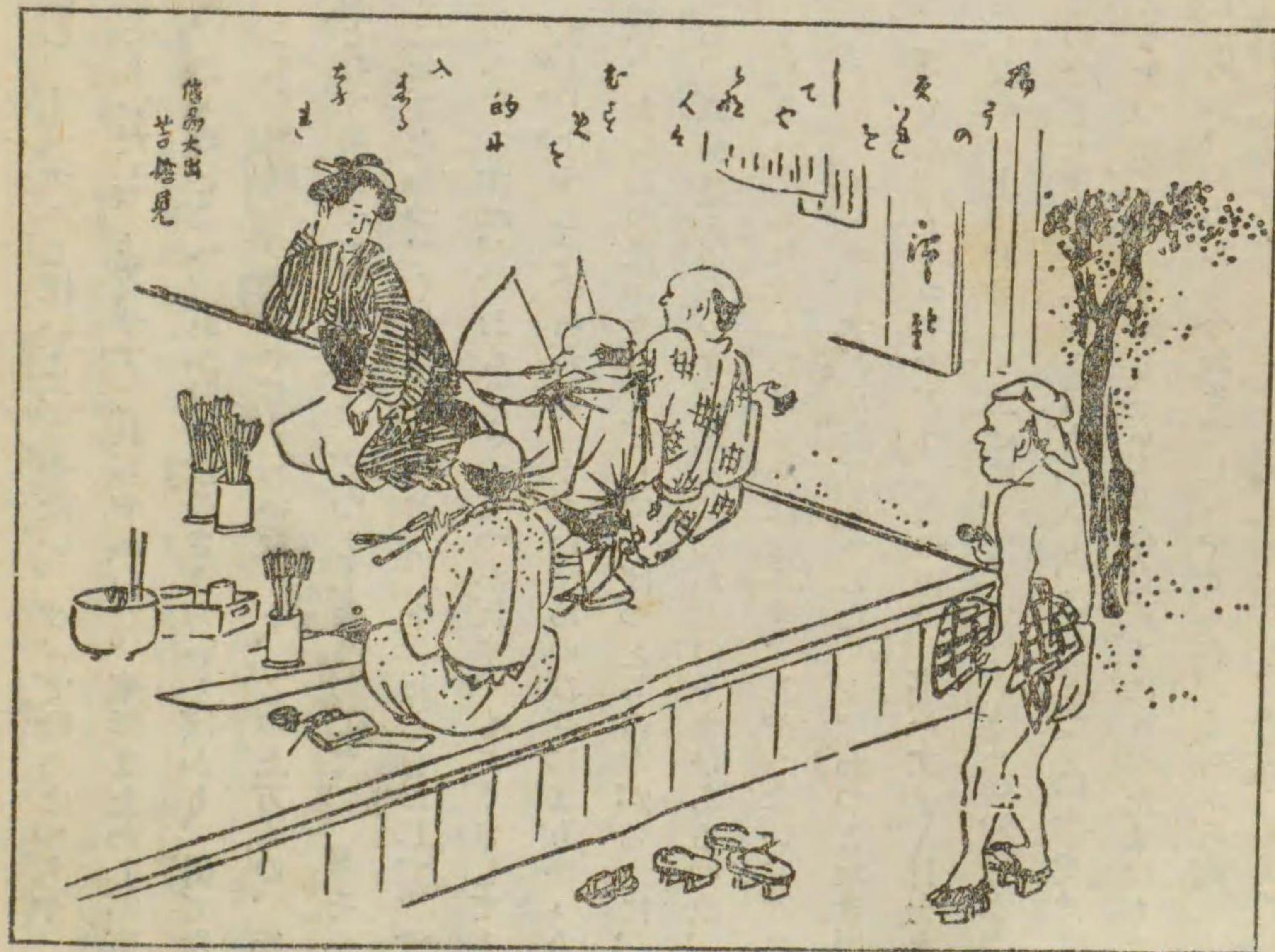
さてとなりざしきの上方もの取持にて、おくのとしま女ときた八に中直りのさかづきさせんと、肴の用意して、彌次

郎兵衛をはじめ、双方を招きよせて、はやさかづきを出しかけ、上方「モシおとなりの北さんとやら、わしやもうこゝに二廻りもをるもんぢやさかい、おくの此おかたともえらうねんごろになつて、見ん顔もでけず、おたがひに旅といふものは、お心安いがえいさかい。そこで今宵ちよいと一ツばいやるつもりで、この催ぢやが、えいさいな、マアなんぢやあると、わしはじめまじよわい。北「イヤモ大きに御苦勞をかけて、おきのどくなことだ。上方「ナンノイナ、いつたい金毘羅の桐屋でなど、一ツくわいやるかとおもうたが、ちかうて難波やがえいさかい、この肴言付たが、見なされ、あこの料理は草津一ばんぢやわいな。ときにおさかづき、おまへにあぎよわいな。北「まづあのおかみさまへ。こら「マアおあがりなさいせう。わしおまいからいなきたうございませう。北「そんならはどかりだがあげやせう。ト、これよりさかもりはじまり、このとしま女も、なるくちと見え、さいつおさへつ、だん／＼とまはり、そろそろふざけ出して、彌次「モシおかみさん、さういつても此やらうめは、冥加にかなつたやつさ。おめへの尻なら、ありやうはわつちらも、のぞいて見たかつたね。北「ナニ覗くの覗かねへのと、きつねぢやアあるめへし、さいの／＼がきいてあきれらア。ト、しだいにさけもまはりたる所へ、この上がったものゝなじみの、やうきうばのむすめ、十六七にしてしぶかはのむけたしろもの、あんまのりのべく市といふとつれだちてきたり、おすめ、だんなさん、今きいた。可市「エヘン／＼可市法師お見まひ。上方「ヲ、おむす、ようごんした。サア／＼わしのわきへごんせ。時にみなさまへ御ひろういたしましたしよ。この支妻はめたくし大のいろごと、ちい請にくいこともござりませう。其段は御用捨あつて、ゆる／＼御一覽のほどをこひねがひ奉ります。まづは太夫、いちやつきにかゝります。ハリトウ／＼ト、むすめのふところへ手をいれなとして、しなだれかゝると、嬢「アレサおよしなさりへせう。わし御みようだむし。北「こいつはなるほどうけにくい。可市「サア／＼わしひとつ踊るべい。そこらのものおつかたつてくんさいちやア。えゝかえゝかをどるぞ／＼。今度長崎から太鼓もちがござつた。ひとりやちんばて、ひとりとはがんち、申のひとりはめつぽ

にせいがたかいな。あとのひとりはめつぽにせいがひくいな。サマテンレツ／＼。上方「ヤンヤ／＼。彌「なか／＼をしやう藝者だわへ。可市「まだわしに奇妙なことがあるちやア。なんでも此うちの人をあるかせて、その足おとて、コリヤアだれだといふことを、あてゝ見せるがどうでございませう。彌「コリヤおもしろい。サアそこへひとりづゝ出て、あてさせなせへ。可市「サア／＼來なさい／＼。ト、ひきさがつて、両手をくみこくびをかたふけ、かんがへあると、まづ一ばんに上がったもの、ずつとたつてべく市のまへをあるくと、可市「ハ、ア此人のあるきぶりは、小股にしてあしどりに不同あり。これはなんでも、ひさしくこゝに湯治をして、きんたまのたゞれてある人と見えたから、上がったのだんはうにちがひごとはあるまい／＼。上方「ハ、ハ、コリヤやうあてくさつた。えらい／＼。サア／＼このつきぢや。ト、やうきうばのむすめを、そこへつき出してあゆますると、またかんがへ、可市「ムウコレハちよ／＼とあしのはこびのかるいは、まへにぶらさがつてあるものゝない證據、をんなにはちがひごとはないが、指さきはかるくてかゝとに地ひゞきのするは、うしろに貫目のあるやつ、コリヤ尻のでつかい楊弓場のおねやだな。彌「イヤもうかんしんかんしん。北「サアこんどのをあてゝ見な。可市「だれでももつてこいちやア。とつばづしたらおめにやアかゝらない。ト、まぢかまへてゐるはなのさきへ、北八しりをまくりあげてつきつけ、おとなしにふたつまですかすと、べくいちはなをかゝへて、可市「ヤア／＼コリヤ鼻かもげるわ／＼。さて／＼たしなみのおぞい人。口中の息のくさいは、肺の臓に病あるか、イヤ／＼おもひつけた。コリヤ瘡氣のある人づらア。このなかにかさつかきはだれであんべい。どうもコリヤずだいな。ト、かんがへるほど、みな／＼をかしく、ざしきのうごくほど大わらひして、おくのとしまをんな、こら「コリヤアありがたうございませう。わしむす酔て、もうそべりたくくなりました。おいとまをいただきたうございませう。上方「マアえいわいな。わしあすはたちますさかい。おなごりぢやに。ト、止てもとまらずにげかへる。彌次郎も大なまゑひとなりて、彌「としまが歸つたら、わつちもおひらきにいたしやせう。上方「コレまぢなざ

れ。わしやあすたつさかい、こないにおこゝろやすうなつたもの、かさねて書状でもあげるためぢや。えどのおとこ
 ろはどつちやぞいな。彌「ハイ神田の八丁ぼり、とちめんや彌次郎兵衛といつちやアかくれはござりやせん。商賣は
 質兩替、家内わづか三四十人もくらしやすから、わつちがこんな旅へ出るといふと、出入の上下のものがお駕にはわ
 たしがまありやせう。イヤ兩掛けもちはわたしにと、仰山になつて、結句たのしみになりやせぬから、いつも旅へは
 この男ばかりつれて、なりもこんなふうをして手軽く氣儘にあるきやすから、金もそんなにはいりやせぬが、今度は
 伊勢から、こんびら安藝の宮嶋まで行やして、それから京大坂の逗留に、おもひの外爲替のかねも壹文なしにつかひ
 やして、かへりはみじめ寒念佛な道中、しかし江戸へはもうわづかだからこまりもしやせぬが、ちとふところが淋し
 くなつたから、實はふさぎのむしでゐやすのさ。ト、いふはこの上方の大ふうかねをつかふやうすを見て、なんぞ
 のはずみにかねでもかりてやらうかと、あつかましくもそのまへおきをいふなり。上方「ナンノそれ、かまふことか
 な。かね入用ならなんぼなど、えどの店へかはせにして、わし取かへてあげよわいな。抑われら太平樂の巻ものいふ
 ぢやないが、今度えどへ何も用はないが、わざ／＼金遣ひにいたをとこ、そないなことにひけとるのぢやないわい。
 のうおむす。ト、いひさして、むすめのひぎにもたれかゝりねいりかゝる。彌次郎はかみがたものゝ太平らくをき
 て、これはできさうなものと、心のうちによるこび、又手じやくにてひつかけ、大醉となりて目をすゑ、はやしたも
 まはらず、彌「おもしろくもねへぞ。おくのとしまめはにげてしまふ。このむすめはこの馬の骨か牛のほねかしら
 ねへが、そんなになにも、こゝのやどろくといちやつれてくれるすぢにやアあたねへ。ほんのこつたが、おらアそ
 んなことを見てだまつてゐる男ぢやアねへが、めつたにやアいはねへ。またいはねへといつたらどうするへ。言分が
 あるか、イヤあるめへ。のうきた入／＼、ヤアこいつ、もうたふれたな。いゝわ。おれもこゝへおつたふれてやるべ
 い。ト、何をいふやら、ひとりしやべりくたびれ、そのまゝたふれてたわひなし。彌「モシ／＼だんなさま、風をひ

きまさア、コレナおきなさりへせう。ト、ゆすりおこさ
 れて目をこすり、上方「ヲ、たれぢやいな。ヤアいつのま
 に来てぢや。わが身今宵はようこまいかとおもうて、え
 らい辛氣であつたが、よう来てくれた。わしや嬉しいわ
 いな。ト、むちうになりしなだれかゝる。いつたいこの
 上がたものは、大家のばんとうをつとめしものにて、は
 や六十あまりのおやぢなれども、かねもちと見え。こゝ
 へきてもさうおうにかねをつかひ、やうきう見せのこの
 むすめにはまりこみ、このあひだよりはなげをよまれて、
 のろくなりたるに、むすめもさるものにてじよさいなく、
 「コレナおまいさんわしつばいかへ。上方「つばいとほな
 んのこつちやしらんが、わしやわが身がかはゆうてく
 ならんわいな。彌「そんたら約束のゆかたと黒縷子の帯
 かつておくれなさりへせう。上方「ヲ、かうてやる。なん
 ぼなど金やろさかい、きのふわしのいふたもの、かきや
 るかいな。彌「かけたアなんのことだむし。上方「ソレ起
 證のことぢやわい。彌「きしようたアわし、しりましな
 へ。上方「ハテわしかいておいたさかい、それへわが身指



きつて血をつけるのぢや。 鵜エ、そんな、わしこはいむし。上方、ナニこはいこつちやない。ツイでけるこつちやト、かねてかきおきしと見え、かみいれよりかいたものを取りだし、上方、サアこれぢやわいな。來年またわしが來て、わが身をつれていぬるさかい、かためのきしようぢや。こゝのどこへ、わが身の指のさきちいとばかり、針でなとつゝいて血をつければえいさかい。それともいやなら、こちも黒繩子の帯いやぢやわいな。ト、この上方もの、年にふそくもなくまじめになり、わうじやうづくめにするむすめはそれしやにて、ぐつとしようちして、鵜そんならわし、うたがはれないためだ。さうしたら、ほんとうにおびをかつてくれなさりへせう。ト、ねんをおして、すずりばこにある小かたなを出してあてがはれ、指のさきをつかうとすれど、おもひきつてつかれず、もぢくさしてゐると、上方、ドレこちおこさんせ。わしいとないやうに、あんどじようしてやろわい。ト、むすめのひざによりかゝりながら、小ゆびのさきをこがたなにて、ちよいとつつきしが、おもひのほかきりすごして、ばつとちのながるゝに、むすめはさわがずちをふき、手におさへるうち、このおやぢ、血を見るとぢきに起るてんかんのやまひあるゆゑ、たちまちそりかへり、上方、ウ、ン、ト、目をみつめ、うしろへたふれ、くちよりあはをふき、しやうたいなければ、むすめはおどろきふるへごゑをして、鵜だんなさまア、エ、コリヤどうなさりへした。ト、わつとなき出すこゑに、そこにたふれたりし彌次郎きた八めをさまし、彌なんだ、コリヤどうしたのだ。北、ヤア、目をまはしたのか。ドレ、ト、そこにあるどびんのちやをふくみて、上がたものゝかほに、ふきかけ、よびいけても、しやうたいなく、さまぐとかいほうしてゐるうち、やどの女ざしきのまへをとほりかゝり、このさわぎにたちより、此やうすをやどへしらせけるゆゑ、宿のていしゆ、ばんとうをつれてはしり來り、ていしゆ、今女どもにうけたまはりました。コリヤなんとなさつたのでござります。彌どうしたのか、わつちも今おきてしりやせんが、くちから泡をふいたやうすでは癩癩と見えました。何にしる醫者さまはござりやすか。さつきからいろ／＼して見やすが、さつぱり

性氣がつきやせぬ。北、醫者さまより、おてらへはやくさういつてやるがよからう。ていしゆ、さればどちらへひとをやりませうか。ばんとう、どちらにでもはやく間にあふはうがようござりませう。わたしがひとはしりいつてまゐりませう。ト、ばんとうはかけ出してゆく。そのうちていしゆかけゆきて、ふくろもぐさをもつてきたり、ていしゆ、そのうち灸でもすゑて見ませう。鵜ア、灸は御みよになさりへし。けふはたしか血忌だといひましきやア、彌、ナニこんなときに、ちいみも犬のくそもかまはずと、北八おもいれすゑて見ろへ。北、よし。とは云たが、コリヤアだれにすゑるのだ。ていしゆ、ホンニたれにすゑたがよからうか。彌、しれたこと、この目をまはした人にさ。ていしゆ、ソレ／＼わたしそこへはとんと氣がつかなんだ。ト、もぐさを大きくひねりて、すゑかける所へ、ばんとうかへり、ばんとう、ヤレヤレえ、所てひよつくり胸脈寺さまにお目にかゝつたから、今こゝへおつれ申しました。コレおむす、さゆでもわかしてくれちやア。彌、おてらさまがござるのかへ。ソリヤあんまり早手廻しだ。ていしゆ、イヤそのをしやうさまは醫者もなさるで、いきる病人は藥でいかす、しんだらすぐに回向してやらうといふ調法なおかたでござります。ト、此内かのをしやうねずみのもめんあはせに、あさのころもきて、すつとはいると、ていしゆ、これはをしやうさま、御苦勞でござります。をしやう、ゆるさつせへ。コリヤ旅のお人さうな。なんちうさつせへたのでござる。彌、どうしたのかぞんじやせぬが、マアてんかんと見えやした。をしやう、ハ、ア、輕業の太鼓か。てんかん、ハ、ハ、ハ、併しそんなればきづかひなことは、ない／＼つぶり。ていしゆ、マアおしやれなさらずと、病人を見て下さりまし。をしやう、ワイ、しようちのはまで鯛がとれる。北、コリヤとんだをしやうさまだ。をしやう、わしはあたまの丸からおもひつけて、兩用ひに醫者もやるが、たとへ病人をもちろした所が、やつぱりわしの手にかゝつて、どつちでも損はいかないといふもんだから、がいに骨ををつて病人をなほさうとおもはないで、こんな氣のもめないことはござらない。ときに御ていしゆ、ことしはむずいけましない。去年は豆も一升蒔て七升べいとるし、芋も十俵べいとりましたが、ことしはこ

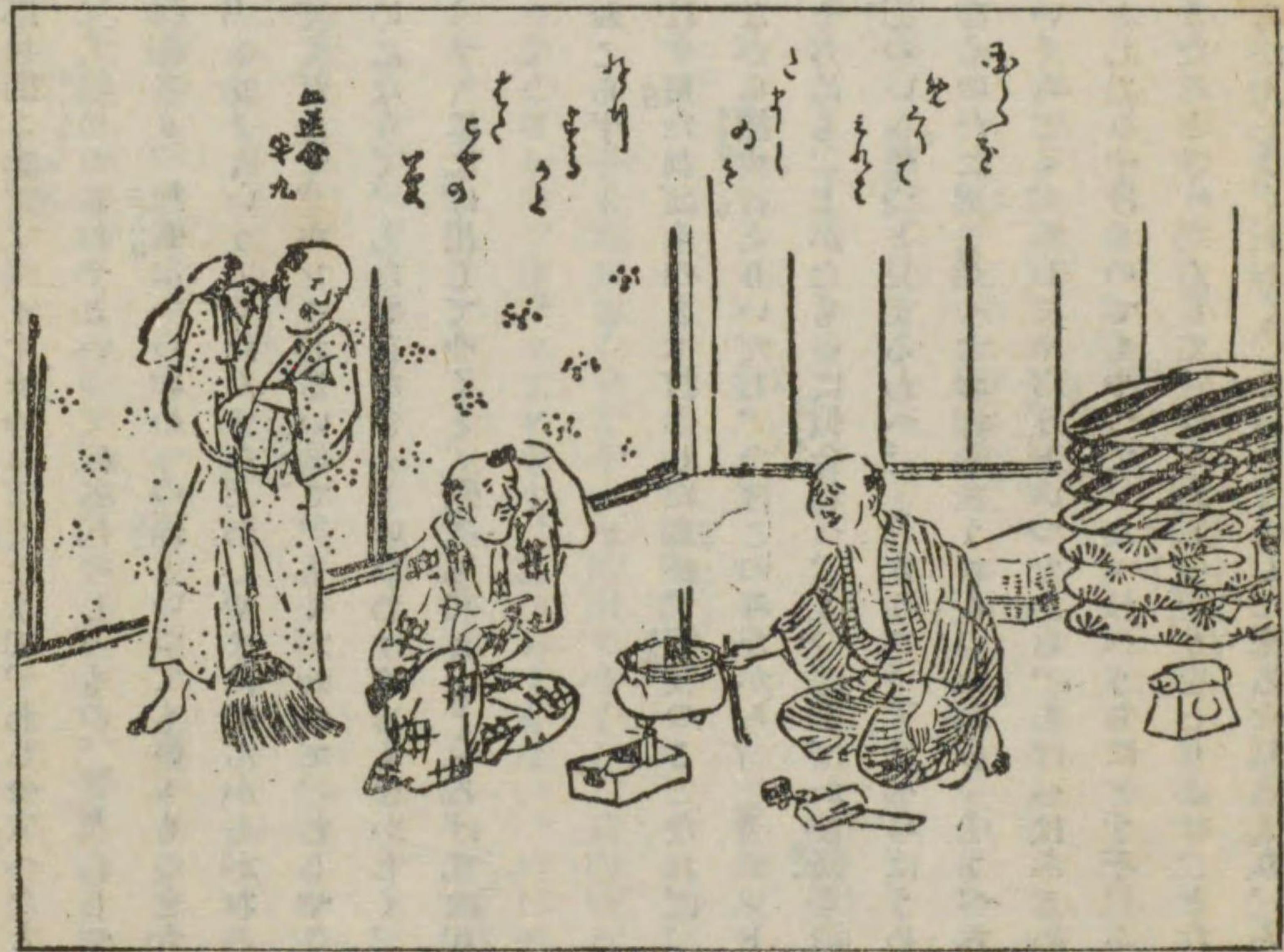
んぢうの雨で、豆の根はくさる、麥ははえたまんまで、埒くちはござらない。ていしゆ「イヤそれよりかどうぞはやく、病人を見て下さりまし。をしやう見ますとも」。そのみますでおもひつけた。きんのふ瀬畑の團十にいきあつたが、あつちでもさつまいもは、むずいかないといふこんでござらア。ていしゆ「モシおはなしはえいかにして、どうぞ病人を。をしやうハテせはしない人でござらア。ていしゆ「それでもおそくなるほど病人が死きりませう。をしやうしんだらなほえいぢやないか。彌「イヤとはうもねへ。ひきつけた病人をかゝへて氣の長いお醫者様だ。ト、此内病人すこし手あしをうごかし、やがてウン／＼とうめきだせば、ていしゆ「ヤマ／＼氣がついたさうな。ばんとう「おきやくさまア／＼。上方「ア、ウ、。彌「サア／＼もういゝぞ／＼。ていしゆ「をしやうさま。もうきがつかまりましたから、おまい御苦勞ながらおかへりなさりまし。をしやう「コリヤだめをした。彌「代とるか施物をとるか、病人とさへいやア、いきてもしんでも損をしたことはないに、油断して脈さへも見なんだから、今夜のはなんにもならないの龍田詣。がいにしやれたら少し腹がへつただね。コリヤ勝手に茶漬でも貰つてくんべい。ト、手もちわるく、さう／＼に出てゆくと、其内いろいろかいほうするに、病人はたちまちわすれたやうにこゝろよくなりて、上方「コリヤもう、思ひがけもない。わしや夢見たやうぢや。みなさま、いかいおせわでござりましたわいな。彌「マアおこゝろよくてめでたい／＼。おめへ御持病が癩疔と見えやしたが、さうかね。上方「さうぢやわいな。わしてんかんが持病で、血をみるとおこりますさかい。北「ホニニさういひなさりやア、こゝろがちだらけになつてゐるわ。コリヤどうしたのだ。ていしゆ「イヤこゝろにかいたものが血だらけになつてゐる。なに／＼、きせうもんのこと、ひとつ御もとさまと夫婦の契約いたし候うへは、けつして外へは縁づき申まじく候。上方「ア、コレ／＼、それよまれてたまるものかいな。こちへくだんせ／＼。彌「イヤよますにいでんでは、このむねが、すまアぬ。トテチンとけつかる、ハ、ハ、ハ、上方「これはなさけないこつちや。彌「そのあとをよませせう。もし此こといつわり候へば、日本六十餘州の神々の御罰をかうふり申べく候。太郎さま。ねやより。

とかいてあるが、この太郎さまとは。ていしゆ「ソリヤこの太郎兵衛さま。上方「イヤモめんぼくならうて、わしや穴へなどはいりたいたいわいな。北「ねやとはだれだ。ばんとう「コノおむす、楊弓のおねやといつては名代のしろもの。彌「わしやアだに、かんにんしてくれなさりへ／＼。彌「コリヤ太郎兵衛さま、無躰ながらおめへの孫といつてもいゝものを女ぼう約束、イヤはやあやかりものだ。おうらやましい。上方「もう／＼いうてくだんすな。わしやまたてんかんがおこしたい。コレつふりからだら／＼と、このながれた汗を見てくだんせ。ホンニわるい病で、もくがわれて、わしやこないなぢゆつないめにあうたことはないわいな。ト、まじめになりて、あたまをかき／＼いひわけするもをかしく、大わらひして、ていしゆもばんとうもおおぎにたまらず、さう／＼にけし出してゆくと、彌次郎北八もころげまはりて、

癩疔もえてかつ手なる病なれおのが不埒は見てもおこらず

ふたりもわらひだちにして、おのがざしきへ立かへり夜もはや更たればそのまゝ打ふしたるが、短夜のことなれば、ひと寐入にして日の出たる頃、いちどきにめをさまし、ねながら摺火打とりいだし、たばこのみながら。彌「ナントゆうべはよつぼどをかしかつたちやアねへか。となりのおやぢめも、上がったものに似合ねへ、よつぼどばかな錢も遣ふと見えた。なんでもあれは大店向の番頭でもしてゐて、工面のいゝやつと見えるわへ。北「さうさ。アノべらぼうめをあやなして、ちつとかねでもかりるさんだんがありさうなものだに。彌「イヤおれもさうおもつたから、ゆうべちらときつかけて見たところが、おつりきなやつよ。かねはいくらでも、かしてやらうといつたから、ちげへはあるめへが、たしか今朝はもうたつといふことだ。なんぞちよびとしたみやげものでもやつて、たゝねへうちにどうぞ、ぶづくり出してやりてへものだ。ト、さう／＼おきあがり、きた八とさうだんして、ひぐわしのをりをとりよせ、となりざしきにちさんせんとせし所へ、上がったもの二日おひやらがんしよくわるく、しほ／＼として来るを見るより、ふ

たりはそこらとりかたづけ、ほこりをはたきい出して、
 此「コレハおとなりのだんな、サア〜これ〜」。彌ま
 ことに昨夜はありがたうござりやした。ときにモシけさ
 ほどおあんばいはどうでござりやす。上方「イヤモしゆつ
 ときたたいわいな。此「ナニサあのうつくしいものでは、
 てんかんどころか、わつちらなどはしんでもいゝね。
 上方「ハ、これは御あいさつぢや。彌「さて昨夜承れ
 ば、けふおたちといふこととでござりやしたが、いよく
 さやうでござりやすかね。上方「さよぢやわいな。もちと
 むよかとおもうたが、あんまり歸國がおそなるさかい、け
 ふは九つつもりでござりますわいな。彌「せつかくおな
 じみ申て残りおほい。コリヤすこしばかり御道中のおな
 ぐさみに上げやせう。ト、ひぐわしのをりをさしだせ
 ば、上方「コリヤおきのどくなこつちやわいな。此「なん
 だのかだのと、大きにおせわになりやした。彌「ときに
 おなじみもうすが、昨夜もあなたが御深切におつやつ
 てくださるものだから、ちとあまへたやうだが、をりい
 つておねげへがござりやす。上方「わしも近頃いかゞしい



こつちやが、御ない〜御相談申たいことがござりますわいな。外のこつちやない。けふこゝもとをたつにつけて、諸
 拂なにかかやに持合せのかねがふそくて、えいやつと、はらひだけはありますが、道中のつかひがねがたらんさか
 い、何ともおなじみもないに、こないこといふはあつかましいやうぢやけれど、おまいはえどで質兩替御商賣になさ
 れて、御大家のおくらしのやうに昨夜おはなしてあつたと、わしの家來が申すさかい、御さうだんといふのはこゝ
 のこと、わし所持の品をそれほどのもの、お預申すさかい、金十兩ばかりおもちあはせのうち、おかり申たいもの
 ぢやが、どないなものでござりましょぞいな。ト、おもひもよらずあつちから、せんをこされてあてがちがひ、さて
 は三匁の菓子のをりひとつ、ぼうにふつたかと、彌次郎あきればてゝきた八とかほを見合せ、彌「それはおもひがけも
 ねへ。ありやうは、わつちのはうからおかり申たいつもりで、ゆうべちよとそのことをおはなし申たら、かしてやら
 うといひなされたものだから、あてにしてをつた所、そのおはなして大きにちからがおちました。上方「ハアわしゆう
 べどないなこといふたやら、えらう酔て他愛なかつたさかい、ねからはから、ちつともおぼやせんわいな。此「これ
 はつまらねへ。彌「なるほど、コリヤつまらねへ。上方「わしもねからつまらんわいな。ト、三人にらめくらして、は
 なつきあわせ、ゆうべのげんきにひきかへ、ぐんにやりとなりてあるところへ、あんまのべく市、さぐり〜來りて、
 可市「イヤア上がたのだんばうさま、こゝにだな。いよく〜けふおたちでござへますか。モシおえどのだんばうさまが
 た、ゆうべはぶしつけをいたしました。わし今このとなりのやどに、こんぢうから逗留してあるお客のそこへいつて來
 ましたが、このお客、何だちうがな、太平樂べいこきをつて、がいにさわぎさらかしたが、けさたゝしやるのではら
 ひのかねが、ずだいたらないといつて、生簀や、なにはやの女共にせたげられて、めつたへちを、ぶんまくつてけつ
 かつた。わしのおんまの錢さへ、けんくわづらしてよこつたが、又こゝのだんばうさまの御出立はどんなものでござ
 りさア。くわつとしたおたちぶるまひがあんべいと、わしゆうべのはらなほしに來をつたが、ちやうどえい鮎がきた

と、今浪花屋のおとこがさういつきやア。あつつめを魚田ウツメにして、あつかんでやらかしたうございさア。サア／＼これはどうだかな。だんばうさまたちやア、ねつからうかない。うかせや／＼ハ、ハ、ハ。サア／＼これからさだけ／＼ト、人のこゝろもしらずに、わめきちらかす。かみがたものも彌次郎も、ろく／＼あいさつもせず、ためいきばかりつきて、ひやうしなければべく市は、こそ／＼とにげ出し、上がったものも打しほれて出てゆくと、あとに彌次郎つまりらぬかほして、小ばらはたてどもせんかたなく、菓子ウツメの折三奴ウツメのそんとなりて、はては大わらひとなりはなしのたねとはなりにける。

續 膝 栗 毛 十編 下冊 終

昭和五年七月二十八日 印刷
昭和五年七月十五日 發行

特 製
第二十六回 配本
追加募集
第二十二回 配本

【非 賣 品】

帝 國 文 庫
(第三十三篇)

膝 栗 毛

編輯者 兼 發行者
右代表者
取締役社長

株式會社 博文館
大橋進一
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者 君 島 潔

發行所

株式會社 博文館

振替口座東京二四〇番

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

製版所 共同印刷株式會社
印刷所 共同印刷株式會社
製紙所 王子製紙株式會社
製本所 井上製本所
函所 香取製函所

50

708

たりはそこらとりかたづけ、ほこりをはたきだして、

一

